

354

100



始





334-100

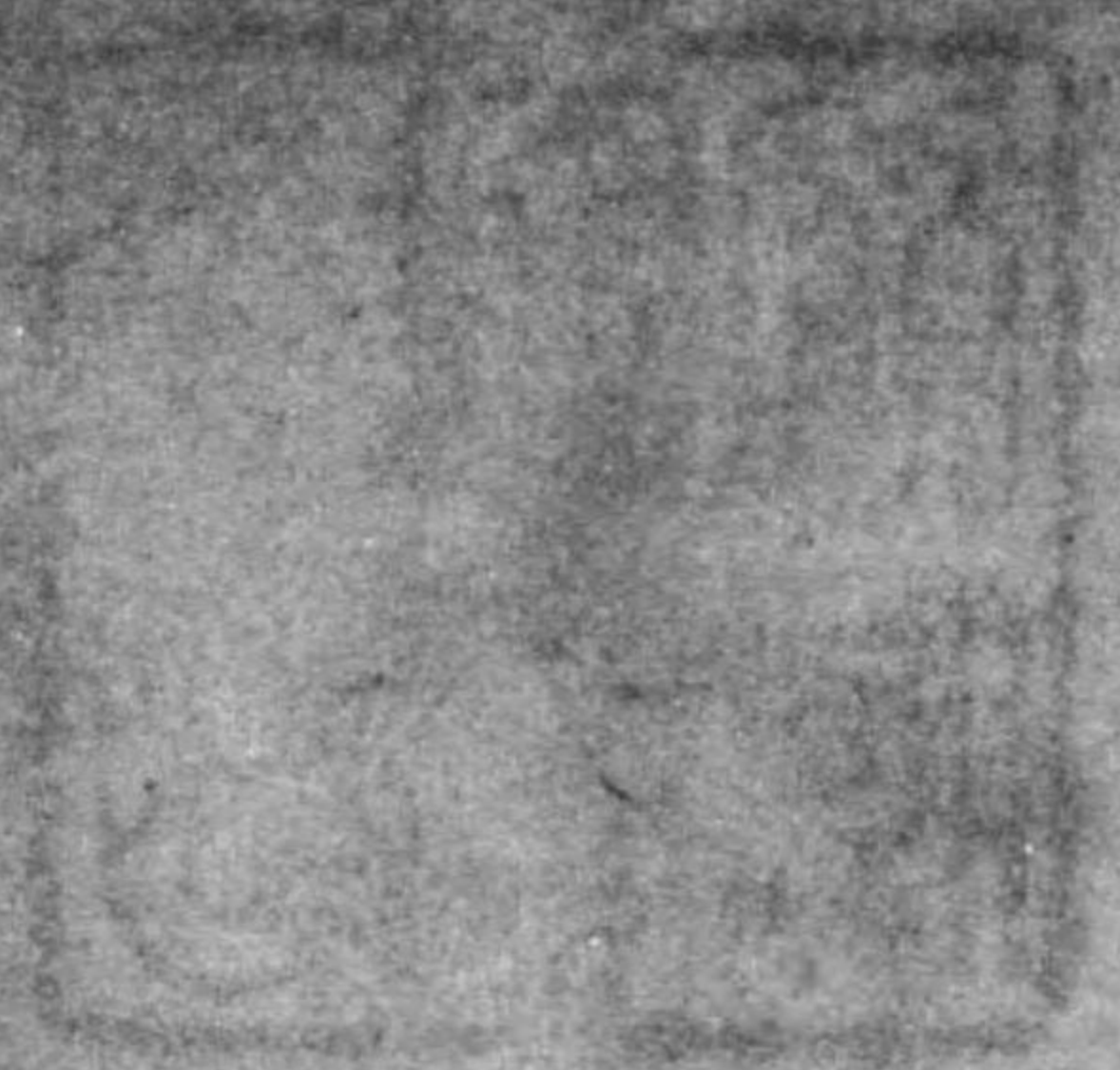
亞
細亞大觀

大正
7. 6. 11
内交

集馬漸
其化



民山滿



其の序

序

亞細亞ハ世界最古ノ文明國也。今ヲ距ルコト三千年前、
今ノ歐洲諸國ガ鹿豕狉々、野蠻ノ郷ニ棲息シツ、アリ
シ當時ニ於テ、燦然タル光輝ヲ世界ニ放チタルモノハ、
印度ノ文明也。波斯ノ文明也。小亞細亞ノ文明也。支那ノ
文明也。其ノ面積ヲ云ヘバ、一千七百萬方哩、其ノ人口ヲ
云ヘバ十億ヲ超ユ。其ノ民族ハ嘗テ世界ニ濶歩横行シ
タリ。其ノ哲學、宗教、美術ハ、世界ニ亘リテ偉大ナル感化
ヲ與ヘタリ。其ノ武力ハ突厥人、蒙古人ニヨリテ世界ヲ
震撼シタル歴史ノ印象ヲ貽シタリ。其富源ハ世界ニ冠

絶シ、今ヤ列強國ノ齊シク垂涎スル所ト爲ル。而シテ東力西漸、成吉思汗ノ大帝國建設ニ至リテ其ノ絶頂ニ達シタリ。

第十六世紀以降、西力東漸シ來リ、第十九世紀ニ及ビ、歐洲ノ新文明ハ舊文明ヲ壓シ、新勢力ハ舊勢力ヲ壓シ、亞細亞ノ大半ハ、殆ド其ノ政治的運命ヲ失シタリ。此時ニ當リ、國際競争ノ十字街頭ニ屹立シ、全亞細亞民族ヲ代表シテ、西力東漸ノ勢ニ抗シ、狂瀾ノ砥柱ト爲リツ、アルモノハ、獨リ我が大和民族アルノミ。而カモ我が大和民族モ亦太平洋沿岸、到處其ノ排斥スル所ト爲リツ、アリシハ、歐洲大戰前ノ事實ナリシ也。

然レドモ、天道循環、還ラザルハ無シ。歐洲大戰ハ彼等ノ文明的自殺也。歐洲ノ文明ハ、此大戰ノ爲ニ、一炬ノ下ニ焦土ト爲レリ。而シテ今ノ歐洲文明ガ果シテ末路ニ近キタルヤ否ヤハ、茲ニ斷言スルコト能ハズト雖モ、亞細亞民族ガ歐洲大戰ヲ一段落トシテ、亞細亞的ニ自覺シ、精神的ニ自覺シ、世界的ニ自覺セザルベカザラルハ、今日ニ在リト謂ハザル可カラズ。然ラバ則チ歐洲大戰ハ、亞細亞復興ノ大機ニシテ、此大機ヲ制スルト否トハ、亞細亞民族ノ決心如何ニ在リト謂フベシ。

我が黒龍會ハ、大亞細亞主義ヲ唱道スルモノ茲ニ年アリ。歐洲大戰、世界變局ノ今日ニ際シ、「亞細亞大觀」ヲ編纂

シテ之ヲ世ニ問ハムトスルモノ、蓋シ大亞細亞主義實現ノ一端ニ資セムトスルガ爲メノミ。酒卷鷗公、博識能文、最モ亞細亞各國ノ地理及ビ歴史ニ精通ス。本會ガ之ニ囑スルニ、本篇編纂ノ任ヲ以テシ、加フルニ會員諸氏ノ熱心ナル援助ヲ以テシ、始メテ編纂ノ業ヲ終ヘ、之ヲ刊行スルニ至リタル苦心ト勞力トハ、予ノ深ク多トセザルヲ得ザル所也。而シテ予ハ今日ヲ以テ亞細亞民族覺醒ノ一大轉機トシテ本書ヲ天下ニ擴布スルヲ辭セザラムト欲ス。

大正七年五月中浣

黑龍會主幹

内田良平識

緒言

本書は亞細亞の大勢と列強角逐の趨勢とを説き、戦後來るべき我國の大國難を豫告し、西力東漸の力衰へ、東力之に代はる曙光の現はれたるを論じ、以て我國民の覺醒を促すを目的として編纂したるものなり。初めは亞細亞時論の新年號に附録とする計畫にして頁數を百、寫眞を八十と豫定し、一國一地方に對し、三頁乃至五頁の範圍を超えざることとせり。編纂の仕組は國毎に各専門の大家に執筆を囑する筈にして、昨年十一月十日を以て編纂に着手したりしが、多くの點に於て計畫の誤れるを發見したり。即ち世界第一の大陸にして、十億の人口を包容する亞細亞の地理、歴史、政治、人情、風俗を僅々百頁の紙面に網羅するは

小學校の教科書よりも簡略となり、其結果讀者をして嚼蠟の歎に堪へざらしむべし。又執筆者の多きは繁簡各趣を異にし、順序體裁一様ならず。議論亦往々衝突を免れざるべきが故に、當初の計畫を變じ、頁數を二百に増加し、専ら同人にて編纂することなし、亞細亞時論主任葛生能久氏は一般の事を處理し、又内容の分量を定め、按排を整へ、社員長崎武氏及柴田安正氏は東部、北部、中部、西部の亞細亞の地理、人情、風俗を擔任し、社友滿川龜太郎氏は前印度、後印度及蘭領印度諸島の地理、歴史、人情、風俗の一部を擔任し、予は全部の政治論と南方亞細亞以外の歴史とを擔任し、兼ねて文章を整一にするが爲め、全部校閲の任に當れり。又亞細亞の製圖は社友木村鷹太郎氏に囑し、十二月二十日を以て脱稿したり。

かくて本書は一月一日を期し、亞細亞時論の附録として讀者諸君に見ゆべき筈なりしも、當時故ありて果さず。乃ち之を單行本として發刊する計畫を立て、頁數を三百に増加し、前の原稿を改訂し、又は新に稿を立て、成し得る限り内容を充實し、且つ簡潔整備のものを公にせんことを期し、拮据精勵、編纂に當りしも、材料の集まること多きに隨ひ、慾望亦益々増長し、遂に頁數三百七十、寫眞百五十有餘に上り、遂に豫定を超過するに至れり。又最初印刷したる地圖は疎にして不完全の點あり。且つ最近バグダード鐵道中、ラス・エル・エーン——ニシビン間と、バグダード——バストラ間と、布哈拉鐵道と、蘇士鐵道との新に成れるの報あり。是に於て全部を改正し、新に版を起せり。

此の如き理由の下に上梓大に延引して今日に至れるは當初

の期待に反し、讀者諸君に背くこと大なりと雖も、改訂増補、大に面目を改めたるを以て、或は此等の罪を償ふに足らん歟。若し夫れ讀者諸君が此書を座右に備へて、以て参考の一助となさば幸甚。

大正七年五月十五日

編輯主任 酒卷貞一郎 識

目 次

(一) 次 目

一 總 論……………一

二 支 那……………九

 位置……………九 面積、人口……………九 人種……………一〇 政治上の區劃……………一二 都市……………一二 産物……………一三 工業……………一四 鑛業……………一四 鐵道……………一五 滿洲の産物……………一五 蒙古の産物……………一六 新疆の産物……………一七 西藏の産物……………一八 日本との通商關係……………一八

(イ) 支那本部……………一九

 歴 史……………一九

 政治上の地位……………二七

 風 俗 服裝……………四〇 婚姻……………四二 誕生……………四四 宗教……………四五 葬式……………四七

 滿蒙回の政治上の地位……………四九

(口) 滿洲

歷史……………六二
風俗 俗服裝……………六七 飲食……………六八 住居……………六九 宗教……………六九

(ハ) 蒙古

歷史……………六九
風俗 俗服裝……………七八 飲食……………七九 住居……………八〇 婚姻……………八〇 誕生……………八一 宗教……………八一 葬式……………八三

(ニ) 新疆

歷史……………八三
風俗 俗服裝……………八六 婚姻……………八八 誕生……………八九 宗教……………九〇 儀禮……………九一

(ホ) 西藏

政治上的地位……………九二

三 西伯利亞

歷史……………九七
風俗 俗服裝……………一〇二 住居……………一〇三 婚姻……………一〇四 誕生……………一〇四 宗教……………一〇五 葬式……………一〇九

位置……………一〇九 地勢及氣候……………一一〇 面積、人口……………一二四
人種……………一二四 行政區劃……………一二五 都市……………一二六 產物……………一二六

日本との關係……………一二八
歷史……………一二八
政治上的地位……………一二二
風俗 俗服裝……………一二八 住居……………一三〇 飲食……………一三一 婚姻……………一三二 宗教……………一三四 葬式……………一三五

四 露領中央亞細亞

位置、面積、人口……………一三六 政治上的區劃……………一三七 都市……………一三九 日本との關係……………一三八 產物……………一三八 宗教……………一三九

五 高加索

係……………一三九

歴 史……………一四〇

政治上の地位……………一四四

風 俗 サルト人の衣服……………一四七 剃髪……………一四七 土耳其斯坦の婦人……………一四八 麴
麴の尊敬……………一四八 婚姻の仕度……………一四九 踊子……………一五〇 帽子……………一五〇
潔癖……………一五〇 儀禮……………一五〇 葬式……………一五一 キルギス族……………一五二
土耳其格曼族……………一五四 角力……………一五四

六 亞細亞土耳其格

位置、面積、人口……………一五五 人種、宗教……………一五五 政治上の區劃……………一五五

………一五五 都市……………一五六 產物……………一五六 日本との關係……………一五六

歴 史……………一五七

政治上の地位……………一五九

風 俗……………一六三

七 亞刺比亞

位置、面積、人口……………一六五 人種、宗教……………一六六 政治上の區劃……………一六六

………一六六 都市……………一六七 產物……………一六七 日本との關係……………一六七

歴 史……………一六八

政治上の地位……………一七三

風 俗 服裝……………一七九 誕生……………一八一 婚姻……………一八四 宗教……………一八七 葬式……………一九一

八 オーマン國

位置、面積、人口……………一九二 人種……………一九三 政治上の區劃と都市……………一九四

………一九三 產物……………一九四 日本との關係……………一九四

歴 史……………一九四

政治上の地位……………一九五

風 俗 服裝……………二〇二 武器……………二〇三 飲食……………二〇四 住居……………二〇四 婚姻……………二〇五
誕生、葬式……………二〇五

宗 教……………二〇五

九 波 斯

位置、面積、人口、人種、都市、產物……………二〇八

歴 史……………二〇八

位置……………二一〇 面積、人口……………二一〇 人種……………二一〇 都
市……………二二一 物産……………二二二 日本との關係……………二二三

歴 史……………二二三

政治上の地位……………二二三

風 俗 服裝……………二二三 住居及飲食……………二二四 婚姻……………二二四 葬式……………二二五

宗 教……………二二五

位置、面積、人口……………二二九 政治上の區劃……………二三〇 人種……………二三〇

宗教……………二三〇 都市……………二三一 產物……………二三二 日本との
關係……………二三三

歴 史……………二三三

十 亞 富 汗 斯 坦

十一 印 度

政治上の地位……………二三七

風 俗 服裝……………二五六 婚姻……………二五六 葬式……………二五七

位置、面積、人口……………二五八 地勢……………二五八 政治上の區劃……………二五九

人種……………二六一 言語……………二六二 產物……………二六五 都市……………
二六六 日本との關係……………二六六

歴 史……………二六七

政治上の地位……………二七〇

風 俗 服裝……………二八〇 飲食……………二八三 祭禮……………二八四 婚姻……………二八六 誕生……………二八八

宗 教……………二八八

ネパール……………二四九

位置、面積、人口……………二四九 人種、宗教……………二四九 都市、產物、其
他……………二四九 風俗……………二九五

ブータン……………二九五

位置、面積、人口……………二九五 人種、宗教……………二九五 都市、產物其
他……………二九五

シツキム……………二九五

位置、面積、人口、人種、宗教、都市……………二九五 產物、其他……………二九六
俾路直斯坦……………二九六

位置……………二九六 面積、人口、人種……………二九六 政治上の區劃……………
……………二九六 宗教……………二九六 都市……………二九六 產物……………二九七
風俗……………二九七

十二 緬 甸……………二九八

位置、面積、人口……………二九八 人種……………二九八 宗教……………二九九
都市……………二九九 產物……………二九九

歴 史……………三〇〇
政治上の地位……………三〇一
風 俗 服裝……………三〇二 住居……………三〇三 誕生……………三〇三 結婚……………三〇五 葬式

……………三〇六

十三 暹 羅……………三〇六

位置、面積、人口……………三〇六 政治上の區劃……………三〇六 人種、宗教
……………三〇七 產物……………三〇七 都市……………三〇七 日本との通商關係
……………三〇七

歴 史……………三〇七
政治上の地位……………三〇九
風 俗 服裝……………三一一 飲食……………三一一 住居……………三一一 婚姻……………三一一 誕生
……………三一一 宗教……………三一二 葬式……………三一二

十四 佛頭印度支那……………三一五

位置……………三一五 面積、人口、人種……………三一六 政治上の區劃……………
……………三一六 都市……………三一八 產物……………三一八 日本との通商關係……………
……………三一九
歴 史……………三一九

十五 馬來半島

政治上的地位……………三二〇
風 俗 服裝……………三二四 住居……………三二四 宗教……………三二五

面積、人口……………三二六 人種、宗教、都市……………三二六 產物……………三二五
……………三二六 日本との通商關係……………三二六

歷史……………三二七

政治上的地位……………三二七

風 俗 服裝……………三三二 住居……………三三二 婚姻……………三三三 葬式……………三三四

十六 東印度諸島

瓜哇……………三三五 スマトラ……………三三五 セレベス……………三三六

ボルネオ……………三三六

十七 比律賓

面積、人口……………三四二 人種、宗教……………三四二 都市……………三四二

產物……………三四二 歷史……………三四三

十八 南洋新占領諸島

風 俗 服裝……………三四三 住居……………三四四 奇習……………三四四

位置……………三四六 面積、人口……………三四六 人種、宗教……………三四六

政治上の區劃……………三四六 港灣……………三四六 產物……………三四七

歷史……………三四七

政治上の地位……………三四八

風 俗 服裝……………三五三 住居……………三五四 飲食……………三五四 婚姻……………三五四

葬式……………三五四

本文挿入寫眞及凸版

歷史、人物、地理、風俗類 壹百三十葉

附亞細亞現勢地圖

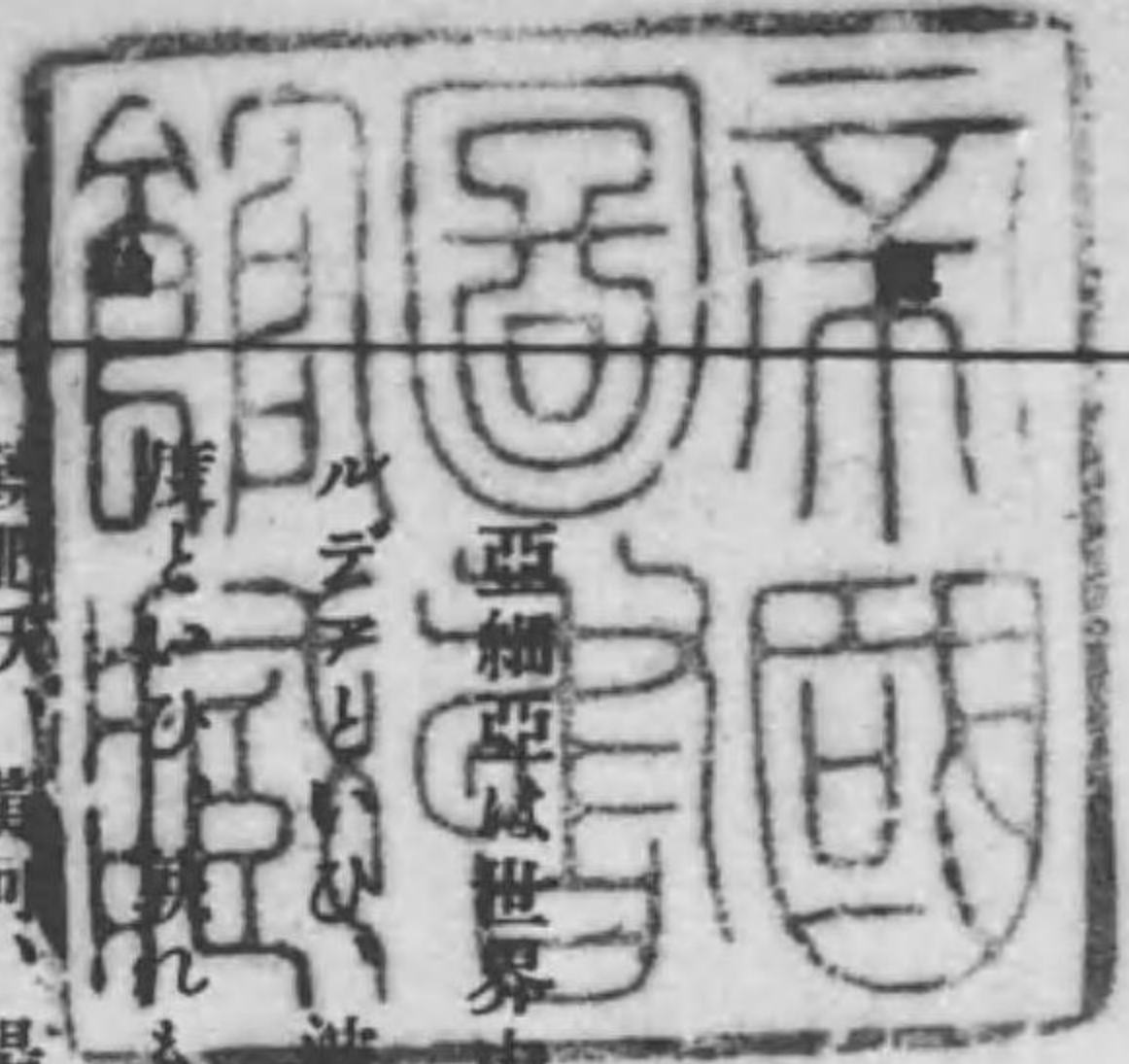
壹 葉

目 次 終

亞細亞大觀

黑龍會編纂

一 總論



(一)
亞細亞は世界中最も早く文明の域に達した大陸である。バビロニアといひ、アッシリヤといひ、カルデヤといひ、ペルシアといひ、エジプトといひ、ギリシアといひ、ローマといひ、モリスといひ、マカドニアといひ、ビザンチウムといひ、アラブといひ、トルコといひ、モンゴルといひ、チベットといひ、シベリアといひ、中央アジアといひ、南洋といひ、東洋といひ、南洋といひ、北極圏といひ、南極圏といひ、地球の大部分を占むる。其土地は豊饒肥沃、黄河、揚子江、恒河、印度河、チグリス河、ユウフラテス河、アムドリア河、シル河等の流域は、其富世界に冠たるものである。其山は喜馬拉耶、葱嶺、崑崙、天山、亞爾泰、薩查、スタノオイ、ヤブロンオイ、興安、大行、秦嶺、北嶺、南嶺、巴顏喀喇、興都克西、スライマン、エルブルツ、大和嶺、タウルス等の諸連山綿亘し、樹木鬱蒼として千古斧を入れざる大森林あり、寶玉、金、銀、銅、鐵、錫、鉛、石炭、石油等、有ゆる礦物を出す。其人口は十億を越え、其民は純朴で、勇敢で、勤勉で、

祖先を崇び、忠孝を道としてゐる。此の如き天與の富と、此の如き優秀の人類とを有しながら、又此の如き光輝ある歴史を有しながら、其大半は歐羅巴人の羈縻する所となつて奴隸の境遇に甘んじてゐる。僅に餘喘を保つて一隅に獨立してゐるのは日本と支那とだけである。土耳其や、波斯や、暹羅や、其名は獨立と稱するも、其實は屬國で、國の大小こそ異なれ、基華、布哈拉、オーマン、ネパール、ブータンと敢て變りはない。僅か二箇國しかない獨立國も、支那の現状から推せば、將に滅ぶるに垂んとしてゐる。残るは唯だ日本一國あるのみである。豈に心細さの限りならずや。

十六七世紀以來西力東漸し來り、十九世紀の末葉には、亞細亞の大半は既に政治的存在を失ひ、二十世紀に入つては、支那の分割は靚面となつた。日本人は到る所で排斥された。米國で逐はれ、加奈陀で逐はれ、濠洲で逐はれ、南阿で逐はれ、往く所がないので、滿洲、蒙古に行けば露國に睨まれ、米國に妨げられ、支那に行けば英、米、獨、佛等の諸強から妨碍された。現大戦争が起らなかつたら、日本は今頃は支那からも或は驅逐されて居たかも知れぬ。

現戦争の爲に、日本の排斥と支那の壓迫とは一時緩和したが、戦争が終つたら、彼等は戦前よりも十倍の力で再びやつて來るに相違ない。歐羅巴は現戦争で莫大の損害を蒙つた。然も彼等は之を自個の大陸で回復することが出來ない。亞米利加や、阿弗利加に於ても回復することが出來ない。其で亞細亞に麇集し來つて、亞細亞の肉で其損害を補はうとするに相違ない。彼が如き天與の富を有つてゐ

る十億の亞細亞人は彼等の搏噬攘奪を坐視して可なる歟。亞細亞の先覺者として、又東洋の盟主として自任する我六千萬の日本人は指を咬へて、彼等の爪牙を傍觀して可なる歟。

然れども物窮れば必ず變ずるもので、亞細亞今日の衰微は既に其極に達したから、最早變轉の期に達したものと謂つてもよい。國家の壽命は三百年を以て常命とし、五百年存在するものは長い方である。恰度人間の壽命は五十で、七十は古來稀なりと同じである。支那歴代の王朝の壽命も、歐羅巴各國の盛衰興亡も、大抵三百年を一期としてゐる。故に現戦争で露西亞が瓦解したのは、獨逸に敗れたから瓦解したといふ譯ではなく、敗けなくとも瓦解すべき運命になつてゐたのだ。恰度八十の老病の爺さんが強盜に殺されたやうなもので、強盜が刃を下さなくても爺さんは死ぬべき運命であつたのだ。英國の如きももう三百年経つてゐるから、老境に入つたものと思はれる。或英國の著名な記者が「英國は世界の何れの處へ行つても悪まれる。世人は英國を横暴だと稱してゐる。現戦争が起つてからは特に激しく攻撃される。世人は何故にしかく英國を惡み、英國を攻撃するだらうか。英國の識者は最早英國の隆運の長くないのを知つてゐる。彼等は希臘や羅馬の衰微したのを知つてゐる。彼等はスーズやカルタゴの廢墟を見た。彼等はスピキオがカルタゴの陥落して燄烟天に漲るを見て、羅馬の前途も亦此の如くなるだらうと歎息したのを知つてゐる。西班牙然り、和蘭然り、世豈萬年の國家あらんや。彼等は英國も亦天運循環の原理に漏れないのを知つてゐるから、彼等は愛蘭や印度を獨立させやうと

思つてゐる。のみならず現戦争の様様では英本國を引揚げて、加奈陀か濠洲に移住しやうと思つてゐる。か程まで盛衰の原理を觀じて、大覺悟をしてゐる英國を世人は何故にそんなに惡んで、攻撃するだらうか』と話したことがある。成程英國の首相ロイド・ジョージ氏が世運の推移を觀破して、勞働問題を解決し、愛蘭や印度に自治を許さうと演説したのを見ると、英人の識者は此記者のいふ通り、確に世運の變轉を洞察してゐるやうだ。但夫れ英人の中には今猶ほ舊時の夢を辿つて愛蘭や印度を壓制しやうとしたり、他國の發展するのを嫉んで之を妨害したりする。支那にゐる英人などは特に甚しいもので、彼等の行動がどれ程英人の信用を害したか知れない。

兎に角此記者が觀念した如く、現戦争は世運隆替の一轉機であることは確である。で東漸してゐた西力が衰微して、萎縮してゐた東力が頭を擡げだすやうになるだらう。東西の勢力は國家の盛衰と同じやうに三百年前後で消長してゐる。現在歐洲強國の勢力が東漸して來てから足掛け三百年近くになつたから、もうそろ／＼衰運の坂路にかゝつて來た。波斯西漸の勢力がテルモビリーや、サラミースで挫折した如く、露西亞勢力の東漸は奉天や、日本海で挫折した。挫折した波斯が滅亡して、歴山が之に代つて東漸した如く、挫折した露國が瓦解したから、東力が之に代るべき氣運に向いて來たのは確である。然し其處まで行くにはまだ幾多の變遷を経なくてはなるまい。露西亞が瓦解し、英國が老いたとするも、獨逸が勃興して、頻りに全亞細亞を狙つてゐるから、此勢力を打摧かなくては「亞細亞

は亞細亞人の亞細亞なり』といふ氣運には乗れない。故に吾人亞細亞人たるものは至剛の決心と至大の努力とを以て、一大隆替の變轉機に乗じてはならぬ。

今は實に非常重大の時である。吾人亞細亞人が此大氣運に乗じて飛躍し得るか否かの定る時である。然も吾人は之を覺らないで、徒に政争に熱中してゐるが、此調子で行けば現戦争の終結した曉、吾人の咽喉は既に歐米人の爪牙に罹るを見るだらう。其時になつて吾人が目を覺すも、時機既に後れて亦如何ともするとは出來ない。歐米人は既に戦後日本の發展を妨ぐる爲に色々な計策を立て、ゐる。彼の鐵金禁輸の如きは即ち是である。米國が鐵金の輸出を禁止したのは、自國及歐洲の同盟國の需用に不足だからといふ譯ではなく、日本の大強國となるのを阻碍するが爲のやうに思はれる。又英國は之に就ても必ず相談を受けたらうと思ふ。英國も米國も共に日本が強國となるのを好まないから、之を掣肘して、強くなる材料を日本に遣るまいとしたのであらう。英米の二國はかうして置けば、日本は戦争の終るまで現状の儘で、強くなるまいと考へたに相違なからう。

英米が戦争の終るまで日本を元の通り弱くして置かうといふ意味は能く解つてゐる。彼等は戦後支那で活動して、戦争の損害を恢復しやうと企圖してゐる。其で日本が戦争中に支那で優勝の形勢を把握してしまつては、其計畫は水泡に歸する。日本を弱くして置きさへすれば、何時でも之を壓服することが出来る。其だから金や鐵を日本に渡さぬやうにしたので、つひ先頃問題となつた軍器借款や、風

鳳山鐵礦契約に對し、在支英米人等が、支那人煽動や新聞雜誌等で、あらゆる反對運動を試みたのも、亦た彼れ等が用意の周到なる、此ツマラぬ問題に對してさへ、或は禁鐵による折角の此の日本抑制計畫が尻抜けとなりはせぬかを氣遣つた結果である事は申す迄もない。吾が同胞は此處に禁鐵の消息を覺つたら、徒に政争にばかり熱中しないで、所謂未だ雨らざるに門戸を糊糶しなくてはならぬ。緊權一番土儀に上らなくてはならぬ。我先づ政争を止めて模範を示し、其から支那を説て内争を止めさせて、鞏固な政府を作らせ、經濟に於ても、軍備に於ても、兵器に於ても、外交に於ても、相提携し相同盟して、來るべき白禍に備へなくてはならぬ。是れ單り支那の保全の爲めばかりではない、我國自衛の爲めである。

支那は物資に於て無盡藏の寶庫である。我國は物資に於て甚だしく缺乏してゐる。然も支那は此等の物資を利用する智識を缺いてゐるに對し、我國は此等の智識を十分具へてゐる。故に支那は物資をドシ／＼我國に供給し、我國は此等の物資でドシ／＼工業品を製造して支那に供給しなくてはならぬ。即ち支那と我國とは相給共存の國である。軍事、外交、經濟、交通等、凡て共同でなくてはならぬ。故に支那の敵は我國の敵である。我國の敵は支那の敵である。故に支那と我國とは一國の如くに堅く結合しなくてはならぬ。故に兩國は協力して兩國の利益を侵害しやうとする外敵を防がなくてはならぬ。之が爲に我國は有らん限りの兵力を出し、支那も亦用ひ得べき兵を盡く出さなくてはなら

ぬ。故に支那は我國の將校を教師として十分兵を訓練しなくてはならぬ。又豫め外侮を禦ぐ爲めに、我國を模範として交通、財政、警察から農商工等百般の政治を改革しなくてはならぬ。支那の勉強は勿論容易なことではないが、我國の努力も亦一通りではない。かうなると我國防の範圍は甚だしく擴大してくる。

日清戦争前の我國防の第一線は、朝鮮半島の南部であつた。否寧ろ朝鮮海峡であつた。日清戦争後日露戦争前の國防第一線は大同江まで進んだ。日露戦争後は大に進んで吉林、長春から西北して興安嶺に達し、興安嶺に沿ひ南下して長家口附近に達する扇形地を國防の第一線とするやうになつた。現戦争後の我國防線は、我國が支那と切實に提携し、互に相給共存しなければならぬといふ理由から、又露國の瓦解の爲め、西伯利亞の危殆に陥るを防ぐ理由から、更に又日英同盟の義務で印度の境上を防禦しなくてはならぬ理由から、其の第一線はエニセイ河から亞爾泰山脈、葱嶺、ヒンヅクーン山脈、セイスタン及印度洋の一港チャハールを連結する線であらねばならぬ。此線以西の亞細亞全土は所謂緩衝地帯で、我文明を植ゑ付くべき地域である。故に此等の地域は戦後宜しく門戸を開放し、機會を均等ならしめなくてはならぬ。

此等の地方に住居する二億七千萬の回教徒と、幾百萬の佛教徒とは我國民と同じく、多くはウラル・アルタイ人種に屬し、勇敢で、堅忍で、天才的頭腦を有つてゐるから、我が國の文明を爰に植ゑ

付けたら、多くの年所を経ないで、立派な文明の民となるだらう。さうして我が國と相頼り、相扶けるやうになるだらう。是に於て我國は始めて東洋の盟主たり、全亞細亞の指導者たることが出来るのである。既に東洋の盟主たり、全亞細亞の指導者となつた以上、我國防第一線は土耳其格の西岸から高加索山脈を連ぬる線ではなくてはならぬと思ふ。蘇士は我國防第一線の玄關である。ダーダネルス、ボスフォラス、トレビゾンドは中門である。オレンブルグやウラルスクは北門である。我は此等の諸門と極東とを連結する爲めに鐵道を敷設せねばならぬ。即ち青島から君府に通ずる支那橫斷鐵道や、朝鮮から蒙古を貫いて裏海の北方に達する蒙古橫斷鐵道を敷設しなくてはならぬ。波斯や亞富汗斯坦や、オーマンや、基華や、布哈拉に我外交官を駐在せしめなくてはならぬ。土耳其に至つては支那と同様の親善を保たなければならぬ。此等は西門である。即ち表門である。更に裏門を願れば安南暹羅を経て星羅する南洋諸島がある。今迄は臺灣が此方面の國防第一線であつたが、今後は之をマリアナ、カロリンの群島まで進めなくてはならぬ。出來得べくんばサモアを玄關としなくてはならぬ。——東門即ち北亞米利加方面のことは言はぬが花だ、——此の如きことを言はば、多くの人は無責任の大言壯語なりと一笑に附するであらうが、之は唯り我輩の理想ばかりではない。我國民の理想である。幾年かの後には遂に必ず實現せらるべき理想である。之を笑ふものは近眼者流である。井底の蛙である。所謂燕雀である。壹んぞ鵠鴻の志を知らんや。

借て此の如き大抱負を實現させやうとするには、十分内政を整へた上に、千二百萬の兵を備へなくてはならぬ。千二百萬といへば我國總人口の二割である。千二百萬の兵を備へるには我國の教育制度を改革して、小學校から國民皆兵の準備をしなくてはならぬ。此等の問題は他日別に論ずることとし、茲には唯亞細亞の盟主たる大抱負を實行するには國民が亞細亞全土の政治上の關係と、地理、人種、人情、風俗、産物及交通等の詳細を知悉する必要があることを述べて置く。此意味で吾人は茲に此書を編述した。讀者が我趣意に賛同して、之を以て参考の一助となさば幸甚である。

二 支 那

位 置

北は亞爾泰、薩彥、ヤプロノオイ山脈と黒龍江とで露領西伯利亞と境してゐる。東は長白山脈で朝鮮に境し、黃海、東海、支那海に枕してゐる。南は結露山脈、南嶺山脈、雪嶺山脈、喜馬拉耶山脈で印度と境を分かち、西は阿爾泰、天山、葱嶺で、露領土耳其機斯坦と境を接してゐる。

面 積

總面積は三百九十一萬三千五百六十方哩である。此内支那本部が百五十三萬二千四百二十方哩、新

疆が五十五萬三千四十方哩、滿洲が三十六萬三千六百十六方哩、蒙古が百三十六萬七千六百方哩、西藏が四十六萬三千二百方哩である。總人口は三億二千六十五萬で、其中支那本部が三億二百一十一萬、新疆が二百萬、滿洲が千二百七十四萬、蒙古が百八十萬、西藏が二百萬である。

人 種

人種は大別すると(一)漢族、(二)滿洲族、(三)蒙古族、(四)土耳其格族、(五)哲伯特族、(六)苗裔族、(七)朝鮮族で、此外日本人もある。

漢族 黄河、揚子江の流域を中心として、五光のやうに四方に放射してゐる。

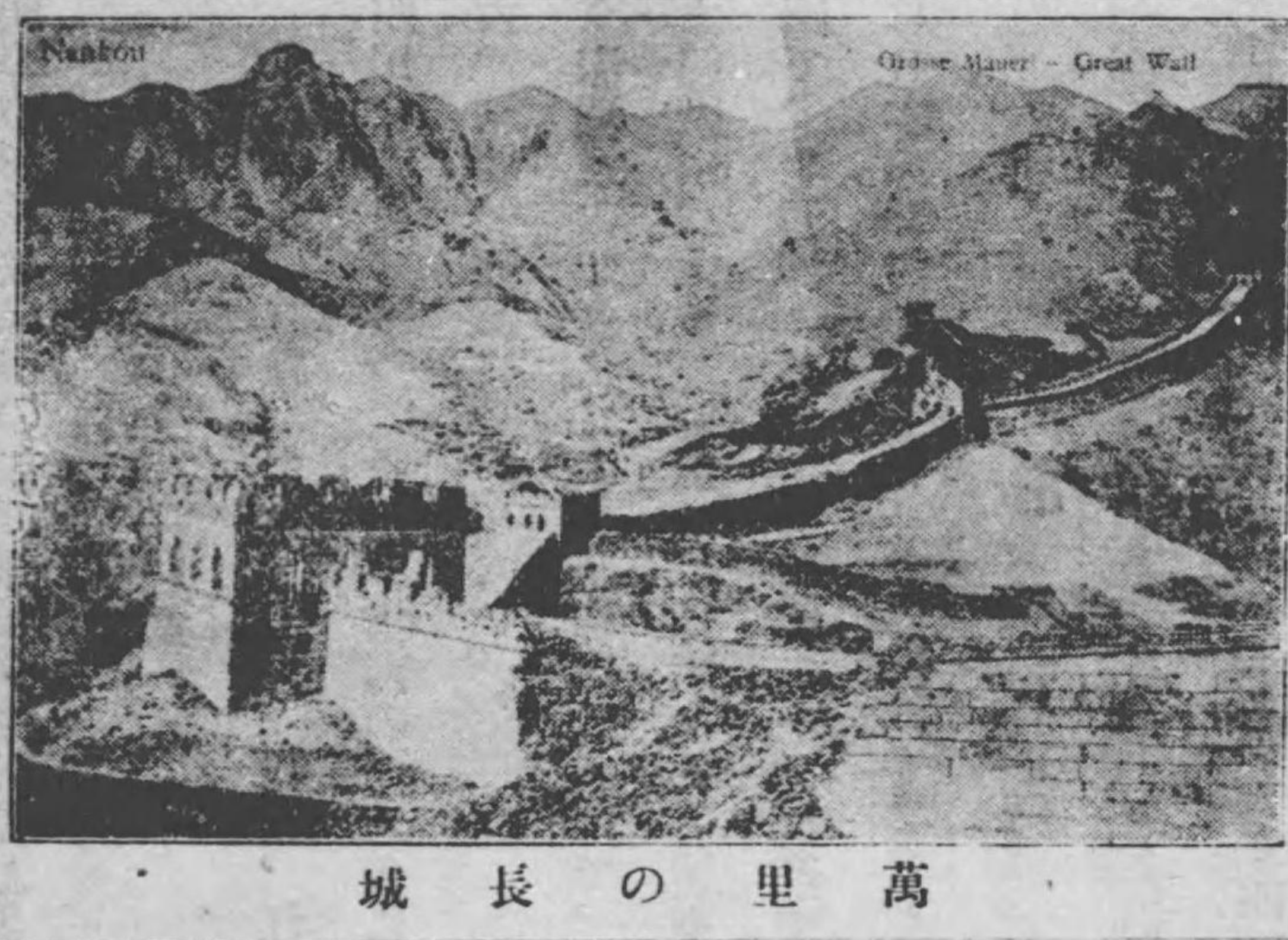
滿洲族 通古斯人と滿漢人との二つある。通古斯人は滿洲及東蒙古に住んでゐる。滿漢人は滿洲人の漢人化したもので、滿洲全部が中心で、蒙古、新疆に散在してゐる。

蒙古族 東蒙古族は、内外蒙古を根據として支那本部及滿洲に、少しばかり散在してゐる。西蒙古族は天山南北路、烏梁海、塔爾巴哈臺等に住んでゐる。

土耳其格族 西北から漸次移住して來た種族で、漢人と同一の言語を用ひてゐる。東干や、漢回や、繩頭回は之であつて、天山南北路と、青海と、西藏の西北部に住んでゐる。

哲伯特族 哲伯特人は西藏の南部に住んでゐて、固有の土人といはれてゐる。唐古特人は西藏の北

部から青海、甘肅の間に蟠居してゐる。西番子は四川と、雲南と、西藏の境に散在してゐる。



萬 里 長 城

力斐といふのも此地方に住んでゐる。

苗族 此族は古の所謂三苗で、西藏と後印度とに住んでゐる哲伯特族と同一の系統で、言語は皆單音を用ひ、七つの屬に分れてゐる。(一)苗子は湖南、四川、廣西、貴州、雲南の山間に散居して、漢人と全く分離して部落を作つてゐる。言語も習俗も皆漢人と異ふ。此中に着物で黒苗、白苗、華苗に區別してゐる。(二)獠は湖南、廣東に散居して、緬甸人に似てゐる。(三)黎は海南島に住んでゐる。(四)畲は福建、浙江、江西の一部に住んでゐる。(五)獠々は猿々又は獠々ともいふ。四川の南部、雲南の北部、貴州の一部に住んでゐる。頭巾の色で黒と白に分けてゐる。(六)蠻子は獠々と同種で、支那人が特に此名をつけたのである。雲南、四川の一部に住んでゐる。(七)摩娑は雲南の臨江府附近に住んでゐる。哲伯特族で、

朝鮮族 朝鮮人は滿洲に住んでゐる。此等の種族は風俗の部で詳しく説明しよう。

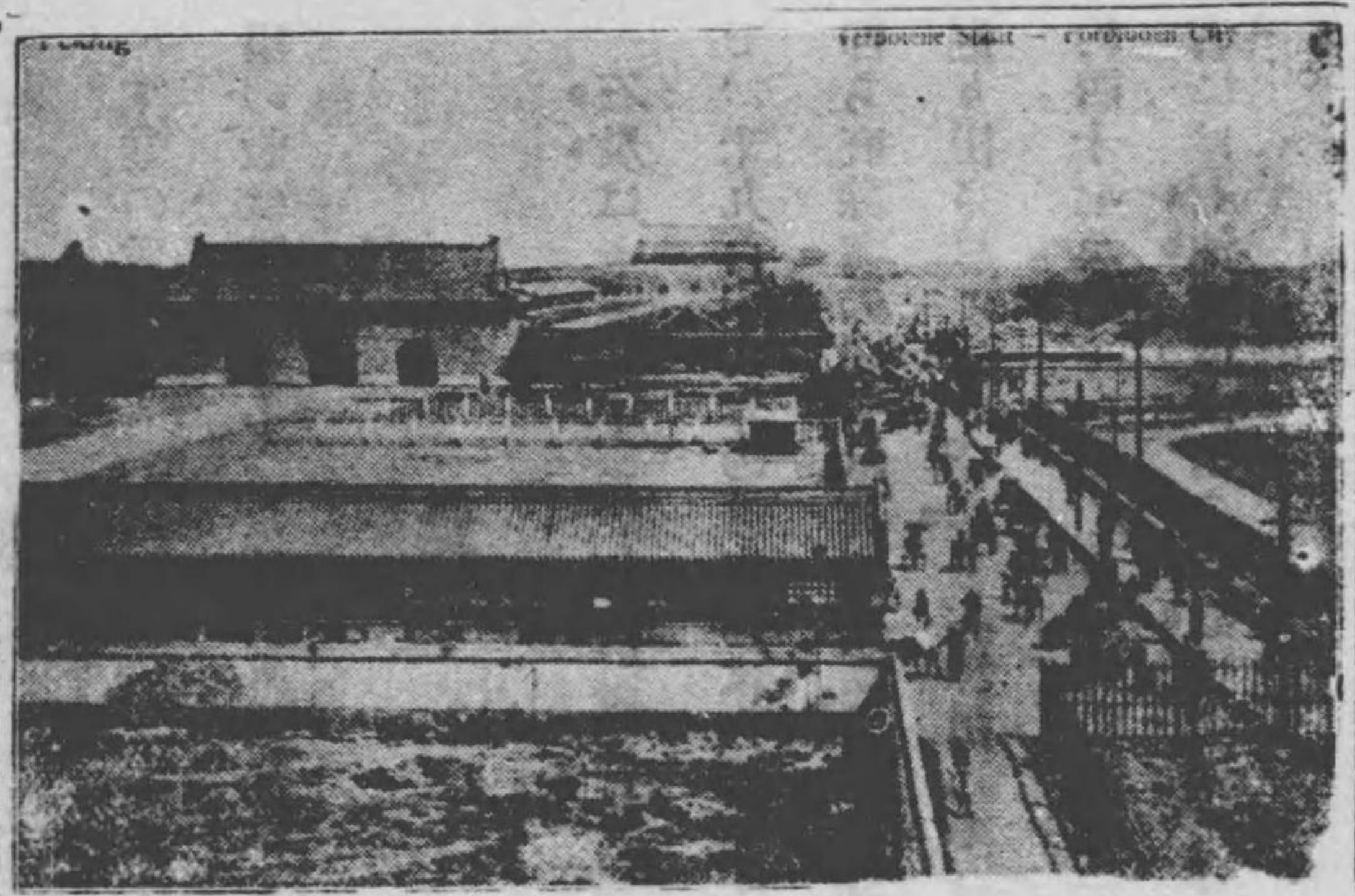
政治上の區劃

支那本部は直隸、山東、山西、河南、江蘇、安徽、江西、浙江、福建、湖北、湖南、陝西、甘肅、四川、廣東、廣西、貴州、雲南の十八省に分けてある。滿洲は奉天、吉林、黑龍江の三省に分け、蒙古、新疆、西藏は分けてない。

滿洲及內蒙古は日本の特種關係の地で、外蒙古と西藏とは獨立してゐる。歐洲戰爭以前の列強の勢力範圍は、山東が獨逸で、長江一帶と廣東と廣西の一部と西藏とが英國で、廣西の一部と雲南とが佛國で、北滿洲と外蒙古と新疆とが露西亞であつたが、開戦以來露國と獨逸との勢力が消滅して、山東は日本の勢力に歸した。

都市

人口十萬以上の大都市は、次のやうである。西安(百萬)、廣東(九十萬)、漢口(八十三萬)、天津(七十五萬)、北京(七十萬)、上海(六十四萬)、福州(六十二萬)、重慶(六十萬)、蘭州(五十萬)、武昌(五十萬)、蘇州(五十萬)、佛山(五十萬)、紹興(五十萬)、成都(四十五萬)、雲南(四十五萬)、漢陽(四



北京紫禁城の一部

- 十萬)、寧波(四十萬)、杭州(三十五萬)、南昌(三十萬)、湘潭(三十萬)、南京(二十七萬)、大原(二十三萬)、歸化城(二十萬)、開封府(二十萬)、蘭谿縣(二十萬)、涼州(二十萬)、無錫(二十萬)、鎮江(十八萬)、奉天(十八萬)、濟寧(十五萬)、安東縣(十四萬)、蕪湖(十三萬)、廈門(十二萬)、濟南(十萬)、吉林(十萬)、貴陽(十萬)、潮州(十萬)、濰縣(十萬)、揚州(十萬)、石龍(十萬)、亳州(十萬)

産物

支那は農業を本位にしてゐる。然し耕作は太古の遺風である。果實、小麥、裸麥、玉蜀黍、豆其他あらゆる穀物が出来る。此等は重に北方で、南方では米、砂糖、藍が出来る。

煙せられても、未だなか／＼産出する。茶は福建、湖北、湖南、江西、浙江、安徽、廣東、四川で多量に産する。絹は世界消費額の二割七分を産する。絹で支那の競敵は日本の一割七分と、伊國の二割

木綿は直隸の南部から長江流域一帯に出来る。阿片は禁

五分である。

工業

工業の重なるものは、紡績と毛糸とで、絹は上海、廣東其他の場所から出来る。千九百十四年には工場の数四十五あつた。其外製粉精米の工場もある。

鑛業

石炭は支那全土産しない處はない。世界第一といはれてゐる石炭の鑛區は、十三萬四千エーカーで、千九百十四年の産出高は六百三十二萬噸である。然し重なる炭鑛は外國人の手で經營してゐる。即ち直隸省の開平は英支合辦で、撫順は日本で、河南は英國である。其他江西、山東、河南等に澤山掘り出されてゐる。錫も亦澤山ある。山西が第一で、直隸、山東及滿洲にも澤山ある。鐵鑛の産額は約四十七萬噸である。大冶は世界第一といはれてゐる。之は日本が關係してゐる。揚子江上流や陝西省には石油が澤山出る。錫は雲南に澤山ある。銅は雲南が第一で、世界第一の銅の産地といはれてゐる。

鐵道

支那政府が持つてゐる既成鐵道は、京漢鐵道、京奉鐵道、京張鐵道、津浦鐵道、滬寧鐵道、正太鐵道、吉長鐵道、洙萍鐵道、道清鐵道、廣九鐵道、廣三鐵道、汴洛鐵道及江寧鐵道で、現在敷設中の國有鐵道は滬杭甬鐵道、張綏鐵道、津厦鐵道、隴秦豫海鐵道、浦信鐵道、漢粵川鐵道、同成鐵道、四鄭鐵道、寧湘鐵道、京師環城鐵道である。民業既成鐵道は新寧鐵道、潮汕鐵道、興國鐵道、房山鐵道であるが、其の大部分は外國借款によつて居る。又た現在敷設中の民業鐵道は南潯鐵道、廣東、粵漢鐵道である。國際既設鐵道は南滿鐵道、東清鐵道、山東鐵道、龍州鐵道、滇越鐵道である。既成輕便鐵道は南苑鐵道、齊昂鐵道である。

注意 歴史と政治上の地位と風俗とは便宜上支那本部、滿洲、蒙古、新疆、西藏即ち漢、滿、蒙回藏の三に分けて説明する。

滿洲の産物

農産は黒龍江の大部、吉林省の過半及遼寧省の十分の四は未耕地であるから、將來益々發展する見込がある。農産物の主要なるものは、普通作物では大豆、高粱、粟、玉蜀黍、稗、小麥、蕎麥、黍、

大麥、陸稻、小豆、水稻等で豆類が最も多く、耕作地の半を占めてゐる。特用作物は麻、煙草、罌粟、藍、棉花、木茸、藥種で、此外、果實、蔬菜等は到る處に産する。煙草は地味に合つてゐて良種を産し、果實は梨、栗、桃、李、梅、杏、林檎、葡萄、棗等を出し、殊に梨と葡萄と桃とが一番好い。蔬菜は一般に品質が良くて白菜は大根と共に土人の常食となつてゐる。又滿洲特有の柞蠶を産し、其類は豆類に次いで頗る多い。

鑛産は滿洲は無限といつてもよい位だ。金、銀、銅、鐵、鉛、石炭等が主要なもので、鑛區の廣大、包藏量の豊富なことは驚くばかりである。(支那本部の鑛産の部を参照されたい)。林産も亦豊かであるが、運輸の便のないのは遺憾である。主要なものは果松(五葉松)、杉松(樅)、黄花松(落葉松)、彭松、榆、楸(山胡桃)、楊、柞(柞)等である。魚類は鯛、鱈、鮭、鱒、鮑、鰱、鱔、鱈、鮑、蟹、牡蠣、海鼠等の數十種を産し、鹽は一年十七萬石三十二萬圓を産する。

製造工業は未だ盛ではないが、將來發達すべきは勿論で、現に製油、醸造、機織の三業が、逐次發展しつゝある。

蒙古の産物

畜産が主要で、牛、馬、羊、駱駝の四種中羊が一番多く、牛、馬が之に次ぎ、駱駝は僅少である。

農産は主として移住滿漢人の手で行はれ、高粱、大豆、粟、黍、玉蜀黍、小豆、小麥等を産する。此内高粱と大豆とが一番多く、小麥は僅少である。鑛産には金、銀、銅、石炭、鹽等があるが、交通不便な爲に採掘額は多くない。

新疆の産物

新疆は天産が甚だ豊富である。鑛産には金、銀、銅、鐵、鉛、寶石、硫黄、硝石、石膏、明礬、硝砂、石炭、石油、鹽等の有らゆる種類があつて、天山南北路の到る處の山中及河川に最も多く産出する。農産には、米、麥、粟、豆、蕎麥、高粱、胡麻、蠶豆、豌豆、棉花、茶、煙草等があつて、天山南北路の各地に産出する。米は西湖、阿克蘇^{アクス}の産を最良とし、産額は伊犁が第一である。棉花は天山南路最適の物産で、産額も甚だ多い。茶は和闐^{ヘータン}、庫車^{クチョウ}等から産し、煙草は葉爾羌^{ヤルガン}、阿克蘇^{アクス}から産するが惡質である。又養蠶も行はれて天山南路の各地が一番盛んである。林産には松、杉、樺、楓榆、梧桐、桑が多く、次で白楊、紅柳、槐、野柘榴、野棗、女兒木等がある。松の良材は天山一帯から産する。畜産には馬、驢、騾、牛、羊、駱駝、鶏、豚等があつて、羊が最も多く、次が牛と馬とで、駱駝に驢が其次である。其他多くの野獸や鳥類がある。

西藏の産物

植物は至つて少く、茶の如きも輸入を仰いでゐる。随て物産は牛、羊、犂牛及その皮及革並に牛酪と、礦物、寶石類に過ぎない。

日本との通商關係

日本との通商はいふ迄もなく、歴史上、政治上並に地理上の便宜から、最も密接な關係を有つてゐる。

在留邦人 支那本部は、總計二萬三千六百餘人で、其中臺灣人が四千餘人、朝鮮人が四百八十人居る。滿洲には總計三十一萬餘人で、其中の二十一萬人は朝鮮人である。(之れは大正六年六月の領事館の調査によるのであるが此れ以上二三割は多く居る見込である。此項以下同じ)

主なる會社商店 主要の都市に於ける主なる我國の會社、商店及各支店、出張所は、北京では正金銀行、三井物産會社、三菱合資會社で、天津では正金銀行、三井物産會社、日本郵船會社、大阪商船會社、東亞煙草株式會社、富士製紙會社で、濟南では正金銀行、東亞煙草株式會社、山田洋行、芝罘では三井物産會社、東亞煙草株式會社、青島では正金銀行、朝鮮銀行、日本郵船會社、大阪商船會社、上海では正金銀行、朝鮮銀行、臺灣銀行、三井物産會社、三菱合資會社、大倉組、古河合名會社、高田商會、東亞煙草株式會社、大日本麥酒株式會社、帝國麥酒株式會社、漢口では正金銀行、臺灣銀行、住友銀行、三井物産會社、三菱合資會社、大倉組、古河合名會社、富士製紙會社、大正電氣株式會社、東亞製粉會社、日清汽船株式會社、南京では東昌洋行、三星洋行、吉村洋行、蘇州では内外藥品株式會社、清和洋行、杭州では大東藥房、華通洋行、長沙では三井物産會社、大倉組、日清汽船株式會社、厦門では三井物産會社、臺灣銀行、廣東では臺灣銀行、三井物産會社、三菱合資會社、日本郵船會社、大阪商船會社、奉天では正金銀行、朝鮮銀行、南滿銀行、三井物産會社、東亞煙草株式會社、藤田洋行、遼陽では遼陽銀行、朝鮮銀行、西村吳服店、安東縣では安東燭寸製

材株式會社、朝鮮銀行、三井物産會社、鐵嶺では三井物産會社、朝鮮銀行、日本棉花株式會社、大連では南滿洲鐵道株式會社、正金銀行、朝鮮銀行、日本郵船會社、大阪商船會社、大連汽船會社、牛莊では正金銀行、日本郵船會社、大阪商船會社、營口では朝鮮銀行、東亞煙草株式會社、營口硝子會社、薩原洋行、哈爾濱では正金銀行、朝鮮銀行、三井物産會社、香港では正金銀行、臺灣銀行、三井物産會社、三菱合資會社、日本郵船會社、大阪商船會社、東洋汽船會社、東亞煙草株式會社、日本棉花會社、古賀合名會社、服部時計店等である。

貿易額及重要商品 對外總貿易額は十六億圓許りであるが、日本との貿易總額三億一百三十五圓餘で、内輸出が一億八百六十三萬八千餘圓、輸入が一億九千二百七十一萬二千餘圓で、年々増加の傾向がある。

日本への輸出品の主なるものは、實棉及綿棉、豆糟、鉄鐵、苧麻類、大豆、石炭、羊毛、山羊毛、駱駝毛、鐵鑛等で、日本からの輸入品の主なるものは、綿織物、精糖及氷砂糖、生金巾及生シーチング、綾木綿、石炭及コーカス、燐寸、印刷洋紙、綿メリヤス肌衣、綿フランネル、天然金巾等である。(以上大正五年度調査以下同じ)

(イ) 支那本部

歴 史

支那の地は太古に苗といふ人種があつて、早くから黄河、揚子江の間に占居してゐたが、今から五千餘年前、漢族が葱嶺附近の郷土を發し、天山南路に沿うて甘肅省に入り、陝西に來て黄河の沿岸に移住してから、次第に蕃殖して、苗族を南方に驅逐し、遂に支那全部を占領した。

其から三皇が出て、或は住居や、耕作や、衣服や、火食などを教へた。三皇中の黄帝は干戈を取つて、諸部落を征服して、一大帝國を建てた。次に五帝が出た。其内で最も優れたのは堯、舜の二帝で、舜は禹に位を禪り、禹は國を夏と號した。夏は桀王の時殷の湯王に滅され、殷は紂王の時、周の武王に滅された。

周は武王の後長く泰平を保つてゐたが、幽王になつて諸侯離反し、加ふるに犬戎の侵略を受け、遂に平王の時になつて都を洛邑に東遷するに至つた。それから以後三百年間は天下亂れて、群雄諸處に割據し、所謂春秋の世となつた。

春秋の世に次で二百年の間、世は愈々亂れて、戰國の七雄となつた。之を統一して世を治平に還したのが秦の始皇帝である。

始皇帝の崩後天下再び亂れて群雄蜂起し、秦は遂に劉邦と項羽との爲に滅された。次で劉邦と項羽とは互に争つて所謂漢楚の争を生じたが、劉邦は遂に楚を滅して漢の高祖となつた。

漢は爾後外には匈奴を撃破し、内には文運勃興して國勢大に盛んであつたが、宣帝から後は國勢衰微し、遂に王莽に篡はれて、一旦中絶したのを、皇族劉秀が起り、王莽を滅して之を再興した。之を東漢の光武帝といつた。

東漢時代には佛教が傳來し、西域及太秦(東羅馬)とも交通が開けて國威が大に振つたが、獻帝以

後群雄四方に割據し、遂に魏、蜀、吳の三國が鼎立した。三國は司馬懿の孫の司馬炎に統一せられ、司馬炎は國號を晉と稱して武帝となつた。之が西晉である。

當時塞外人種の支那内地に移住する者が中々多く、中でも匈奴が一番強大であつたが、晉の衰微に乗じて晉を滅して漢と號した。そこで司馬懿の曾孫が江南に逃げて、東晉の元帝となつた。

漢は前趙、後趙に分れて争つたが、更に分裂して、前秦、前涼の諸國が獨立し、次いで前秦と東晉とが戰つた後、數多の小國が分立して所謂五胡十六國となり、遂に江北は魏の道武帝が統一し、江南は宋の武帝が統一して、南北朝對立の世となつた。

北朝の後魏は後に分れて東魏、西魏となり、次いで東魏は北齊に篡はれ、西魏も亦北周に篡はれた。北周は後に北齊を併せたが、外戚楊堅北周を篡つて帝位に即いた。之が隋の文帝である。南朝は宋が滅んで、齊を経て梁に至り、梁は陳に滅されたが、間もなく陳は隋の文帝に征服されて、南北朝が始めて一に歸した。

隋は煬帝になつて外征に失敗した爲に内亂が起つて、遂に李世民に滅された。李世民は唐の太宗である。唐の繁盛は歷代稀に見る所であつたが、安祿山の亂後、國勢が頓に衰へて、宦官の專横から節度使の跋扈となり、遂に昭宗の時朱全忠の爲に篡はれた。朱全忠は後梁の太祖である。

後梁は後唐に滅され、後唐は後晉に滅された。後晉は契丹(キタン)の後援に據つて天下を得たのであるが、

後亦契丹^{チヤイ}の爲に滅された。契丹は國號を遼と稱したが、漢人が服さないもので太宗は北へ歸つた。遼軍の北歸後、後晋の將劉知遠は後漢國を立てたが、間もなく後周に滅され、後周は宋の太祖趙匡胤の爲に篡はれた。爾後宋は屢々遼と戦つたが、終に和を講じ、遼は益々強大となつて、蒙古、新疆から高麗に至る大版圖を拓いた。

遼が衰へた時、黒龍江下流の地から女真^{ニョルチン}が興つて、宋と結んで遼を滅して金となつた。金は始め強盛で大に宋を窘めたが、後蒙古の爲に併呑された。

蒙古は成吉思汗^{ジンギスカン}の建てた國で、太宗、定宗、憲宗を経、世祖に至つて印度を除く亞細亞全部と、歐羅巴の半部とを領有し、空前の大帝國となつて、國號を元と號した。後に元は諸王諸汗の争ひを生じて、遂に明の太祖朱元璋の爲に蒙古へ驅逐された。

明末に元の裔、韃靼汗が勢を得て明を侵したが、次で達延汗^{ダギン}は内外蒙古を統一して屢々明に入寇した。それに又東方及南方から倭寇が侵入して來たので、國勢頓に衰微した。時に滿洲族が長白山の麓から興つて、其酋長努爾哈赤^{ヌルハチ}は國號を建て、滿洲の太祖となつた。明は征討の軍を起したが、大敗して滅亡し、滿洲は支那全土を平定し、國名を清と改め北京に都した。

清は次いで喇嘛教の隆盛に伴つて強大となつた蒙古の準噶爾部^{ジュンガル}を討つて降服させ、青海地方を占領し、天山南路を平定し、西藏を征服し、更に後印度の諸國に朝貢させて強大となつた。

是時歐羅巴人は漸次東方に侵入して來て、西伯利亞は露西亞に取られ、印度は英吉利に占領されたので、外交は漸く煩雜になつた。阿片問題^{アヘン}では英國と戦つて遂に香港を割讓し、長髮賊の亂に英佛と戦つて償金を取られた。やがて長髮賊は平定したが、此時露西亞は既に滿洲に侵入して黒龍江左岸の地及沿海州を攘奪した。次いで東京事件で佛蘭西と戦つたが、清は遂に佛國の東京占領を承認して講和した。

是より先き、清は琉球の漁夫が臺灣の土蠻に虐殺された事件で、日本と葛藤を生じ、償金を拂つて事済となつたが、明治二十七年に至り朝鮮に關して再び衝突し、二十七八年の日清戦争となつて、連戦連敗遂に和を請ひ、償金二億兩を出し、臺灣及澎湖島を割讓した。

日清戦争の結果、清國の實力のなれが世に曝露されたので、清は諸外國から種々の利權を強要され、佛國に廣東、廣西、雲南の鑛山採掘權を與へ、露國に東清鐵道の敷設權を與へた。獨逸は宣教師が殺されたのを口實に、九十九年間膠州灣の租借權を得た。次いで露西亞は旅順口及大連灣を、佛國は廣州灣を借り受けたから、英國は之に對し威海衛を租借した。

是の形勢を見て平素外人の跋扈に憤慨した連中は義和團と稱して蜂起し、北京に入り清軍と協力して、列國の公使館を攻撃した。そこで日、英、米、露、佛、獨等の聯合軍は、公使館を救つて北京を占領し、光緒帝と西太后とは一時西安に蒙塵したが、償金四億五千萬兩を出して講和した。

義和團の亂後、列國は皆支那から撤兵したのに、獨り露國は依然として滿洲に兵を止めればかりでなく、日露協商に背いて韓國の北境を威壓したので、明治三十七八年の日露戦争を惹起した。

清國は日本が大勝を得たのを見て、日本に倣つて富國強兵の實を擧げやうとし、日本から陸軍其他の教師を聘して着々内政を改革し、教育を施さうとしたが、病既に膏肓に入つて、改革を果すことが出来ない。夫れに英、獨、露、佛、米が互に利權を争つて、妨害し合つたから、清國は何等の改革を施すことが出来ない許りでなく、賄賂公行し、官吏互に排擠し、西太后は崩御し、光緒帝は其日に毒弑され、幼弱の宣統帝は政を醇親王に委せ、醇親王は弑虐の張本人なる軍機大臣袁世凱を罷免したが、間もなく一九一三年武昌に革命の烽火揚り、全土風を隔んで之に應じたので、清朝の大臣等は狼狽し、再び袁世凱を起して征討の總司令官とし、次で軍機大臣にした。之が爲め三百年の皇朝は、袁の詐術にかゝつて、樞花一朝の夢と化した。

南方の革命黨は南京に假政府を建て、國を中華民國と號し、參議院を開いて臨時約法を制定したが、彼等も亦袁世凱に欺まされて、袁世凱を大總統に選舉した。袁は大總統になると、忽ち假面を脱してクーデターを行つて、民黨を驅逐し、之が爲め起つた第二革命をも鎮壓した。次で彼は帝政を回復して己れ帝位に登らうとしたが、日本の勸告に出遭つて一時其計畫は頓挫した。然も彼の鐵面なる、飽まで詐術を弄して初一念を貫かうとした爲め、第三革命が起つて雲南、貴州、廣西、廣東等では獨立

を宣言し、四川も騷擾した。宗社黨も亦蒙古兵と策應して北から攻め下つたので、袁は進退谷まつて悶死した。

袁が死んでしまつて、副總統黎元洪が代つて總統となつたので、一時小康を保つやうな觀があつたが、黎は元と斗屑の輩、第一革命の時、部下に強ゐられて起つたに過ぎないから、何等の經綸もないので、一に成を内閣總理段祺瑞に仰いだ。段は袁世凱部下の一武人で、政治の才がないから、唯一途に袁の衣鉢を傳へやうとして、約法も復活しなければ、舊國會をも回復しないで、無暗に共和黨を壓迫しようとした。それだから南方の革命黨は承知しない。段の遣つた討伐軍は湖南で南軍と對峙した許りで、どうすることも出来ない。其内に黎元洪は幾分南方の要求を容れて、妥協しやうとして段と衝突し、段を罷免し、張勳を迎へて自分の護衛にした所、張は元來極端な宗社黨であつたから、機に乗じて黎の大總統を廢し、宣統帝の復辟を宣言した。

時に段祺瑞は天津に在つたが、張勳の兵の少ないのを見て、某々の後援を得て兵を起し、張軍を破つて再び政權を握つた。そこで黎元洪は辭職し、副總統馮國璋は大總統になつた。然し征南軍は湖南で南軍と戦つて大敗し、湖南は盡く南軍の手に歸し、四川の北軍亦潰走したので、元來段と其意見の相容れない馮國璋は段に迫つて辭職させ、南方と妥協の道を見出さうとした。南北の中間に介在してゐる直隸、江蘇、安徽、山東の督軍等は、南北妥協の提議をした。また北方武斷派は天津で秘密會議



帝 皇 統 宣

璋に對しても、全然信頼しないで、反抗するやうになつた。北方派は亦た南方派の主張に對し、飽く迄新國會を開かうとし、馮國璋に壓迫を加へたので、馮派の王士珍は總理を辭して、段は再び總理の地位に復する事になつた。馮總統は今や落日孤竿、總統の地位にあるにも拘らず、勢望地に落ちた。段派は表面妥協を標榜しながら、實際に於ては先づ湖南の南軍を撃つて、着々武力討伐を強行せんとしてゐる。こんな風に支那は朋黨互に排擠して、形勢混沌、雲となるか雨となるか、容易に測り知ることが出来ない。之れが現在の支那の状態である。

を開いて、馮總統の排斥を企てた。馮は勢の可ならざるを見て南京に下らうとしたが、途中濟南や蚌埠で北洋派の督軍等と會談の結果、考へ直して北京へ引き返した。此間馮國璋は始終和平を唱へて南北妥協を圖らうとしてゐたが、其態度が曖昧利巧を極めたので、南方派は北方派に對し、固く舊國會の回復を執つて動かないと同時に、馮國

政治上の地位

編者は大正二年五月支那分割論を著して、支那國民の腐敗を論じ、彼等が今の内に覺醒して大改革を施さなければ、支那は分裂分割を免かれまいと彼等に警告した。編者は該書で支那は袁世凱を中心とする北方武斷主義と、孫黃を中心とする共和主義とが衝突して、南北に分裂するだらうと豫言した。而て袁は皇帝になる野心を有つてゐるから、早く之が備をなせと忠告した。然るに支那の上下は編者



璋 國 馮 統 總 大

の趣意を了解することが出来ないで、唯單に分割論といふ書名に捉はれ、編者を以て支那分割を唱道する一個の野心家であると思ふし、編者を疾視した。大正四年の日支談判の時など、支那政府の機關新聞亞細亞日報の如きは日本の要求を攻撃する例證に編者を引張り出し、『酒卷貞一郎の徒の如きは瞻目張耳、眉を逆立て、眦を裂いて、而して我

國の分割を呼號し、彼の野心を曝露す』などと論じて、恰も編者の議論を日本國論の代表であるかの如く論じた。其ばかりでなく、編者が天津の駐屯軍に行つたら、袁世凱は外交部に命じて、駐屯軍が支那分割論者を置くはどうかといふ譯だと、松平領事を経て當時の駐屯軍司令官に質問したさうだ。司令官や領事は編者の分割論は分割の野心を表はしたものでなく、支那の現状を憂ひて、之が覺醒を警告したものだとして説明して呉れたかどうか。編者は茲に明言す。編者は支那を分割しやうといふやうな野心を毫も有つてゐない。編者は最も熱心な支那保全論者だ。編者は日支は唇齒の國であるから、唇傷れて齒全き事なしと信じ、兩國の提携を切望する一人である。編者は支那は無盡藏の富源を包蔵してゐる、日本は此等の富源を開發する無限の智力を有してゐる、故に日支兩國が互に提携し、互に相依頼する時は、兩國は毫も外國のお世話にならずに相給共存して行けると信じてゐる。兩國が提携する時は、年々増加する我が六十萬の人口は支那の大平野が到る所で歓迎して呉れるし、支那人が日夜翹望してゐる有ゆる新智識は我國が喜んで供給する。かくの如く兩國が互に相倚り、相扶けて、堅く提携する時は、長く東洋の平和を維持することが出来ると考へた。此意味で編者は支那の自彊策と、日支提携の必要とを論じた。此意味で編者は支那分割論を著はして支那國民が覺醒して、協力一致、自彊の道を講じなければ、分裂分割を免れないといふことを警告した。然し支那人は編者の警告に耳を傾けなかつた。さうして不幸にして編者の豫言が適中した。

袁世凱が皇帝にならうとした野心も、編者の豫言通りであつた。南方共和主義の團體が獨立して、支那が事實上南北に分裂したのも編者の豫言通りとなつた。現在の調子では、段祺瑞が出やうが、馮國璋が出やうが、陸榮廷が立たうが、唐繼堯が出やうが、到底治りやうがない。編者が分割論で論じたやうに、大豪傑が出て荒療治をして、國民の活力を振興しなくては、到底支那の統一自彊は出来なない。此の如き大豪傑は出ないし、又馮國璋も、唐繼堯も、陸榮廷も、此の如き荒療治が出来ないなら、良い加減の所で妥協して國民の一致團結を圖つた方がよからう。馮總統及其一派の武斷派は宜しく南方派の要求を容れて、舊約法を復活し、舊國會を回復するがよからう。乃至新に議員を選挙したらよからう。南方派も亦武斷派の嚴刑とか、黎元洪の復職とかいふやうな出来ない相談を撤回して、舊約法と國會の復活とで満足したらよからう。現在の状態で繼續すると、各省は續々獨立して復た收拾することが出来ないやうになる。其内に歐洲戦争が片付いて、歐米列國の勢力が支那に舞戻つて來たらどうする。實に不吉なことを言ふ様だが、さうなつたら如何に我國が支那保全の爲に努力しても——縦ひ外交上の援助ばかりでなく、實力を以て援助しても——編者が分割論で豫言した通り、支那は分割の運命に陥るだらう。

歐洲戦争がなかつたら、支那は今頃歐米列強の爲に分割されてゐたかも知れぬ。少くも分割の名目を避けた利權の割取に出遭つたらう。大正三年には露國も、獨逸も、佛國も、英國も、米國も、孰れも

大々の計畫で支那から利權を得やうとした。特に米國の計畫は宏大無邊で、鑛山採掘、鐵道敷設、淮河の疏水、沿岸航海から、各都市の水道、電車、其他有らゆる事業の特權を得やうとした。幸か不幸か大戰勃發の爲め、此等の大計畫は一時中止となつた。然し戦争が終ればすぐ捲土重來するだらう。米國は戦争で大儲をしたから、其儲けた莫大の金の處置に困るといふ意味で、ドシノ支那に注ぎ込んで來るだらう。英佛獨逸の諸強は、戦争で費つた莫大の軍費の回復を圖る意味で、支那に侵入して來るだらう。勿論彼等が軍費の回復をなし得べき場所は、支那と土耳其格と中央亞細亞とより外にならぬ。其時日本が如何に頑張つても、我輩が分割論で論じた通り、大厦の覆へらんとする、一木の能く支ふべきにあらずで、支那の分割——少くも利權の分割——さるゝのを見殺しにしないでならぬ。支那が此の如く分割されたなら、日本豈獨り全きを得んや。其不利不安なことは決して一通りではない。故に我輩は唯り支那の滅亡を悲むのみでなく、我國防の危機を憂慮して、支那に内争を止め、一致結合して自強の道を講せよと警告するのである。

支那にして果して我輩の警告を聽いて、南北和睦し、國政を改革して、富國強兵の實を擧げやうとするなら、必ず日本と提携して其力に依頼するのが必要である。英、米、獨、佛、露、伊は皆異人種異教徒で、孰れも弱肉強食を主張する國である。緬甸でも、印度でも、波斯でも、浩罕、基華、布哈拉の

三汗國でも、ネパール、ブータン、シキムの三山國でも、アブ、オーマン、馬來の三海國でも、乃至安南でも、柬埔寨でも、東京でも、老撾でも、皆彼等の爪牙に罹つてゐるではないか。支那自身も亦沿海州を取られ、黒龍江省を奪はれ、滿洲を勢力範圍に組込まれ、旅順を強奪され、威海衛を取られ、膠州を振取られ、廣州を攘まれたではないか。特に米國の如きは大金を振廻はして、支那の山河草木を擧げて、悉く自己の權内に置かうとしてゐるではないか。特に英國の如きは支那全土を以て自己の屬國と心得、他人の來て支那と好を結ぶのを絶対に妨害し、己れ唯り利益を壟斷しようとしてゐるではないか。

此の如く歐米人は支那を開發誘導して、文明に導かうといふ念慮は毫末もない。唯支那から利益を絞り取らうとばかり考へてゐる。之に反して日本は支那と人種も同じであるし、文字も同じであるし、孔子の教を遵奉する點も同じであるし、利害も同じであるし、協同して東洋の平和を維持しようといふ主義も同じであるし、同盟して外敵を防がうといふ念慮も同じである。日本は親切に支那を誘導し、支那を扶掖し、惜氣なく文化を傳へ、惜氣なく教師を貸し、惜氣なく金を貸し、惜氣なく勢力を提供してゐるではないか。日本は露國や、獨逸を撃つて、彼等に奪はれた滿洲及山東の地を支那に取返してやつたではないか。日本と支那とは益々親善にしなければならぬ事情の外、互に疎隔嫉視、相排斥すべき何等の理由を有たないではないか。然るに支那人が日本人の心を疑ひ、日本を以て野心

國とし、常に之を疾視憎惡するのはどういふ譯であるか。

これは支那に在住してゐる英米人特に英人が日支の親善を嫉み、又日支が提携すると彼等が我儘が出来ないといふので、何んでも日本を悪く言つて、日本と支那とを喧嘩させ、其間に立つて漁夫の利を占めようとするが爲である。自分が腹一杯食べて、口から出る程詰め込んでゐるにも拘らず、他人の食ふのを嫉んで、絶えず之を妨害して、己の獨占にしようとするのは、英米人特に英人の特色である。實に支那は彼れ英米人の眞意を覺つて、其言を取上げないで、唯り日本を信用し、日本に信頼し、互に提携して進んで行けば、國運は隆盛に向ふだらうが、若し彼等の言を信じて、日本を排斥したら、數年を出でないで彼等の食ものなるは靚面である。

支那は工業品がないから、之を日本から貰ふがよい。日本は鐵鑛や、石油や、其他諸種の原料が不足だから、支那は日本に之を給するがよい。つまり日本も支那も同盟國以上、即ち同一同胞の國と思はなくてはならぬ。だから經濟も共通にするがよい。軍備も共通にするがよい。兵器の製造も、器械の製作も、教育も、警察も、運輸、通信、交通も總て共通にするがよい。互に一致結合して、相給、互活、共衛するがよい。支那の軍隊だけで其國境の守備に不足なら、日本に兵を出して手傳つてもらふがよい。支那が各種の事業に資金があるなら、日本から借るがよい。何でも双方が誠心を披いて相談し合つて、助け合はなくてはいけない。今日は支那に取り非常重大の時であると同時に、日本にも

亦非常重大の時である。さうして歐洲の大戦が終れば、鷲鳥や、獅子や、豺狼の爪牙は直に支那大陸に集つて来るから、支那國民たる者は宜しく大に覺悟して、我輩の勸告に従つて、堅く日支の提携を行はなくてはならぬ。

次に戰略上の立場を論ずると、現在の支那は多數の陸軍を擁しながら、外國の侵入に對する何等の設備もしてない。故に今から日本に依頼して、兵の訓練や、兵器の供給をして貰ふがよい。兵工廠や、要塞や、軍港も亦日本と共同して之を經營するがよい。現戦争が終つたら歐米の諸強國は一時に大河の決した如く、支那に向つて押寄せて来るから、支那は平和的にも、戰略的にも之を防ぐだけの準備をしなくてはならぬ。陸上に於ける戰略的地位に關しては、其西北の方面は『滿蒙回の政治上の地位』及『西藏の政治上の地位』で論ずることとして、此處では唯南の方面に就てのみ論ずることとする。

南方から支那に向つて侵入して来るものは、今の所では英佛二國の外はない。——將來中歐強國が波斯を打從へて、印度に權勢を樹立した場合は別として——英國は多年其屬領印度及緬甸から支那に侵入しやうと計畫して、ベンガル・アッサム鐵道及緬甸鐵道から四條の支線を支那の國境に向つて分派して、其終點は雪嶺山脈の陽に置いてあつて、山脈を越えさへすれば、一躍して巴蜀、大理の歴史に富める地域に入ることが出来るやうになつてゐる。四箇所の終點は薩日雅、密基那——雲南から最近歸つた支那人の談に據ると、英國は此鐵道を玉石廠まで延長したさうだ——巴莫及崑崙渡で、

此等の豫定線路は左の通りである。

薩日雅

薩日雅はブラマプートラ河と、拉費托河と、雅魯藏布河との會合點に在る緬甸最北の都會である。此地は二條の線路を分派すべき運命を有つてゐる。一は薩日雅||拉薩線で、二は薩日雅||成都線である。

(一) 薩日雅||拉薩線 は雅魯藏布河に沿うて、喜馬拉耶山脈と後喜馬拉耶山脈(岡貝黎山脈)との峽路を通過して巴林に出で、其から拉薩に達するもので、此道路は古來人跡の未だ曾て到らない所であるし、測量も出來てゐないから、急に竣工することはあるまい。

(二) 薩日雅||成都線 は拉費托河の溪谷に沿うて、薩瑪に出で、其から岡貝黎山脈の支脈、雪嶺山脈及び其他の諸峻嶺を越え、巴塘に出で、打箭爐、雅州及蒲口を経て成都に達するもので、成都から更に重慶、宜昌を経て漢口に達する計畫である。此鐵道は調査も出來てゐるから、戦争が終つたら、ぢきに敷設に着手するだらう。

密基那

此地を起點とする鐵道は雪嶺山脈を越え、片馬に入つて、大理府に達するもので、此處で巴莫から來る線路に會するのである。

巴莫

此地を起點とする鐵道は騰越及永昌を経て、大理に達するのである。

崑崙渡

此地を起點とする鐵道は素龍山脈を起え、南丁河の溪谷に沿ひ、順寧を經、洱海の南岸合江で大理から來る鐵道に連接するのである。

滇緬鐵道

大理及合江で會合した三條の緬甸鐵道は此處から一線となつて雲南に達し、そこから二條の分線を出す。即ち一は雲南||成都鐵道で、二は雲南||沙市鐵道である。

(一) 雲南||成都鐵道 は雲南から東川、昭通を經て叙州に達し、其から嘉岷江に沿うて、成都に至るもので、叙州で薩日雅||漢口大鐵道に連結し、重慶及宜昌を經て、漢口に至るのである。

(二) 雲南||沙市線 は雲南から貴州の興義へ出て、此處でボーリング會社の敷設する沙市||興義線に接続し、貴陽、沅州、常德を經て沙市に達するものである。

此等四條の大鐵道が出來たら、英國は優に一日二個師團の兵を四川及雲貴に送つて、之を支持することが出来る。即ち英國は本國、南亞、濠洲及印度の兵一百万を戰場に排列することが出来る。之に對し、我は四川に於ても、雲貴に於ても、何等の交通線を有たない。楊子江は蜿蜒として巴漢の間を流

れてゐるが、三峡の嶮は大船の通過を許さないから、とても大輸送は出来ない。即ち一朝日支兩國が英國と覺を開く時は、西藏と、巴蜀、漢中の地と、雲貴二州とは支那の有ではない。但し英國も此勢力圏を出でて揚子江流域に進むことは出来ない。海上管制をないものとして、何となれば揚子江流域に出ると、彼は何等の交通線を有たないのに、我は京漢、津浦の二鐵道と揚子江の大交通線とを有つてゐるからである。

西藏、四川及雲貴を防護して、英軍の一兵をも此地域に入らしめないやうにするには、日支が共同して蘭州から揚子江の北、濱海に達する隴秦豫海鐵道と、漢陽から宜昌を経て夔州に至る川漢鐵道と、大同から成都に至る同成鐵道と、——以上は國有で現に敷設計畫中——南昌から韶州に至る南韶鐵道と、沙市から興義に至る沙興鐵道(英國ボーリング會社に敷設権を與へた)、欽州から重慶に至る欽渝鐵道と、廣州から重慶に至る廣重鐵道と、夔州から成都に至る夔成鐵道と、成都から打箭爐に至る成爐鐵道と、成都から拉薩に至る川藏鐵道と、長沙から涪州に至る長涪鐵道と、湘潭から緬甸の國境の銅壁關に至る湘緬鐵道と、崑崙渡から順寧府八暮を経て下關に至る滇緬鐵道と、雲南から四川に至る滇蜀鐵道と、片馬から西藏に至る滇藏鐵道と——以上國有豫定鐵道——を我手で速に敷設しなくてはならぬ。

此等の鐵道が竣成して我大軍が西藏と、四川と、雲貴とに充滿し、西藏では亞東^{アトシ}と春碑^{チュンペ}と江孜^{キヤンツ}との

嶮を固め、雲南では片馬と、騰越と、孟定土とを守つてゐれば、英兵如何に勇なりとも、此喜馬拉耶と大雪嶺との天嶮を越ゆることは出来ない。故に曰く支那は日本に信頼し、日本と提携して、兵備を修め、鐵道を速設して南境防禦の備をなせと。

次に佛國と我との戦争の場合を想像するに、佛國は河内から雲南に通ずる滇越鐵道を有つてゐるから、開戦直に雲南を占領することが出来る。又河内から鎮南關を経て、龍州に達する鐵道を有つてゐるから、廣西を占領することが出来る。之に對し我は雲貴、廣西に於て何等の交通線をも有つてゐないから、佛軍の侵入を甘受しなくてはならぬ。特に佛國は廣東に於て廣州灣を軍港としてゐるから、南部廣東は我の有でない。

陸上の設備のみで論ずると、我は南部支那に於ては到底佛國の敵でないが、然し佛國が果して戦時百萬の大軍を東洋に送ることが出来るかどうかは問題である。縱し百萬の兵を送ることが出来るとするも、之を護送するだけの海上力を使用することが出来るかどうか。又佛國の海上力が我海軍を我根據地内に壓迫閉塞するだけの力があるかどうか。佛國の海上力が我艦隊を閉塞するだけの力がないとすれば、陸上に於ける戦争は問題にならない。佛國が陸兵を本國から輸送してゐる間に我は忽にして彼の根據地の安南や、東甫塞を取つてしまふ。要するに佛國と支那大陸に於て衝突することは先づないといつてよからう。

陸上に於ける戦略上の地位はこの位にして、海上に於ける我地位を論ずることにしやう。海上に於ける列強の角逐範圍は寔に廣大で、唯り黄海や支那海ばかりではない。太平洋も印度洋も皆角逐場である。然し太平洋に於ける大舞臺といへば支那より外にはない。其處で支那に於ける海上の門戸は太平洋に於ける戦略上の要點となるのである。此海面に於ける我國の地位を見ると、佐世保と鎮海灣とで、朝鮮海峡を扼してゐるから、日本海は我國の湖水となつてゐる。更に旅順で渤海を我物にし、青島と八口浦とで黄海を管制してゐる。更に南方では澎湖島で臺灣海峡を扼してゐるから、先づ支那に對して海上では優越の地位を占めてゐるやうであるが、其實は其だ微弱な地位である。成程旅順と青島と八口浦と鎮海灣と佐世保とは能く渤海灣と黄海とを把制してゐるが、佐世保から濟州島を経て青島に線を引いて、其線以南は全く無防備無據點である。澎湖島は實際樞要の地位を占めてゐるに拘らず、我大艦隊を入るゝ軍港としては餘りに規模が小さく、且つ島に高地がないので艦隊を掩蔽することが出来ない。故に臺灣海峡の管制を確實にするには廈門に日支共同の軍港を設けなくてはならぬ。廈門と澎湖島と相應じて監視すれば、南方から來る敵の艦隊は此海峡を通過することが出来ない。然し此二港は海峡内に引き込んでゐるから、更に南方の支那海を管制することが出来ない。況んや支那海には英の香港及新嘉坡と、佛の廣州灣及柴棍とがあるに於てをや。故に我——日支——は一步を進めて汕頭と海南島の牛姑港（瓊州）とに軍港を建設しなくてはならぬ。即ち澎湖島と廈門と汕頭と瓊

州とに軍港があれば、香港と廣州灣とは戦略上の價値を殆ど半減してしまふ。かうなると東京灣は全然我が管制の下に入り、佛國は之が爲め雲貴、廣西に策動することが出来なくなる。英國も亦香港の孤立に苦んで容易に其大艦隊を動かす事は出来ない。之で南北支那の海面の把制は確實となるが、中央支那の海面に廣大な間隔がある。即ち佐世保—濟州島—青島線以南、福州—基隆線以北の中間即ち東海には日支共に一の軍港も要港も有たない。支那の大動脈たる揚子江の入口を防護すべき何等の設備もない。若し英、米、佛の艦隊が新嘉坡から、柴棍から、バタヴィアから、乃至マニラから裏臺灣の海面を迂廻して來れば、一舉して揚子江の入口を占領することが出来る。米國の太平洋に於ける戰略上の設備は雄大を極めたもので、米大陸には桑港とマダレナ灣と巴祭馬とがあり、北太平洋のアリューシアン群島にはキスカ島がある。南太平洋にはサモアの群島がある。西方支那海にはカピタとオロンカポーとガムとがある。中央太平洋には布哇の眞輪灣がある。米國の太平洋に於ける施設は實に此の如く雄大である。實に太平洋は米國軍港の網で蔽はれてゐる。一朝日支兩國が米國と戦端を開き、我艦隊が臺灣海峡に在つてオロンカポーやカピタを監視し、佐世保、鎮海、宗谷、津輕に在つて、本國及北支那の海面を防備してゐる間に、米國の大艦隊は隙に乘じ、布哇及ガムを経て揚子江口に現はれ、我國と南支との連絡を斷つたらう。

此の如き危険を防ぎ、揚子江口を安全にし、東海の管制を確實にするが爲には、我は是非共舟山島

に軍港を設けなくてはならぬ。佐世保と、鎮海と、青島と、舟山と、福州と、厦門と、澎湖島と、汕頭と、瓊州とが呼應して防護に任じてみると、日本の沿岸は申すに及ばず、黄海、東海、南海（支那海）は安全である。故に此等の未設の軍港は日支が聯合して速に建設しなくてはならぬ。又兩國は此等の海面を巡邏する兩國の大艦隊を建設しなくてはならぬ。支那は今の所、艦隊建造の財力がなく、又之に乗組ませる人員がないから、建造や人員は一切日本に委任するがよい。其代り支那は唯軍港を提供するがよい。港灣さへ提供すれば、設備は日本が引受ける。これで日支の海上防禦は確實に出来る譯だ。其から軍港は内地と連絡がなくてはならぬから、軍港から内地に走る鐵道は、既設のものは之を我手に買収し、未設のものは我手にて敷設しなくてはならぬ。即ち蘇杭甬鐵道は舟山島防備の必要上、英國に借款を支拂つて、其特權を買収しなくてはならぬ。福建鐵道及江西鐵道は福州及厦門の防備上速に敷設しなくてはならぬ。汕頭の防禦に必要な潮汕鐵道（民有）を買収し、未設の廣厦鐵道の敷設權を買収して、早速敷設しなくてはならぬ。此等の鐵道が悉皆我手に歸し、軍港の設備が十分出來れば茲に始めて歐米諸強の來侵を防ぐことが出来るのである。

風俗

○服装 支那人の服装は筒袖で、衿丈が長くて、指が全部隠れる程で、働く時には袖を捲くり上げ



支那の鶴飼 日本と同一の様であらう

る。丈は臀の處まで、前の方は騎兵の軍服のやうに肋骨の釘で止める。足は股引を穿いて、臍の處で括つて、靴足袋を穿き、其から袴を穿く。上衣は袴と摺り拂ひになる位の長さで、衿丈は着物と同じである。女の着物は男のよりも更に長く、丈が膝の少し上まであつて、衿丈は男のよりは長い。股引は洋服のズボンのやうで袴を穿かない。之は西洋や日本の女の着物と反對である。帽子は色々ある。

着物の前と後に刺繡を施してあるが、其刺繡と帽子の天邊に附いてゐる釘の色とで、位置の高下を別ける。一番高い地位にある者は珊瑚の釘で、次は青釘、次は水晶、次は眞鍮である。位置の無い者は着物に繡箔を附けることも、帽子に釘を附けることも出来ない。然し馬の毛で編んだシヤッポを被ぶる。此のシヤッポの天邊には、赤い絹の房が

下つてゐる。上は大總統から下は一平民に至るまで、平時は皆この馬の毛のシヤッポを被ぶる。男の頭は清朝が支那を征服した時に法律で滿洲風にさせた。即ち俗に豚尾で、周りを剃つて、天邊



罪人 罪人に首枷をはめる事は
一般に行はるる習わしである

には白粉をつけ、紅で頬に日の丸をばかしつける。

○婚姻 支那人の婚姻は頗る妙である。親は息子の爲に女の兒を買つて来る。さうして息子がゐてもゐなくても、女は其家に居つて働かなくてはならぬ。親は貧乏人の娘を金で買つて來たり、或は無償で買つて來る。支那では母親が家事萬端を支配するのであるが、彼女は買つて來た嫁を殘酷に取扱ふ。だから娘が團體を作つて決して嫁に行かぬと取極めてゐる處もある。で若し結婚しなければならぬ場合に當ると、自殺する者もある。結婚する前には先づ結納をするが、この結納は如何なる事があつても

の髪を長く編んで髻の邊まで垂らすのである。然し革命以來辮髪を剪る者がだん／＼殖えて、今では大半散髪になつた。
女は前額を深く剃りこんで髪を撫でつけて、後の頭の邊で梨の形に結ぶ。其結び目に玳瑁の笄や、珊瑚の簪などを挿す。額と髪の間目に黒い布で造つた幅廣の紐を貼りつけ、顔



官人 新郎 新婦
右ならぬ人結婚の式を取役である

うして花婿が生きてゐるやうに祝言するのである。祝言が終つてから三日経つと、花嫁は喪服を着て寡婦となる。それから一生其家で寡婦暮らしをして、養子を買つて家名を繼がして、先祖の祀をするのである。

結婚の日になると女は花嫁の服装を着けて、立派に飾つた轎に乗つて假親の家へ來て、先づ贈物を取り交はす。婿の家に着くと、花嫁は先づ第一番に祖父母と両親とに敬禮を盡さなければならぬ。祖父母や父母は死んで居つても、やはり生てると同じやうに敬禮を盡さなければならぬ。婚禮の儀

破ることが出来ない。之を破らうとするには、莫大な費用を使はなければならぬ。金持の息子が死ぬと、結納をした女は一生後家で通さなければならぬ。最も不思議な習慣は、女が死んだ許婚の靈魂と結婚することである。靈魂は位牌で表示されてゐる。此位牌は女の親類が婚禮の場を持つて行つて佛間に安置する。さ

式は先づ第一番に花嫁花婿は先祖の位牌に禮拜し、次に天地に禮拜し、次に花婿の両親に禮拜し、それから祝言の盃を交すのである。花嫁の乗つて来る轎は花婿の方から造つて贈るので、非常に立派な物である。それから花嫁の顔や服装を見られない爲に、轎の窓をキッシリと閉ざして、之に燦爛たる飾を付けてある。

花婿は位の印のつかない大官の正装を着る。頸飾は珠玉で、着物の前方は十分縮箔がしてある。靴は厚くて誠に立派な物である。花嫁の顔は頭から被衣を被つてゐるから、少しも見る事が出来ない。婚禮には待女郎のやうな者がゐて、一切の儀式を指圖する(寫眞参照)。

○誕生 子供の生れる時は、妖精が澤山集つて来ると信じてゐるから、婚禮の晩と同じやうに、赤燈を産室に點する。人々は目出度い言葉の外は決してはいはない。男の兒が生れると、二十八日目に頭を剃る。この儀式には饗宴を張るが、やはり目出度い言葉ばかりいつて色々な祝物がくる。三十日目に母親は、娘々ニヤンクミヤオ廟に參詣して香を焚く。それから後は勝手に友達を訪問してもよいのである。女の兒の時は、三十日か四十日目に廟に參詣するのである。

子供が生れてから一年経つと饗宴を張る。男の兒の時には、殊に立派な饗宴を張るのである。それから十年毎に誕生日を大祝ひに祝ふのである。三ヶ月経つと老人の友達か祝物を持って来る。それから赤子の周りに書物だの銀だの色々な物を置く。そして赤子が最先に手をつけた物が彼の運命を示すと



孔子の像

思つてゐる。赤子の着物は僧侶の衣を雛形にして造る。之は佛の保護を受けることが出来ると思つてゐるからである。其外赤子の身體の周りには、護符や、目出度い文字や、善神の肖像を付けて置く。御經の文句を赤子の頸や腰に付けて置くものもある。母親は赤子が悪魔に取付かれはしないかと非常に心配する。で鍵や鎖を赤子の頸や腰の周りにつけて、赤子の魂が悪魔の爲に連れて行かれるのを防いでゐる。時として女の子を男装させ、男の子を女装させて、悪魔を迷はさうとしてゐる。

○宗教 現在の支那の宗教は佛教と儒教と道教と回教とで、基督教も少しある。

●儒教 儒教は孔子の教へた人倫の大道で、宗教といふよりは寧ろ道德教といふべきものである。孔子は春秋の末に魯に生れた人で、名は丘、字は仲尼といつて、修身齊家治國平天下の道を説いた。其主とする所は孝悌を以て身を修め、仁を以て國を治めるといふのである。孔子は此道を諸侯に説いたが用ひられなかつた。

孔子の子思は中庸を著し、子思の弟子に孟子が出て性善説を唱へ、其後に荀子が出て性惡説を唱へ、皆孔子の道を祖述した。爾來之を儒教と稱し、今日に至るまで支那政教の基礎となつた。

道教 道教は老子の教へた道德經を基礎とし、之に幾多の迷信を附會したものである。老子は孔子と同時代に生れた大哲人で、無爲自然の道を説いて、道德五千言を著した。後列子と莊子とが出て、其道を擴張した。之を老莊の學といふ。其から後、時代が經つに従つて、色々なことを附會して今日のやうな道教となつたのだが、今でも中々澤山の信者をもつてゐる。

回教 甘肅、陝西、河南から山西、直隸にかけて、多數の信者を有つてゐる。

基督教 も西洋人が熱心に傳道するので、信者がだん／＼増えた。

其の外太古の宗教も幾分か残つて居る。即ち皇帝が天を祭つて萬民の爲に自分の身を犠牲にするといふやうなものも残つてゐる。之は禹が雨を祈つた時の儀式である。支那の廟の周りには大木大樹が澤山あるが、之は昔支那人が木を拜んだ宗教の遺物である。其外風神、水神、土地神等を祭つたり、先祖を祭つたりするが、之は佛教や道教よりは遙かに支那の人心を支配してゐる。惡魔を拂ふ爲に綺麗な龍舟を流す祭もある。此等は總て太古の宗教の遺物である。殊に見逃すべからざること、支那人が惡魔は眞直に歩くと信じ、之を防ぐ爲に家毎に支關に衝立を樹て、置くといふことである。若し支關に衝立を置かないなら、支關へ行く通路を或る角度に曲げなければならぬ。さうでないと、惡魔



城隍廟の神體 山西省に多てつあつて、二村で共有し、毎年鎮座を更へる

が始終出たり入つたりすると信じてゐる。然し孔子は怪力亂心を語らずと教へてゐるが、今の支那人は此教を忘れたらしい。

支那人の祭つてゐる神は澤山ある。關帝廟、文廟、城隍廟、龍王廟、瘟神廟、鬼王廟、火神廟、土地廟、河神廟、娘々廟、竈神、門神、祖廟、歲德神、其他色々な神様がある。之は皆五行崇拜から起つたものであらう。

佛教 は昔の華嚴、天台、法相、禪などの八宗は微々として甚だ振はない。唯喇嘛教だけは到る處大勢力である。喇嘛教の儀式は頗る面白いが、之は蒙古又は西藏の部で説明しやう。回教は清真寺といふ寺を各處に置いてゐて色々な儀式があるが、之は中央亞細亞の回教の儀式と同じであるから、此には略する。

○葬式 支那人は生きてゐる時に經帷衣や、墓や、棺桶や、其他色々な葬式の道具を準備して置く。泣くのは出来るだけ大きな聲で泣かなければならぬ。それから泣男を雇はなければならぬ。

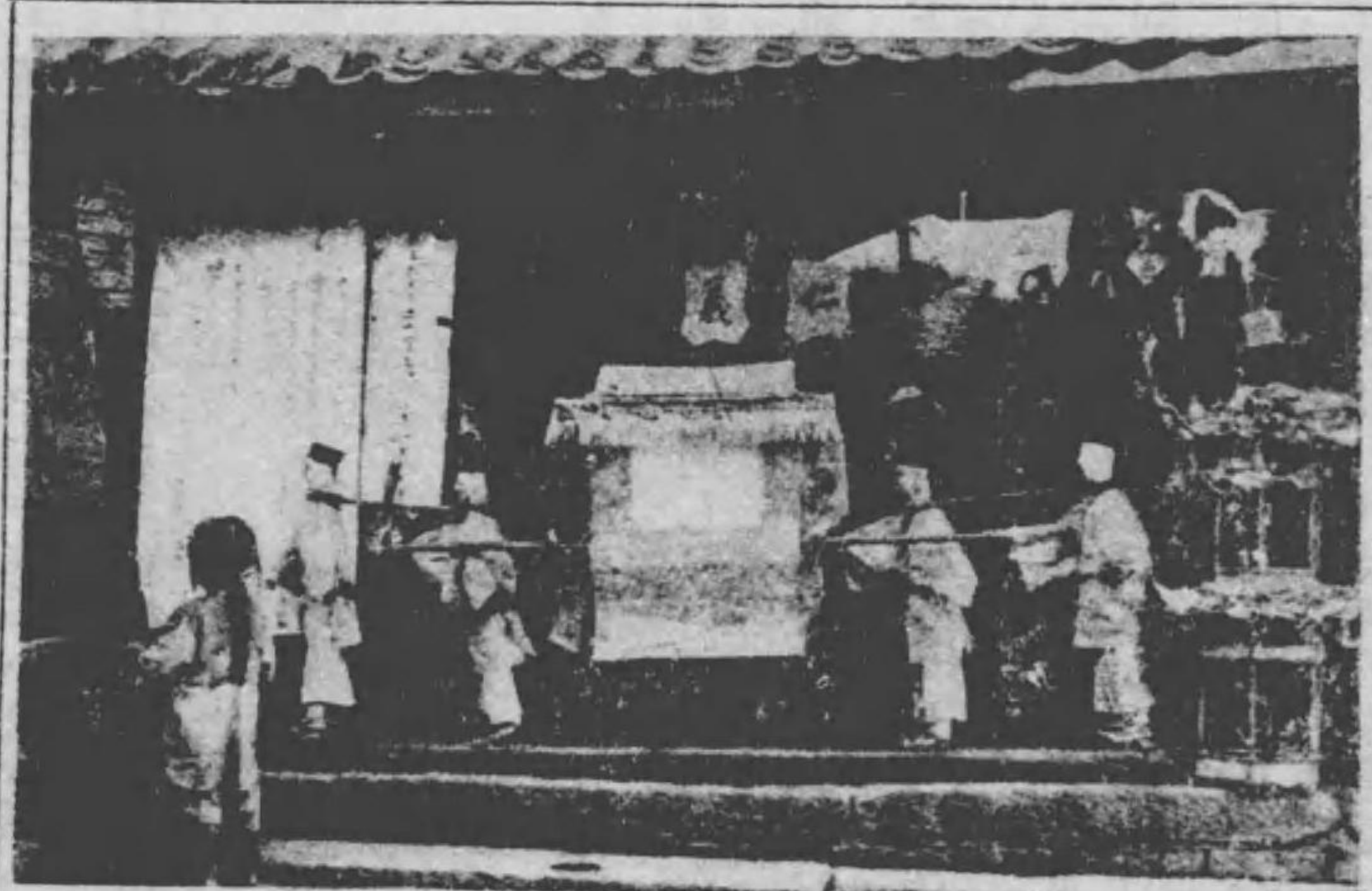
子供は小さい箱のやうな棺に入れて葬るのである。貧乏人は菰に巻いて墓場の土饅頭の上へ載せて置く。未だ齒の生えない赤子は、人間として取扱はない。金持の赤子はなか／＼鄭重に葬る。塔を造へて入口を二つ附けて、一方は女の子の墓とし、一方は男の子の墓とする。子供の墓場は其家の墓場の端に設ける。それは子供は成人した者と一處に葬つてはならないからである。女の屍體は男の靴を穿かして葬る。其譯は來世は男となつて生れ變つて來る爲である。

墓場の選定は最も重大である。風水師（觀五行師）に見て貰つて、墓場の定るまで死骸は大きな棺に入れて、數年間家に飾つて置く。然し高貴な人は生前必ず墓場を造つて置く。秦の始皇帝などは七十萬の人夫を出して、三十年かゝつて驪山に高さ五十丈の墓を造つた。之を見ても支那人が最も墓場に力を入れることが分る。最も面白い風習は母親が子供の魂を索すことである。母親の聲は十萬億士まで届くと思はれて居るから、母親は手に提灯を持つて、大きな聲で子供の名を呼びながら彷徨ふ。尤も魂を索すことは子供には限らない。白樂天の長恨歌で有名な彼の玄宗皇帝は楊貴妃のことが忘れられないで、方士をやつて楊貴妃の魂を索させたら、其魂は海上の仙山に居つた。それで方士は貴妃の魂と話をして、玄宗皇帝が貴妃に與へて約束した花鈿の一股を持つて歸つて來た。所謂「七月七日長生殿。夜半人無く私語する時、」の悲劇は是れである。それで母親は提灯を上下前後左右に振り舞して、「歸つて來い。歸つて來い。」と叫ぶと、他の女が「今歸る所です」と答へる。此呼び聲は夕闇を

破つて如何にも悲みの極に聞える。終に魂が歸つて來たものと信せられる。昔は葬式に犠牲を供した。特に天子の葬式には犠牲ばかりでない殉死もあつたが、明時代から殉死や犠牲を廢して、石で妻や、召使や、馬や、駱駝などを刻んで代用した。南京や北京郊外の明の陵を見るとよく之が分る。其後だん／＼變化して紙に書いて墓に持つて行くやうになつた。

滿蒙回の政治上の地位

滿蒙回の大平野は歐亞交通の要衝である。否な世界交通の要衝である。歐羅巴から陸路極東に來るものは、どうしても滿蒙回の地を通過しない譯には行かない。米國及極東から中亞、東歐に赴くにも亦滿蒙回の地を通過しない譯には行かぬ。滿蒙回は實に天下の要衝である。だから此地に據るものは能く東亞の覇權を握つた。昔者匈奴は此地に據つて威を歐亞に耀した。突厥も亦此地に據つて雄を天下に稱した。遼も然り。金も然り。若し夫れ蒙古に至つては、歐亞に跨がる空前の大帝國で、亞細亞人が萬世に亘つて誇りとする所である。清朝も亦滿洲から起つて漢滿蒙回藏の五族を統一した。滿蒙回は實に戰略上の要地である。此地は能く支那の頭部と腹部とを叩いて之を壓服することが出来る。此地は能く中亞、東歐の胸腹を撞いて其死命を制することが出来る。又此地は能く朝鮮半島に駕し、日本海、黃海を跨いて太平洋を管制することが出来る。嘗て一獨逸の學者が獨逸の北海管制を説くに

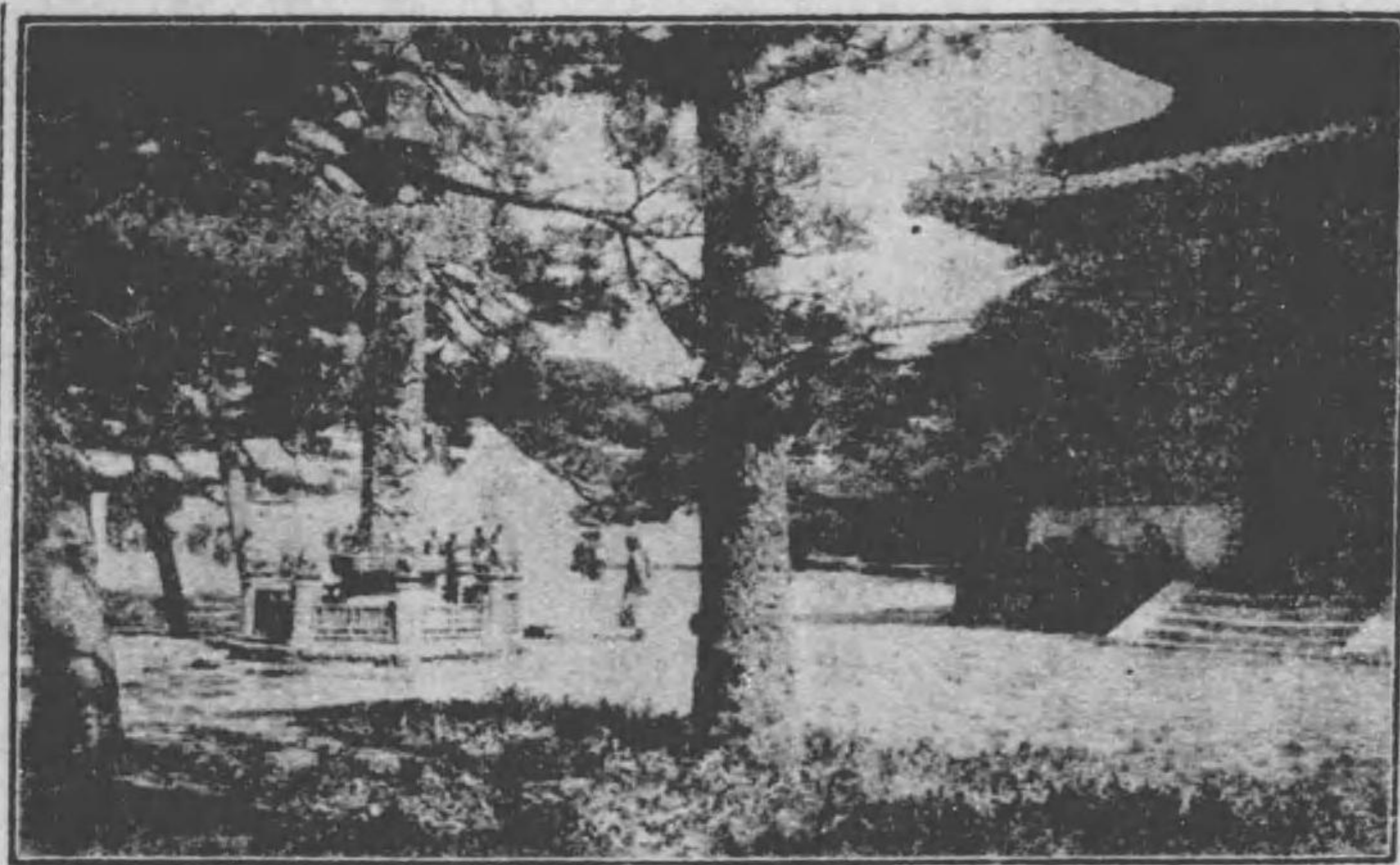


式葬 紙製の輜人形と三途の川を渡る時
要となるふいで葬式に附き物につなつてゐる

英國にして白耳義を把持すれば能く北海を管制することが出来る。之に反し獨逸にして白耳義を把持すれば北海は獨逸の管制に歸し、歐洲の覇權は獨逸の手に落つるだらう。

當つて、滿洲の地を引證して、

日露の争覇は滿洲の制把で勝負がつく。露國が若し滿洲を制したら、彼は容易く朝鮮を制することが出来る。朝鮮を制すれば又容易に馬山を制することが出来る。馬山を制すれば能く朝鮮海峡を制することが出来る。朝鮮海峡を制すれば能く日本を屈服させることが出来る。日本を屈服させることが出来れば能く太平洋に覇を稱へることが出来る。これに反し日本が馬山を制し、朝鮮を制し、滿洲を制すれば、露國の東洋に於ける覇權は一場の夢と化してしまふ。然るに戦争の結果、日本は馬山を得、朝鮮を得、滿洲を得た。露國はこれが爲に全く東洋の覇權を斷念しなければならなかつた。之と同じやうに北海の底は白耳義である。故に



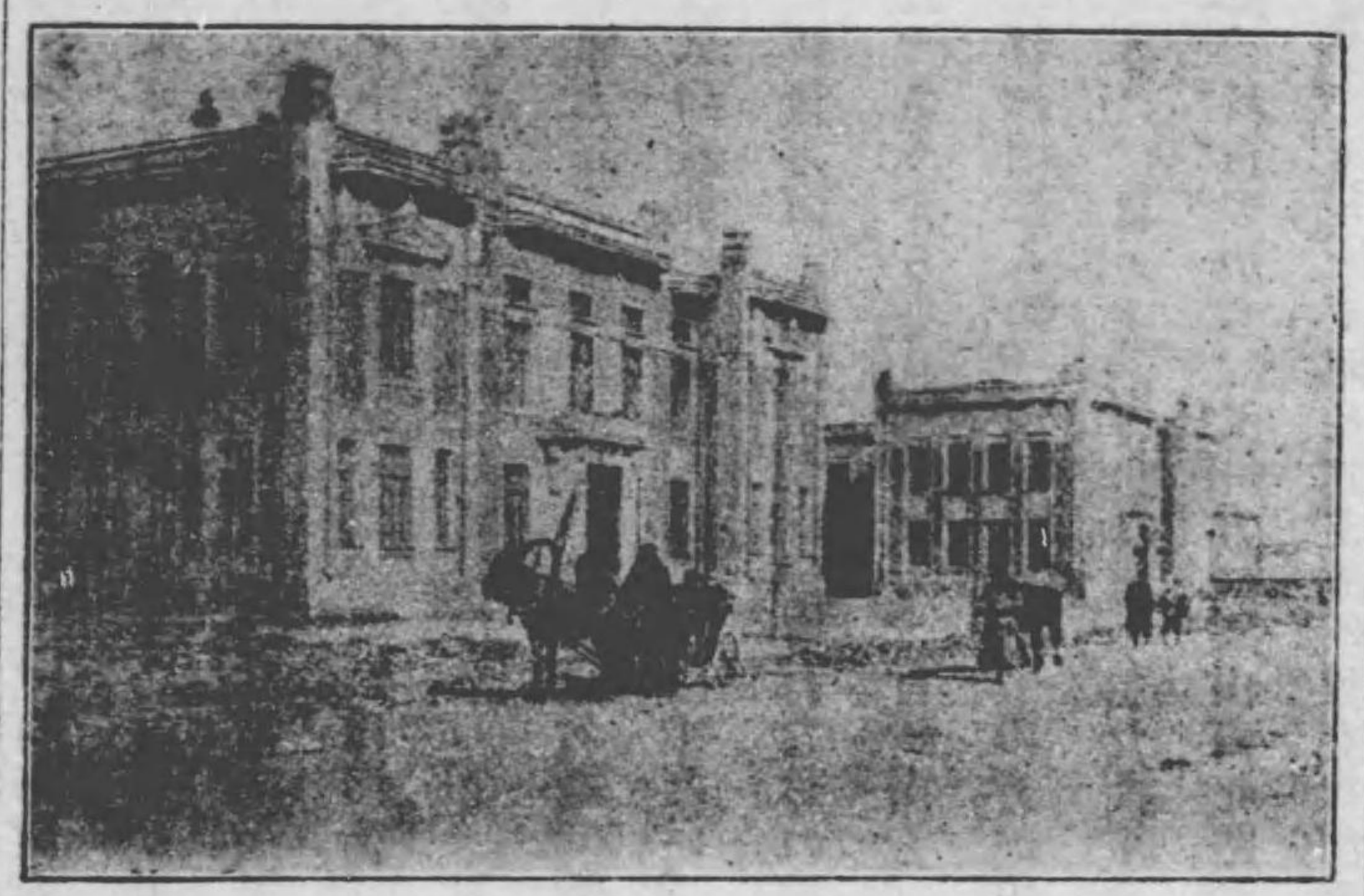
奉天 北陵 清の宗廟の陵 日露戦争の戦果
二箇月中に内陵に籠りて晝夜戦ひたつたので

ぬ。此利益圏は吉林長春の線を長春で西北に延長して、伯都訥の西方で嫩江に至り、其支流托羅河を溯つて興安嶺に達し、其から山脈に沿うて一直線に南下し、陰山に循つて、黄河の肘部に於て黄河に連

と説いた。成程太平洋に對する滿洲の地位は北海に對する白耳義の地位と酷似してゐる。日露戦争で日本が滿洲を得た以上、日本が東洋の覇權を握るは當然である。

日本は實に二十億の金を此地に費消した。日本は實に精銳百萬の血を此地に流した。日本が今日此地に特殊の利益を有してゐるのは當然である。既に滿洲の要衝に特殊の利益を堅めた我國は、善隣の誼から此利益を四隣に擴め、我文明の功徳を四隣に分けてやらなければならぬ。又四隣が外敵から攻撃さるゝ場合、萬一隣國が負けたら、其影響は直に我滿蒙の利益を脅すから、我は先づ第一に隣國を援けて外敵を擊攘し、以て我特殊の利益を防護しなくてはならぬ。故に日本は如何なる犠牲を拂つても日露の密約で定めた我利益圏を防護しなくてはなら

結する線内であるとの事である。所謂滿洲及東蒙の地である。此利益圏は歐洲大戰以前に定めたもので、爾來年を閲すること九年。此九年の間に我文化の光は遠く北方東部西伯利亞から、西方烏梁海、伊犁、天山南北路に及んだ。南方支那本部に對しては言を俟たない。此等の諸地方は何れも我文明の光を受け、我に倣つて着々制度文物を改革してゐる。だから我國は十分此等諸地方の文物制度の嫩葉を保護し、培養して、立派に成長させなくてはならぬ。で此嫩葉を傷け害するやうな動機が起つたら、此等の嫩葉を保護する意味から、又我が利益圏を防護する意味から、極力之を撃攘しなくてはならぬ。即ち我は常に滿洲及東蒙を守備するばかりではいけない。遠く外蒙古、烏梁海及新疆を防護しなくてはならぬ。特に露國が瓦解して、中央亞細亞や西伯利亞が無秩序になつた爲め、群盜匪類が我が利益圏の内に侵入して來るかも知れぬ。又露國が獨逸の勢力を假りて統一さるゝやうな場合があつたら、其こそ大變である。獨逸は露國を傀儡として中亞、極東に侵入して來るに相違ない。さうなると我利益圏は危険となつてくる。であるから之に對し我國民は、十分準備しなくてはならぬ。即ち我は我防禦の第一線としてエニセイ河と薩彥、亞爾泰、及葱嶺の山脈とを接続した線で敵の進入を防がなくてはならぬ。次に國防の第二線は貝加爾湖と、肯特山と、亞爾金山とを結び付けた線で、渺茫際涯なき沙漠の障壁に據つて敵の進入を防ぐのである。次に國防の第三線はヤプロノイ山脈と、興安嶺と、黃河と巴山脈とを連結した線で、此線の左翼正面には秦嶺山脈と、岷山山脈と、雪嶺山脈の峨々たる大山脈とで防護された四川の天府がある。又黃河の肘部から涓水の江源、西傾山山脈に連なる陝西の前進堡壘がある。



滿 洲 哈 爾 濱 街

が出来るだらうか。

中歐強國は、我國防第一線の正面に於て現在三條の大交通線を有つてゐる。彼は此外更に數條の斷

中歐強國は、我國防第一線の正面に於て現在三條の大交通線を有つてゐる。彼は此外更に數條の斷

續的補助交通線を持つてゐる。三條の大交通線とは西伯利亞鐵道と、中央亞細亞鐵道と、裏海鐵道とである。數條の補助交通線とは此等鐵道の支線と、オビ河及其支流イルヂス河と、オビ、エニセイ兩河を連ぬる渾河と、シル河と、阿姆河とである。之に對し、我は唯一條の西伯利亞鐵道を利用し得るのみである。且つ距離に於ても彼等が此線に達する距離は我國から此線に達する距離よりも遙に近いから、兵力集中に於て我は到底彼の敵でない。故にエニセイ河畔では辛うじて敵と對抗し得るとしても、中央亞細亞方面では、我軍は河南、陝西、甘肅と順次に行軍して、其から沙漠を越えて、天山南路をテクノノ歩かなくてはならぬし、又一方内蒙古から大戈壁を越えて天山北路や、塔爾巴哈臺まで行軍しなくてはならぬ。大砲は勿論、糧食、彈藥まで、馬や駱駝で運ばなくてはならぬから、此方面では到底彼に拮抗することは出来ない。

新疆方面の第一防禦線が守れなければ、西伯利亞方面の第一防禦線も随つて守れなくなるのは當然だ、さうすると具加爾湖と、肯特山と、阿爾金山とを結び付けた第二防禦線で、沙漠を前にして防がなければならぬ。所が此線も敵の方が集中に有利だ。彼等は西伯利亞、セミレチンスク、セミバラチンスク、及フエルガナに集中した大軍を以て、一舉して薩彥、亞爾泰、葱嶺の天嶮を越え、一方烏梁海、科布多から、又一方は天山南北路から潮の如く押寄せて来て、而て後方の連絡は三大鐵道の幹支線と、エニセイ河及其支流阿穆克魯河と、オビ河と、イルヂス河と、伊犁河と、及戰時速成し得べき

ゼミバラチンスク、科布多、烏里雅蘇臺鐵道と、アンヂヤン、疏勒、温宿、庫車、哈喇沙爾、吐魯番



蒙古庫倫全景

とを連結する鐵道とを有するから、優に五百萬以上の大軍を維持給養することが出来る。我は之に對し、矢張西伯利亞鐵道の外一も利用し得べき交通線を有たない。敵の鐵道敷設は亞爾泰及葱嶺の嶮こそあれ、此難所さへ越ゆれば、後は阿穆克魯、帖斯、科布多、烏倫古、塔里木の諸流域で、一望千里の平野であるから、甚だ容易である。然るに我は河南府から所謂殺函の嶮を経て、渭水の平野に出で、更に九曜、六盤の二大山脈の峨々たる峻嶺中を通過しなくてはならぬから、二年や三年で鐵道が敷設されるものでない。又吉長鐵道を洮南へ延ばして、其から興安嶺を越えて外蒙古の沙漠を越すことは、前者程困難でないにしろ、中々容易なものではない。要するに此第二線は距離に於ても、鐵道敷設に於ても、行軍に於ても、有らゆる輸送が敵に叶はない。故に此線でも我は敵を防ぎ得ない。

第二線が守れないとなると、第三線に退却するより外仕方がない。

此線は現在の我國防の第一線たる興安嶺から黄河の肘部に達する線に、北ではスタノオイの連山を加



滿洲滿洲里街

の輸送力は無限大で、然も此流域には物資が無盡蔵である、之に對し、敵は一條の交通線即ち西伯利亞鐵道より外、有たないのである。亞爾泰及葱嶺を越えて鐵道を延長するとしても、北方蒙古方面は

へ、南では黄河及巴山脈を加へ、之に六盤山脈と西傾山脈との前進線を添へたものである。此線に於て我は背後に十條の大交通線を有つてゐる。即ち東清鐵道、黑龍鐵道、清津吉長鐵道、朝鮮鐵道、南滿鐵道、京奉鐵道、京張鐵道、京漢鐵道、津浦鐵道及山東鐵道は之である。此外黑龍江、松花江、遼河、濛河、白河、揚子江等の補助交通線を有つてゐる。特に黑龍江、松花江、及揚子江の水運は宏大なもので、揚子江の如きは本流のみでも、優に十條の大鐵道を凌駕する大輸送力を有つてゐる。況んや其支流の漢水、湘水、贛水、沅水は支那の中部の殷富なる諸省を貫流し、其物資を吞吐するをや。又上流の渠江、岷江、嘉陵江及涪陵江の如きは、四川及貴州の中腹を貫いて、其物資を吞吐するをや。實に揚子江及其支流

兎に角南方陝西方面は祁連、賀蘭、六盤、九嶸の諸連山屹立して、天然の城塞をなしてゐるから、之を切開いて鐵道を竣工させることは大分の長年月を要する。其に四川が我手にある以上、彼は其右側背を脅かされるから、陝西に足を止めることは出来ないで、賀蘭山と祁連山と、巴顏喀喇山とを連結した線に退却しなくてはならぬ。故に此第三防禦線は必勝の線で、且つ最後の線である、萬一此線が破れたら、敵は忽ち支那の中原に氾濫して來て、日支兩國の提携は茲に破れ、支那の物資は悉く彼の利用する所となつて、我滿洲及朝鮮も危殆に陥るだらう。故に此第三防禦線は日支兩國に取り、戰略上至大至重の防禦線である。

中歐強國は此第三防禦線の左翼即ち南方に向ふのは危険であるといふことを知つてゐるから、彼は多分新疆を奪つたのみで、賀蘭山以東の地には突進しまい。其代りに全兵力を擧げて、此線の北方即ち我右翼を攻撃するだらう。此右翼は現在の我國防第一線であるから、我輩は茲に勝敗の數を十分研究したいと思ふ。

中歐強國が露國を左右し得るとして、其絶大の精力と、無限の科學的才能とを以て計畫したら、現在の我國防第一線の正面に輸送し得べき兵力は幾何であるか。現戰爭の教訓によると、獨逸は五分毎に一列車を運轉して、一日に一軍團(三個師團)の兵を輸送したさうだが、西伯利亞鐵道のやうな長距離の鐵道では中々そんな譯には行かぬ。特別最大限度で一列車二十噸の車輛二十五輛(總重量五百

噸)——一列車に九噸の車輛を二十輛(重量總計百八十噸)連結し、一列車で一箇大隊を輸送するのが普通である——を連結して一日四十八列車(三十分毎に一列車)を運轉し、此内八列車を鐵道の營業用及地方用として、完全に四十列車を軍用にすると見積る時は、一日約二個師團半の兵を輸送することが出来る。

然し兵員ばかり送つても、糧食、彈藥其他の材料がなくては戦争は出来ない。そこで兵員と同じやうに、一列車五百噸の貨車を一日四十列車運轉すると、一列車で約四個師團分の糧食を積むことが出来るから、一日に百六十箇師團分の糧食を輸送するわけになる。

故に兵員と糧食とを隔日か又は交互に輸送すると、四ヶ月の間に、百五十箇師團の兵員と、九千六百師團分の糧食とを戦線に出すことが出来る。然し此間に到着した兵員は、最後の師團の到着するまでに、續々到着する糧食を片端から食つて行く。即ち全部到着の百二十日間に九千箇師團分の糧食を食つてしまうから、輸送した糧食の残額は六百箇師團分である。故に四ヶ月の中、更に二日を糧食の代りに兵員を送るとすると、最後の日に於て、僅に二十箇師團分の糧食の不足を訴へるやうになるが、然もその翌日からは毎日百六十箇師團分の糧食が到着するから、毫も糧食の不足を憂ふる必要がない。だから大約開戦四ヶ月の後に敵は百六十箇師團、三百二十萬人(一師團二萬人の計算)の兵員を戰場に送つて、之を給養してゆくことが出来る。

然し之は鐵道ばかりで、兵員及糧食を輸送するものとして計算したのであるが、實際になると糧食も、人員も、其倍位はもつて來ることが出来る。日露戦争の際、我參謀本部の計算では、露國が滿洲に出し得べき兵數は三十萬を越ゆることは出来ないといふ測定した。所が露國は輸送した車輛は捨て、しまつて、回送しないで、後からくと新車輛で續々輸送したり、糧食は滿洲や、蒙古や、西伯利亞で間に合せたりしたので、殆ど百萬の兵を集中することが出来た。然し日露戦争後、露國は西伯利亞に食糧の製造所や、貯藏所を増設し、又極東の交通線に對し、大に力を用ひ、エニセイ河とオビ河とを連結する運河を竣工したり、^{マンヂウリヤ}滿洲里と庫倫間に自動車運轉させたり、^{チウイ}吹河とイルヂス河との航運を盛にしたりしたから、此等の補助輸送機關は優に西伯利亞鐵道の運送力と匹敵することが出来る。そこで此補助輸送機關で糧食を輸送して、西伯利亞鐵道で兵員ばかりを輸送すると、百二十日に三百二十個師團六百四十萬人と一萬九千二百箇師團分の糧食とを戦線に輸送することが出来る。故に今後チエートニック大帝國が露國を驅つて極東に襲來する時は、鐵道及補助輸送機關の外、西伯利亞及蒙古から乃至支那から十分の糧食を集め得るから、如何に内端に見積るも優に五百萬の兵を戰場に維持することが出来る。況んや豫定兵力集中以後は一複線を二條の鐵道として使用することが出来るに於てをや。上來述べた如く獨露五百萬の大軍が、西伯利亞から蒙古に向け、興安嶺に沿うて黄河の肘部に至るまでに排列したら、我は之を防禦することが出来るかどうか。此線内に於て我は黒龍江

線、東清線、城津^ニ洮南線、(吉長線を近き將來に於て先後に延長するもの)朝鮮線、南滿線、遼河線、京奉線、白河線、京張線、灤河線(將來又は戰時敷設すべきもの)の十條の交通線を有つてゐる。其他山東、津浦、京漢の三線をも有つてゐる。だから獨露の交通線に比し、少くも三倍の優勢を示してゐる。即ち兵さへあれば千五百萬を出せる譯だ。糧食はどうかといふに、京漢、津浦の二線で輸送し得べき長江の米量は千五百餘萬石、小麥が千三百萬石であるから、米だけでも三百五十個師團七百萬の兵を一箇年間養ふに足る譯だ。我は此安價な糧食を京漢、津浦の二線で供給すれば、北方八條の交通線は全部人員材料の輸送に用ひることが出来る。即ち毫も恐るゝ所はない。要は唯、今から軍備の充實をして置けばよいのだ。兎に角我國が支那と密接に提携した以上、我國は支那の兵ばかりでは守り切れない。此等地域の國境線を防禦しなければならぬ。即ち總論に於て論じた如く、最大限度千二百萬(總人口の二割)の兵を戰場に出すだけの準備をして置かなければならぬ。

上來論じた所に由ると、獨露の勢力が滿蒙に侵入して來ても、我に舉國皆兵の準備さへあれば、少しも怖くないやうであるが、實際はなかく容易なものではない。露國は戰前既にセミバラチンスタを中心とする四鐵道、即ちセミバラチンスタ^ニオレンブルグ線と、セミバラチンスタ^ニアンジャン線(支那國境鐵道)と、セミバラチンスタ^ニオムスタ線と、セミバラチンスタ^ニマリインスタ線と、ウラルスタ^ニオレンブルグ線と、カラフタク^ニアクモリンスタ線と、タシケント^ニウエリタイ線と、アンジ

ヤン^ニ喀什噶爾線と、クラスノヤルスタ^ニミヌーチンスタ線と、マリインスタ^ニピースク線の六支線との既定計畫の工事(若干は竣工)を準備したから、獨逸がいよく露國を其勢力下に置いたら此等の鐵道は忽ち竣工するだらう。それ許りではない豫定計畫になつてゐたセミバラチンスタから科布多^ヲ通過して庫倫に達する蒙古橫斷鐵道と、喀什噶爾^ニから西安に達し其から海州にぬける支那大橫斷鐵道と、喀什噶爾^ニから科布多^ニに到る鐵道と、科布多^ニからピースクに到る鐵道と、セオギルポリから、塔^ニ再^ニ巴^ニ哈^ニ臺^ニに到る鐵道とを敷設するだらう。更に又西伯利亞鐵道の一驛トライツカヤから恰克圖^ニ、庫倫^ニを経て張家口に達する既定の蒙古縱斷鐵道とを敷設するだらう。其で新疆と甘肅及陝西との我防備が不完全であつたら、我は側面から支那の中腹を中斷されて、長江から糧食を仰ぐことが出来なくなつて、非常な不利に陥る。況んや興安嶺の正面には敵の交通線が増えて來て、其根線は木の根のやうに支那國境で枝が縱横に蔓つて、歐洲及中亞から滋養物をドシ^ク滿蒙の平野と支那の中原とに送つてくる。かうなると長江の糧食は彼の利用する所となるから、我八條の交通線は彼と匹敵する程度になつて來て、防禦が非常に困難となる。之は遠き將來のことだから、今から心配するに及ばぬといふ人もあるが、獨逸の不屈不撓の大精神と、露國の豊富な物資とを以てすれば、左程長年月を費やさな

いでも實現するやうになるだらう。だから我は今から日支の提携を強固にして、軍備に於ても、物資の開發に於ても、交通線の築設に於ても、金儲に於ても、十分準備して置かねばならぬ。

吉長線を延ばして、洮南、烏里雅蘇臺、科布多を貫く蒙古大横断鐵道と、青島から汴洛鐵道に接続し、其から西安、蘭州を経て喀什噶爾に達する支那大横断鐵道とは、必ず我が手で敷設しなければならぬ。之を要するに外蒙及新疆は戦後我第一防禦圏で、滿洲、東蒙及直隸は我最後の防禦圏であるから、我は此二大鐵道と、其根柢となるべき諸交通線とを速成し、軍備を充實して以て之が防禦に備へなくてはならぬ。滿蒙回の現在の政治的地位は正に此の如くである。

(口) 滿洲

歴史

滿洲に最も古く住んでゐた種族で歴史に現はれたものは、烏夷、息惟、靐夷、山戎の諸族である。周の時代に肅慎は今の間島から沿海州にかけて蕃殖し、濊貉は伯都訥から吉林にかけて生息し、東胡は西遼河の附近に住んでゐた。當時遼東は箕子の朝鮮國であつた。漢の時代には沿海州の地に故扶餘が住んでゐて、其南大小長白山の間に挹婁がゐて、咸鏡道に沃沮がゐて、吉林から東蒙へかけて扶餘がゐて、其南に貉がゐて、西遼河の南に鮮卑がゐて、其南の内蒙古に烏桓がゐた。鮮卑と烏桓は東胡の分れたものである。

扶餘族に就ては面白き話がある。或人は日本民族と扶餘族とを同族だと論じてゐる。晋書四夷傳に「扶餘は潔癖にして淫なり。暮夜男女相會して歌舞し曉に達す」と書いてある。潔癖は日本民族の先天的性質で、暮夜男女相會して歌舞すとは盆踊であると説いてゐる。其れから古扶餘即ち東扶餘の酋長解美婁が「我は日の神の子孫なり」と稱して、部下の崇拜を得たことや、扶餘の解慕漱が亦「我は日の神の子孫なり」と稱し解美婁を追出して、其地を占有したことは饒速日尊や、神武天皇が日の神の子孫といつたこと及人民が日の神の子孫でなくては主と仰がなかつた點と能く似てゐる。又解慕漱が松花江源の地で河の神の女柳花に出遭つて、柳花を捉へて無理往生に自分の意に従はせたところ、柳花の父が怒つて、父母の承諾を得ないで、勝手に男を持つたのは不都合だといつて、柳花を追出した。柳花は泣く／＼江畔を彷徨つてゐた所へ金蛙が來て、其話を聞いて可愛想だからとて連れて行つて妻にした。後金蛙が東扶餘へ行つて解美婁の後を嗣いで酋長になつたことは、彦火々出見尊や鵜葺草葺不合尊が海神豊玉姬や玉依姬と結婚した神話と類似してゐる。又柳花が生んだ子は生れながら頭髪が長くて、齒が生へて、弓の名人で、百歩に柳葉を穿つたから朱蒙と名をつけた。朱蒙は扶餘語で弓の名人といふことだ。所が金蛙は朱蒙が解慕漱の子であるといふので、之を憎んだので、朱蒙は母の教に従つて十二人の家來をつれて、長白山の中へ逃げて行つた。此話は大穴牟遲尊が兄の八十神のお供をして大袋を背負つて因幡に行つたら、因幡の八上姬が大穴牟遲尊に戀をして、色々親切を盡し

てくれたので、兄の八十神は怒つて大穴牟遲をひどい目に遭はせる。大穴牟遲は逃げて韓國にある父素戔男尊の所へ行つたら、此所でも父尊に虐められたのを、尊の末女須勢理姫に救はれて、出雲に歸つて來る神話と能く似てゐる。朱蒙が長白山の中へ行つたら、日の神の子孫だと稱する松讓の國があつて、朱蒙が之と武器を比べて、朱蒙も亦日の神の子孫であるといふことを松讓に納得させて、降参させた話は、神武天皇が大和征伐の時、饒速日尊と天の羽羽矢や天の徒鞞を比べて、饒速日尊を降参させたのと同じである。朱蒙は遂に吉林省、奉天省及朝鮮の北部を併せて、高句麗といふ大王國を建てたが、神武天皇も亦中國を平定して大八洲瑞穂國の基礎を建てた。

神話から歴史に入つた此等の話は頗る扶餘と大和民族との關係を語つてゐる。特に素戔男尊が渡韓したことは我歴史に残つてゐるし、高句麗の歴史にも牛頭天皇の名で残つてゐる。京都の祇園祭ばかりではない、寒村僻地に至るまで天王様があつて、陰曆六月十五日に祭禮をすることや、晋書東夷傳の扶餘の條に『十月天を祭る』とある此十月は我國では神無月で、八百萬の神が出雲へ集つて、諸國の神社に神様がゐない、即ち十月は出雲祭である。扶餘の十月祭天と出雲祭と能く符合してゐる。此等を見ても扶餘族と我古代神話との關係は興味深いものである。

話が他へ外れたが、秦漢の時代に匈奴が勢が強かつたので、滿洲東蒙の地に住んでゐた諸族は皆其威風に屈服したが、匈奴衰滅の後、鮮卑が勢を得たので、滿洲の諸族は鮮卑に服した。兩晋及南北朝

時代には、吉林以南の諸族は普及北朝の版圖に歸した。高句麗が強盛となるに従ひ、滿洲は高句麗の版圖に歸した。此頃から黑龍江省には勿吉といふ族が起り、吉林省には契丹族が起つた。隋の頃黑龍江省の地に靺鞨が現はれ、吉林及東蒙の地に奚、契丹の二族が割據したが、突厥が蒙古の地に勃興したので、何れも突厥の羈絆を受けた。唐の高宗の時、大軍を發して高句麗を征して之を滅したので、滿洲及北韓は唐の版圖に入つた。五代の頃から遼東に渤海國が起つたが、契丹が強盛となるに従ひ、之に滅され、滿洲及内蒙古は悉く契丹の征服する所となつた。そこで契丹は國號を建て、遼と號し、都を臨潢に奠めた。

かくて遼は南方支那を撃ち、東方高麗を服し、聖宗の時には其領土、東は日本海に臨み、西は天山に至り、朝貢するもの高麗、吐蕃以下六十餘國に及び、亞細亞の最強國となつた。

此時支那には宋が起つて南北を統一したが、遼と接壤したので互に相争つた。其間に乘じ黑龍江から沿海州にゐた、もとの靺鞨の一部で女真といふ族が盛んになつた。其一部の完顔部に阿骨打といふものが出で、大に遼を破つて國號を金と號した。之が金の太祖である。後、金は宋と同盟して遼を滅した。遼の皇族耶律大石は、中央亞細亞に逃れて其地に西遼國を建てた。

金の太宗は、宋を侵略して國都汴京を陥れ、後都を燕京に移した。金は世宗以後國勢衰へ、遂に蒙古の爲に滅された。是から後滿洲は蒙古の版圖に歸したが、明が起つて元が滅ぶると、南滿の地は明

に没入された。

明の末に長白山下興京附近に努爾哈赤といふ者が出て次第に滿洲族を統一し、國號を滿洲と稱して自ら皇帝となつた。之が滿洲の太祖である。明は朝鮮と協力して之を攻撃したが大敗し、太祖は明の瀋陽(奉天)を占領して、此處に都を奠めた。太宗の時に西の方漠南蒙古部を征服して國號を清と改めた。次いで世祖の時明が内亂の爲に自滅したのに乗じ、支那の北部を占領して都を北京に遷し、辮髮の令を下して滿洲の風俗に従はしめた。續いて明の諸王の江南に據つたのを撃破して悉く支那本部を領有した。

聖祖は又西に向つて親征し、準噶爾部を降し、外蒙古及新疆を領土とし、更に西藏を征服し、青海地方をも占領した。是に於て清の領土は、北は亞爾泰山、薩彥の山脈から、南は喜馬拉耶山に至り、東は海から、西は葱嶺に達した。

明治二十七年清は日本と戦を開いた。日本軍は遼東に侵入して大に清軍を破つた。清は償金を出し、臺灣を割讓して講和した。爾來露國は旅順大連を租借して滿洲を經營し、續いて明治三十三年北清事變を機とし、悉く滿洲を占領したので、明治三十七年日本は露國に滿洲の撤兵を迫り、遂に兩國は戦を交へた。兩國の軍は滿洲で二年に亙つて交戦したが、露國破れ、東清鐵道の半部と樺太の半部とを日本に割讓して和を講じた。爾來滿洲は日本の勢力圏に入り、我國は孜孜として其文明を扶植し、富

源を開發した。

明治四十四年支那に革命が起つて、翌年清朝滅びて中華民國が起つたので、滿洲は民國の三省となつたが、日本の勢力圏たることは毫も變らないで、益々密接の關係を生じた。

風俗

滿洲人と漢人とは、外觀上甚だ區別し難い。服装は殆ど同一で、容貌、骨格、風俗、習慣等も亦よく似てゐる。唯婦人だけは兩者の差異が歴然としてゐる。即ち硬直な舉動や、纏足しない足や、一種特別な頭飾及服装は一見して支那婦人と識別することが出来る。又氣風からいつても、一般に獨立堅固の質に富み、頗る活潑であつて、かの柔弱で脆軟な支那婦人とは大に趣を異にしてゐる。

○服装 男子は支那人と餘り變らないが、婦人は大分異つてゐる。それは下着が男の物と同じで、上衣も同様に寛濶なのである。上衣には襯衣外袍の二種がある。襯衣の裾は閉塞してゐて、單に咽喉の所に開口がある許りで、其左方の胸上に衣裾を結び下げてゐる。外袍も同様で、兩方に袖口があつて、胴から衣縁に擴がつてゐる。何方も模様が付いた紗か絹か又は縐子で作つて、縁深く縫ひ取つた繡箔で飾つてゐる。模様には花や蝶を用ひて居るが、なか／＼美事である。

婦人の足は、纏足せずに自然の儘であつて、靴は普通の男子用の物を穿いてゐる。靴の表は絹か縐



滿 洲 婦 人

子を使ひ底は扁平である。貴婦人は轎子や車に許り乗つて滅多に歩くことが無い。靴の底は木製で之を白綿布で纏るんである。靴の底が甚だ薄いから、歩くには不便である。滿洲婦人は一體に長が^{たが}高くて容色が好い。

○飲食 食事は一日二回で、午前七八時頃食べるのを早飯といひ、午後一時乃至三時頃取るのを晩飯といふ。通

常早飯には高粱、豚肉、白菜及粉條子(フエンチヤオツ)(綠豆又は玉蜀黍にて製した麵の如き物)を食し、晩飯には高粱、馬鈴薯、紅蘿蔔等を豆油で調理した物を食べる。

飯子(チヤオツ)、饅頭(マンロウ)、烙餅(ロウピン)、餅々(ピンク)、白麵(ペイン)の類は、上等の物であるから、毎月一日十五日と三節(新年、五月五日、八月十五日)と、其他年數回の祝祭日並に犒勞の爲に特に御馳走として造るに過ぎない。然し官衙や金持の家や料理屋で用ひる食物は、材料は劣り調理法は拙づいが、南北支那の物と大差は無い。回々教徒は、普通人民と異つて一切豚肉を食はない。冬は牛肉を、夏は羊肉を食べてゐる。一般

に茶は食後に飲み、其他の場合には多く湯を飲んでゐる。酒は高粱酒が一番多い。

○住居 家屋の構造は、さして支那と異つてゐないが、概して矮小で土造が多い。煉瓦造といつて居つても、其れは壁ばかりのことで、官衙や寺廟を除く外は、屋根は石灰か又は泥土で塗つたもの許りである。之は寒暑の度が激しく風塵が多いのにも係らず、雨の少い滿洲では、自然に適合した設備であると考へられる。然し一方から見れば、貧乏を表はしてゐると思へる。

建築の木材は松、杉、榆、楊、柳等で屋根や壁に高粱稈を用ふ。下等の建築では煉瓦の代りに土杯(土にて煉瓦の形を造り未だ焼かざる物)を使つてゐる。屋根は初め高粱の稈を麻繩で編んだ物で葺き、其上を石灰又は泥土で塗る。泥土は粟麥等の稈を切つた物を混合して塗つた後、之を鞏固にする爲に鹽を撒く。石灰の方は毎年修繕することは要らないが、泥土の方は雨期の前後に必ず修繕しなければならぬ。鹽は其度毎に撒き直すのである。

○宗教 宗教は佛教、道教、回教で、其儀禮式典は支那の部に於て詳説したから、此には略する。

(ハ) 蒙 古

歷 史

太古から蒙古の地に興亡した種族は、ウラル、アルタイ種に屬する通古斯族と、蒙古族と、土耳其格

族とである。數千年前葱嶺附近の地を發し、天山南北路を通つて蒙古に入つて来て、支那史上に一番早く現れたのは羌といふ族で、之は蒙古族である。羌は西藏青海の間に在住する哲伯特族の氏と争つた。次に犬戎といふ土著民族（一説には羌と同族であるといふ）がやつて来て、外蒙古及び新疆に蟠居して、東は内蒙古にゐた東胡を驅逐し、北は西伯利亞にゐた丁零、堅昆、高車などを擊攘し、又屢々周を攻撃した。周は慄慄な犬戎の來寇に堪へられないで、平王の時に至り、遂に東遷して都を洛陽に遷した。

其後匈奴が出て來た。此族は土著民族であるといふことだ。戰國の時趙や燕は匈奴の來寇に苦んで長城を築いて之を防いだ。秦の始皇帝も亦匈奴の入寇に困つて萬里の長城を築いて匈奴を防いだ。漢の時に匈奴は益々勢威を張つて漢の高祖を平城に圍んで降参させ、遂に蒲類、伊吾廬（哈密）、車師（吐魯蕃）、焉耆（哈喇沙爾）、龜茲（庫車）、温宿（阿克蘇）、疏勒（喀什噶爾）、莎車（葉爾羌）、于闐（和闐）、月氏（安西、青海）、烏孫（伊犁）、大宛（フェルガナ）康居（セミパラチンスク）、シルダリヤ等の所謂西域三十六邦を其版圖とするに至つた。

然るに漢の武帝が烏孫と同盟して匈奴を討つたので、匈奴は國內が南北二派に分れて内亂が起り、遂に北匈奴は漢の爲に亡され、南匈奴は遠く裏海の沿岸に走つて其附近を保ち、後歐羅巴に侵入して民族の大移轉を起した。その名殘は匈牙利人に依つて今も尙留つてゐる。東胡は此時鮮卑、烏桓の二族

に分れたが、鮮卑は匈奴の後を襲ふて蒙古に歸つて來た。烏桓は遼東にゐたが、後に魏の曹操に亡ぼされた。

匈奴の後には亞爾泰山附近から蠕々族が入つて來て當分勢を振つたが、之は貝加爾湖畔から南下して來た柔然に亡された。柔然は中央亞細亞から入つて來た突厥に滅され、突厥は隋唐時代に強盛な國となつて、其領土は東は黃海から西は裏海に達した。次て突厥は東西に二分した。そこで唐は蒙古の西北境から今の烏梁海の地に入つて來た鐵勒及天山東麓に起つた回紇と同盟して、突厥を討つて東突厥を亡した。西突厥は逃げて遠く裏海のとりに走つたが、後セルヂューク土著となつて波斯、小亞細亞、亞富汗等を征服して威を振つた。今の土耳其は其末裔である。

突厥の後には鐵勒が代つて蒙古を領してゐたが、其部下薛延陀に滅された。其時西伯利亞のユニセイ河の流域から割憂斯（キルギス人）がやつて來て、回紇と夾撃して薛延陀を滅した。之から當分蒙古は回紇の獨舞臺であつたが、後滿洲から來た契丹族に攻められて哈密の故郷へ還つて回鶻となつた。それから契丹は蒙古の地に割據した割憂斯を併せて國號を立て、遼と號したが、後黑龍江の下流及松花江源の地から起つた女眞の爲に亡された。女眞は國號を金と號して、全蒙古から滿洲及直隸の主人となつた。

當時蒙古は多くの部落に分れて互に争つてゐた。其内で一番強いのが乃蠻部で、次は秦赤烏部で、



成吉思汗

つてゐた。也速該は不思議に思つて、擒へて來た鐵木眞の名を取つて我子の名とした。

鐵木眞が小さい時分に也速該が死んだので、鐵木眞は父の後を繼いで會長となつたが、諸部は鐵木眞の幼稚なのを侮つて、蒙古部を凌辱し、又は攻撃したので、鐵木眞は具に困苦を嘗めたが、成長するに随つて、漸次近傍の諸部落を征服して、遂に一番強い乃蠻部の會長太陽汗を擒にした。そこで蒙古は全く鐵木眞の手に歸したから、鐵木眞は大に諸王群臣を赦嫩河畔に會し、白鹿の大羴を建て、軍容を齊肅した。諸汗群臣尊號を上つて成吉思汗と號した。成吉思汗四十萬の部衆に君臨して、令を下

次は克烈部で、次は塔々兒部で、次は兀刺部で、次が蔑里乞部で、其次が蒙古部であつた。蒙古部は赦嫩河と客魯連河との間に遊牧してゐた部落で、其會長に也速該といふのがあつて、だん／＼勢力を得て來た。也速該が塔々兒の會長鐵木眞と戰つて之を擒にして歸つた時、其妻月倫が赦嫩河の上流ブルハン山の麓で男の兒を生んだ、處が其赤子は手に凝血を握

して諸汗群臣の勤勞を賞し、『馬跡車轍の到る所を極めて悉く之を席卷し、英名を千載に傳へ、汝衆汗と之を共にすべし』と詔した。其から成吉思汗は南下して西夏を降し、更に金に侵入した、金は河北を割讓して講和し、都を汴京に遷した。此時乃蠻の太陽汗の子屈出律が西遼に走つて、之を篡つて復讐を企てたので、成吉思汗は鋒を轉じて西に向つた。

當時西域の状態はどうかといふに、曩に摩訶末の建設した大食國の領土は一時亞細亞、阿弗利加、歐羅巴に跨つたが、唐の末頃から次第に衰へて、西突厥の殘黨で其地に住んだ者が勢を得、中にもセルジューク王家は亞細亞の西半部を一統して屢々耶蘇教徒の十字軍を破つたが、北宋の末その勢が衰へた所へ、遼の耶律大石が金に破られ逃げて中央亞細亞に來て、セルジュークを破つて土耳其斯坦の大半阿母河に至る地を占領し、國號を西遼と號し、都を吹河畔の虎思斡耳朶に奠め、尙今の新疆の大部をも征服した。で勢甚だ強大であつたが、孫の直魯克の時屈出律が蒙古に逐はれて逃げて來て、花刺子模の王ムハメッドと謀つて西遼を奪つたのである。屈出律はこの勢に乗じて蒙古に復讐しようとしたが、反つて成吉思汗に打ち破られて死んでしまつた。そこで蒙古は花刺子模と境を接するに至つた。花刺子模の王家は突厥族で、もとセルジューク王家に屬したが、後獨立してセルジューク王家を仆し、強大な國となつたので、ムハメッドは蒙古を侮り出し、成吉思汗が花刺子模の狀況偵察の爲に派遣した隊商の一隊を殺した。そこで成吉思汗は直に征討の軍を起し、四子朮赤、察合台、窩闊台、

拖雷と共に七十萬の大軍を率ゐて花刺子模に征め入つて、國都尋思汗(今のサマルカンド)を陥れた。ムハメッドは逃げて裏海の一島に匿れ、遂に憂死した。ムハメッドを追撃した蒙古の一隊は、更に太和嶺(今のカフカズ山脈)を越えて、阿羅思(今の露西亞)を侵略したが、成吉思汗が東歸するに及んで軍を還した。成吉思汗は花刺子模を滅ぼし、ムハメッドの子札刺丁を追撃して、印度河に至つて旋旅した。其から鋒を南に向けて西夏を亡し、次で金に侵入しやうとしたが、途中で病氣になつて六盤山に永眠した。成吉思汗の第三子窩闊台が其後を嗣いで大汗となつた。之を太宗と云つた。太宗は都を喀喇和林(外蒙古オルゴン河の畔)に奠め、又父の遺志を紹いで金を亡ぼし、高麗を降し、朮赤の子拔都を元帥とし、之に實子の貴由、拖雷の子蒙哥等を附けて歐洲に侵入させた。蒙古軍は先づ阿羅思を蹂躪し、一軍は波蘭土に、一軍は匈牙利に入つて、至る所蹂躪したが、會ま太宗が死んだので兵を收めて東に歸つた。

太宗の後は貴由が立つて定宗となつた。定宗は在位三年で死んだので、拖雷の子蒙哥が諸王將に推されて大汗となつた。之を憲宗と稱した。そこで太宗の一族は不平を抱いて、後年の蒙古大汗國分裂の基をなすに至つた。憲宗は弟の忽必烈に南方の吐蕃、交趾等を經略させ、又弟の旭烈兀を遣つて西方亞細亞を平定させた。旭烈兀は波斯の回教徒を征服し、更にシリアから埃及に侵入しやうとしたが、憲宗が死んだので軍を收めた。又一方忽必烈は四川、雲南地方及吐蕃を征服して、更に其別軍は交趾

に侵入した。そこで憲宗は忽必烈と力を協せて自ら宋を撃つたが、途中で死んでしまつた。

此時蒙古の諸王中に大汗にならうと企てる者があつたので、忽必烈は宋の和議を許し、開平(内蒙古古ドロン湖の西北)に行つて蒙古の大汗となつた。之れが世祖である。世祖は都を燕京に遷して大都と名づけ、次で國號を建て、元と號した。世祖は漢人の儒者を任用して文化の輸入に努め、又諸般の制度を定めた。

世祖は宋が和議の約を果さないのを怒つて、伯顔等を遣つて宋を滅した。世祖は亦日本侵略を企てたが、元軍十萬博多の海底に沈んで、其計畫は頓挫した。然し南方では緬(緬甸)、交趾、占城(西貢附近)、真臘(柬埔寨)等を征服し、瓜哇、蘇馬都刺以下の南洋諸島を朝貢させた。かくて蒙古は成吉思汗の興起以來、僅に八十年の間に西伯利亞の北部と、印度の南部とを除いた全亞細亞大陸と、歐洲の東部とを擧げて、悉く蒙古の領土にしてしまつたから、蒙古は實に空前の大帝國となつた。

世祖は蒙古の大汗として此大帝國を元、察合台汗國、窩闊台汗國、斡察汗國、伊兒汗國、悉比兒汗國の六大國に分けて統治した。元即ち大汗の直轄地は支那本部、滿洲、蒙古、朝鮮、暹羅、安南、緬甸、瓜哇、蘇馬都刺で、察合台汗國は今の露領及支那領土耳機斯坦で、察合台が王となつた。窩闊台汗國は蒙古の科布多、烏梁海及エニセイ河の流域で、窩闊台の孫海都が王となつた。斡察汗國即金斡爾朶(金黨)は裏海の北方烏拉斯克邊から烏拉爾山の半に至る線以西、露西亞、波蘭の全部で、朮赤の



佛 活

子の拔都が王となつた。伊兒汗國又の名不賽因は波斯、亞富汗斯坦、ベルチスタン及亞細亞土耳其格の大半で、施雷の第三子の旭烈兀が王となつた。悉比兒汗國は、今のトボルスク省で拔都の弟の昔班が王となつた。

微し、元は順帝の時に、明の太祖の爲に北方に驅逐され、察哈台汗國は四分五裂の極、帖木兒の爲に滅され、伊兒汗も同様帖木兒に併呑され、金黨は分れて喀森、哥里米、薩來の三汗國となつたが、後皆露西亞の爲に滅された。

是より先喇嘛教は元、明時代から支那政府の尊信を受けたが、此頃から頗る驕慢となり、殊に達賴喇嘛の存在する瓦剌部の一部の和碩部は遂に西藏の兵權を握るに至つた。瓦剌部は也先汗の死後、分裂して統一しなかつたが、明末になつて伊犁地方の準噶爾は、瓦剌部から起つて遂に之を統一し、

かくて蒙古は世界の最大國として繁榮したが、太宗の子孫を盟主とする諸汗と世祖の一門との争闘の爲に國勢衰

和碩部に代つて西藏の兵權を握り、更に東察合台汗國の衰微に乗じて天山南路を併呑し、次いで東に向つて漠北蒙古に侵入した。蒙古部は敗れて保護を清に請ふたので、清の聖祖は親征して、大に準噶爾部の軍を土拉河畔に破つた。漠南蒙古部は曩に清に歸服してゐたのに、今又漠北蒙古部が清に降服した爲め、内外蒙古は全く清の版圖に入つた。爾來蒙古の諸部は、清の外藩として清に朝貢した。

千九百十三年支那に革命が起つて、清朝が滅んで、袁世凱が支那共和國の大總統となつた。蒙古の諸王は之に服さないで、露國を後援とし、活佛を主權者とし、露蒙協約を結んで獨立した。露蒙協約は露國から借款して、之を行政、兵政の改革費と教育の費用とに充て、露國の士官を招聘して軍隊を訓練する其代りに、露國に諸種の利權を與へた。そこで支那政府は露國に向つて抗議したので、露國は遂に(一)支那官吏の護衛以外支那兵を入蒙させないこと、(二)支那人を蒙古に移民させないこと、(三)蒙古は完全に自治すること等の條件で露蒙協約を取消した。然し其は表面だけで蒙古は實際に於て獨立したのである。袁世凱が帝位に即かうとした時から、蒙古兵は屢々支那の邊境に入寇して現在でも其行動を止めない。

風 俗

蒙古は地域が廣いから、風俗習慣も地方によつて多少の差はあるが、元來同種族で言語文字も同じで、且つ長く同一政府の下にゐたから、大體に於て大差はない。

外蒙古に於ける民族は身臣チオンチン、土謝圖トシエフト、三面諾顏サンシニン、札薩克圖諸汗チヤサクトの旗下に分屬してゐるのが一番の大族で、其他小部族が澤山ある。

内蒙古に於ける民族は、殆んど皆喀爾喀族である。顔面が扁平で、頬骨が隆起して、額は凹んで眼が小さく、鼻が低くて、口が大きく、唇は厚くて腮が浅い。男子は一般に褐色の粗髯を畜へ、皮膚は日に焦げて赭色で、一寸見ると日本人に似てゐる所がある。性質は愚鈍で、粗野で、淡白なことは子供のやうである。又婦人は滿洲婦人に比して更に快活で、獨立に生活して、随意に馬に跨つて外出し、獨りで平氣で他の家を訪問する。蒙古人は一般に生存競争の圏外に超脱して利害の觀念がなく、又喫



婦人の冬装束 之はウガル地
方の人婦で飾りと長袖とが珍奇だ

茶、喫烟、飲酒等を買つて、朝から晩まで念佛を唱へたり、お經を讀んだりして、只管冥福を祈つてゐる。

○服装 服装は支那服を真似てゐる。唯漢滿人と異なる所は、一般に寛濶を好む點である。上衣は赤紫又は黄色の物が多く、支那服よ

りも丈が長く、帯を解くと、地に届く位である。だから寝る時は直様布團の代りとなる。帯の前面に烟草入を、左の腰に烟囊を、右腰に食食用の小刀を、後ろに燧石を下げ、烟管は長靴の中か左腰に挿してゐる。其上に上衣を着て、革又は布製の靴を穿き、始終帽子を被るか手拭で鉢巻をして、頸に佛像を吊し、手に珠數を垂れてゐる。又外出する時は、必ず鞭か杖かを携へる。服には官服と便服(通常服)とがある。帽子には禮帽と通常帽とがある。禮帽は更に夏冬の二種に分つてゐる。

婦人は一般に帽子を被らないで、美しい花簪を挿してゐるのが多い。又纏足をしないで、耳に孔をあけて種々の耳環をはめてゐる。處女は髪を編んで後方に垂れてゐる。

○飲食 常食は乳茶、羊肉、雜穀、小麥粉、干饅頭等であるが、氣候と地味との關係で各地方多少の差がある。

蒙古人の牛乳利用は甚だ巧みで、牛乳から色々な食料を造る。即ち煮て脂肪を集めて、奶皮子ウルモといふものを造つたり、牛酪や乳酒等をも造る。奶皮子から更に貯藏用の「ウオチカ」といふものを造る。茶は滿漢から入るが用法が異ふ。即ち茶の中に牛乳と少量の鹽とを混じて飲用する、之を蒙古茶といふ。肉類は牛、馬、羊、豚、鶏、鹿、兔、山羊、雉子等で、牛は金持の大典の時に屠殺するばかりで、平常は死んだ牛馬の肉を喰べるに過ぎない。雜穀は黍が主で、其次は小麥粉で、稀に高粱、粟等を



花 嫁 の 頭 飾 が 頗 り 奇 抜 な 髪 を
二 分 け て の 角 や う に 突 出 し せ れ ば
六 百 圓 程 の 石 飾 で つ 飾 る べ し

にする。

○住居 遊牧地方の住民は、總て毛氈でこしらへた帳幕の内に起居してゐる。其構造は頗る粗悪であるが能く寒暑風雨を凌ぎ、且つ解體携行に便利で、水草を逐うて流轉するに適當してゐる。之を蒙古包モンゴといふ。

○婚姻 蒙古人は、滿漢人と同じく早婚で、十六歳以上の男子で女房を持たないものは殆どない。妻は夫より二三歳乃至四五歳年長である。結婚は本人同志は知らないで、父母と媒介者とで定める。

通常男の家から女の家へ贈物をする。女の家からは何も贈らない。婚約が成ると、女の父は親族と一緒に男の家に行つて、先づ佛壇の前に拜伏して、羊頭、乳、絹布等の御供物をあげる。次いで男の家から皆に御馳走をする。嫁入の日は喇嘛の指定に従ふので、當日になると、花婿の家から人をやつて花嫁を迎へさす。迎の者が門で待つてゐると、花嫁が出て来て馬に乗り、家の周りを三度廻ると馬を飛ばして花婿の家へ行く。此時隣人や近親の者が来て、祝詞を述べて贈物をする。花嫁は先づ舅姑に紹介されて佛像を拜禮し、同時に喇嘛が御經を讀む。花婿も亦花嫁の親戚に挨拶をして、それから宴會に移るのである。

離婚は極く無難作に行はれる。妻を實家に送り返して其兩親に通告すれば可いので、妻からする場合も同様である。此時は結納の一部を返さなくてはならない。又男子は正妻の外、妾を置くことが出来る。妻妾同一屋内に起臥して仲善く暮らす、家政は總て正妻が掌る。

○誕生 子供が生れると、産婆が来て萬事世話をする。此者は一族又は近隣の女で、特に産婆を職業としてゐない。赤子は拭ひ清めて、布片に包んで、草根木皮の汁を飲ませる。生れてから一ヶ月経つと、喇嘛を招んで祝賀の祈禱をして貰ひ、又一部落内の重立つた者を招んで宴會を開く。

○宗教 蒙古人の宗教は喇嘛教である。滿漢人の移住地附近に少數の基督教、回教、道教があるが、云ふに足らない。喇嘛教は蒙古人の生命である。冠婚葬祭、吉凶禍福、一として喇嘛教の關係し



火の祭 魯ガ地方にて末年に
一中年の罪業を消す爲に喇嘛廟の廣場
で焚火を盛大に祭るす

ないものは無い。有徳の喇嘛僧侶を敬ふことは、恰も神に對するやうで、彼等は宗教以外、活佛（喇嘛教の法王）以外帝王の權方も何も認めない。

蒙古の喇嘛教は『ニンマバ』（最古の紅教）『サスキヤ』（宋の神宗の時分派す）、『ゲルクバ』の三派中の『ゲルクバ』派で達賴喇嘛の管下に屬してゐる。此派は紀元第十五世紀の始め名僧宗喀巴が當時の紅教の腐敗を慨

いて別に一派を起したので、爾來勢力が隆んになり、遂に他の二派を壓倒して、蒙古全體と、西藏の大部に傳播するに至つたのである。此派の戒律は、至つて嚴格で、印度僧侶の儀容に倣ひ、黄色の衣服を着てゐる。黄教と呼ばれてゐるのはこれである。

蒙古では僧侶のことを喇嘛と稱へ、喇嘛の階級に佛爺喇嘛、札薩克喇嘛、大喇嘛、廟喇嘛、黑喇嘛等がある。佛爺喇嘛は、所謂法王呼圖克圖と稱へてゐる。札薩克喇嘛は、政權と教權とを併有し、大喇嘛は一寺院の座主で、其の下に廟喇嘛がゐり佛に仕へ、人民の葬祭冠婚等の禮儀を掌る。黑喇嘛は、

俗人の出家した者で純然たる僧侶ではない。寺院所謂喇嘛廟の構造は宏大壯嚴で、其附近に鄂博があつて、佛像を安置してゐる。時々其祭禮を行ふが、之は蒙古唯一の大典で、王公以下集合して、競馬、角力、假面踊等を行つて盛大を極める。又廟の周圍には漢商民が來て、天幕の中で、絹布、綿布、其他の日用品を賣つてゐる。廟内の事は萬事大喇嘛が掌つて賞罰權を有して、全く自治體をなしてゐる。

○葬式 蒙古人の葬式には三のやり方がある。屍體を棺桶に入れて埋葬するのは、長城附近の習慣で、之は漢人の眞似をしたのである。屍體を山頂や谷底に運んで之を風雨に晒し、狐狼野鳥の噬啄に委するのは普通一般の習慣である。之は喇嘛教の教義から出たのだが、一つは無定住の生活上の自然の結果である。三日の後屍體が未だ野鳥獸に喰はれてゐないと、更に喇嘛を招んで御經を讀んで貰ふ。火葬して骨を靈地に埋めるのは金持のみが行ふので、屍體を茶毘に附すと、喇嘛を呼んで御經を上げ全く焼けてしまうと、大喇嘛の處へ持つて行く。大喇嘛は之を粉に碎いて麥粉と一處に練り固め、後、靈塔に收めるか、或は五臺山（山西省）に收めさす。王公や金持は墓標を樹てるが、一般には樹てない。

(二) 新 疆

歷 史

新疆は古代は西戎といつて、漢以降西域と稱し、清に至つて今の名となつた。西域の區域は、今の

新疆地方から葱嶺以西一帯の地方であつた。

前漢時代には月氏が今の新疆にゐたが、月氏が匈奴の爲に西方に逐はれたので、其後は匈奴の屬國で、樓蘭、鄯善、伊吾廬、蒲類、車師、焉耆、温宿、尉頭、輪臺、烏壘、疎勒、沙車、于闐等の所謂西域三十六國が基布してゐた。

後漢は班超の力で西域を征服したが、班超の歿後、再び漢に叛いて烏孫、鮮卑、悦般、高車等交々威を振つた。後周の時には突厥、鐵勒、高昌等相次いで此地に割據した。それから回紇といふのが興つて、唐と協力して突厥を驅逐したが、後西域は總て唐の爲に統一された。

唐が衰へると、大食の侵略を受けて、二十五年間宗教戦が續いたが、遂に回教徒の勝利に歸した。大食の弱つたのに乗じて、回鶻が天山南路に國を建てたが、後に遼の皇族耶律大石に滅されて、西遼の一部となつた。西遼は國を建て、から八十四年で滅び、後更に蒙古の版圖に入つた。

蒙古は、成吉思汗の第二子察哈臺が、土耳其斯坦に封せられて、察哈臺國を建て、子孫世々西域を統治したが、帖木兒に滅された。帖木兒の死後、成吉思汗の後裔のサルタン、サイドが起つて此地を支配したが、土耳其人の回教宣教師で布教の爲に入りこんだのが勢を得、その使喚で土族が蜂起し、サルタン、サイドは滅亡した。

蒙古は其後、漠西の四部の中の準噶爾は伊犁に、杜爾伯特はイルチスに、土爾扈特は塔爾巴哈臺に、

和碩特は烏魯木齊に入つて、四衛拉徒と稱し、その族は廣く天山北西の曠野一帯から青海に亘つて、遊牧するやうになつた。かくて明末になると四衛拉徒は内訌の爲に離散したが、中で和碩特の固始汗は青海に據り、準噶爾は伊犁附近を併せて勢が盛んであつた。

其後準噶爾部は和碩特を滅して他部を併せ、西藏を威服し、天山南北路を攻略して強大となつたが、清の爲め亡された。清は平定後、此地を新疆と改稱した。其後烏什の回亂、昌吉の變があつたが、清は之を平定して、新疆は爾來五十年間泰平であつた。然るに張格爾の亂で、新疆は再び混亂に陥つた。

當時清國は長髮賊の亂で疲弊して、鎮定が出来ないのに乗じ、天山南路の東干人が叛亂を起した。東干は新疆の東北部に住んでゐる大族であつて、新疆の戍兵の過半は彼等から召集したのであるから、事態は甚しく險惡になつて、伊犁の七城は皆陥ちてしまつて、將軍以下八萬の兵員及官吏は皆殺されてしまつた。

此時露國は中央亞細亞を侵略し、基華、布哈拉、浩罕の三汗國を征服して清國と境を接したから、此亂に乗じ邊境を鎮定するを名として伊犁を占領した。一方天山南路では、回族が互に相争つて治りがつかない。其内に喀什噶爾の布蘇格查汗の參謀で阿古柏といふものが出て、四方を討伐して回部を平定し、布蘇格を追出して自立し、都を阿克蘇に定めたが、後、清將左宗棠の爲に破られて、臣下に弑され、其子は露領に逃げ込んでしまつた。之で回亂は全く平定した。

是に於て清は露國に向つて、其軍を伊犁から退けて呉れと談判したが、露國が承知しないので、兩國は將に開戦しやうとした。然し後互に讓歩して、コルゴス河を兩國の境とし、清から償金九百萬ルーブルを拂つて局を結んだ。

爾來清國は伊犁將軍を置いて、新疆に於ける滿蒙八旗及遊牧民を統轄し、且つ軍政を掌らせ、將軍の下に副都統と參贊大臣と領隊大臣とを置いて政務を執つた。領隊大臣は、屯田兵の長官で、伊犁に四つ、塔爾巴哈臺タルバハタイに一つあつた。又新疆巡撫があつて、布政司と按察使とを統べて、政務を執つて、其下に鎮迪道、伊塔道、阿克蘇道、喀什噶爾道の四兵備があつた。又其下に多くの府廳があつて、各種族は自治をしてゐた。

一九一一年清國に革命が起つて清朝が仆れて、中華民國となつたが、新疆の制度は清朝の舊によつて變らない。

風俗

○服裝 新疆に住んでゐる住民は、哈薩克、蒙古、纏頭回、漢回、滿族及漢族の六種であるから生活状態も各々異つて、服裝の如きもやはり異つてゐる。纏頭回は元來アールヤ族であるが、今は漢族に似て居る。然も鬚鬣蓬々として色白く、骨格逞しき所は、祖先の特徴を備へてゐる。纏頭回の男子

は、頭を剃つて坊主となつてゐる。女子は二條から四五條までに頭の毛を編んで、前髪にぶら下げてゐる。辮髪の二條なのは我國の丸鬚と同じで、亭主持である。四五條あるのは處女である。男女とも頭に先の光つたチベターカといふ帽子を被つてゐる。男は其下にお椀形のキアルマといふものを被つてゐる。帽子は天鷲絨又は布でこしらへ、男は黒、女は紅か緑の物を用ゐる。何方も色々な刺繡をして、大層綺麗である。男が御經を讀む時は、きつと帽子を被つて、其上にターバンを巻きつける。土人は之をダスタルと云ふ。アホン(僧侶)は常にターバンを巻いてゐる。

男の着物は、筒袖の上衣に長襦袢を着て、股引を穿くことは支那人と同じで、帯は赤地に白模様のある金巾の兵兒帶である。右側に小刀や革袋などを下げて、上から筒袖の長羽織を引つかける。足にはイチキといふ長足袋と短靴とを穿いてゐる。女の服装も男と大抵同じである。但し下衣は長い襯衣シヤブのやうな物を着て帯を締めないから、前の方は縫ひつけたまゝで、脱ぐ時には肩の處を開く。女が外出する時は白い布か、模様のある肩掛ショールのやうな物を頭から被つて、後の方へ長く垂れる。又馬の毛でこしらへた覆面ヴェールで顔を隠してゐる。

纏頭回は華美好きの民族で、男女とも赤い模様の着物を好む。男の帯や着物の裏は、老人も若い者も皆赤い更紗を用ゐる。

哈薩克は身體が長大で肥滿し、顔色は淺黒く、肩が張つて、威風堂々としてゐる。女は色が白く

て、肉が豊かで、頬の邊が淡紅で、容姿艶麗である。男の頭を剃ることや、女の髪を編む事は、纏頭回と同じで、着物も同様である。年頃の娘は花帽子を被り、三十歳以上の女は白い布を被る。男は帯を上衣の上に締める。哈萨克は纏頭回と異つて、質素な着物を好むから色は大抵黒か焦茶である。

漢回は身體が肥つて、色が白くて、顔が圓くて、眼が黒くて、眉毛が濃く、鬚髯蓬々として居る。女子は支那人と同じである。着物は男女とも支那人と同じである。

○婚姻 纏頭回は早婚で、女は十二三才で嫁に行く。婚姻は両親が双方の財産を較べて、小さい時から約束する。申込みは媒介者を立て、女の父が承諾すると、婿の家からは羊一頭を女の家を送つて結納の印とし、婚禮の期日を定めるのである。婚禮の時には、女の家でアホン(僧侶)を招んで御經をあげて、それから毛氈に嫁を載せて、婿の家へ擔いで行つて、先づ荒神様を拜んで、次にアホンが御經を讀んで、それから酒宴をして、それで儀式が終るのである。

纏頭回の日常の食物は、鳥獸の肉と穀物野菜とであるが、豚は宗教上の規定で不潔物として之を嫌ふ。一番好むのはグルチャージといふ飯と、シオルバといふ汁とである。恰度我國の麥飯に味噌汁のやうな物だ。貧乏人は之を食べることが出来ないで、麵麩と水を飲食する許りである。グルチャージといふのは、玄米と羊の肉と醬油と蕪と葡萄とを交せて煮たお粥のやうな物で、シオルバは羊の肉と野菜とを鹽水で煮た物である。醬油は牛乳で造へた乾酪の濃汁である。飲料は牛乳と粉茶とで、甘

瓜、西瓜、葡萄、梨、林檎等は彼等の嗜好物である。

婚禮の時の御馳走は、上等のグルチャージと、上等のシオルバとが主なる物で、其外羊の肉と野菜とを交せて造へた料理なども澤山出る。

中流以上の婚禮は結納の額も、婚儀の費用も莫大で、儀式は丁重で、複雑である。婿の家は衣類其他一切の費用を嫁の家に贈る。離婚する時は幾分を返す約束をする。

蒙古族、哈萨克族及其他は大同小異であるから、之を略して、哈萨克の食物だけを述べて置かう。哈萨克の常食は、羊の肉と、牛乳と、粟の粥とである。豚肉は無論宗教の習慣で喰べない。粟粥は粟の粉に羊の乳又は牛乳を交せて煮た物である。彼等は決して野菜を喰べない。飲料は牛乳に砂糖を交せた茶と馬の乳とである。馬乳は酸味を帯びた一種の酒で、夏、幼馬が乳離れした時(六月)から、五六ヶ月の間飲むので、他の時には求められない。この馬乳酒は搾つた馬乳を桶に盛つて、一日か二日の間攪き廻すと、醱酵して酸味を生じて一種の酒となる。其色からいつても、味からいつても、我國の濁酒のやうなもので、酔ひ加減が誠に結構である。婚禮の時には必ず之を用ゐるのである。

○誕生 纏頭回は數人の妻を持つ風がある。貧乏人は一人女房だから、家庭は單純だが、金持は二人女房から、三四人女房を持つ。女房の中に長妻が一人あつて家の事を總理し、餘の女房及小供は皆之に隸屬するのである。

哈薩克も多妻主義で、十數人の女房を持つてゐる者もある。一家の主人は家内の幾分を長妻に托して、自分は年の若い女を連れて、數十里遠方に牧畜することがある。けれども冬籠の時は、一家皆相集るのである。夫が死ぬと妻は夫の弟の妻となり、弟が死ぬと又其弟の妻となるのである。

纏頭回のお産には産婆は要らない。産婦は自分で始末する。唯難産の時だけ穩婆といふ者を招んで手傳はせる。生れた兒は産後始めて母の眼に觸れたもの、名を名前にする。例へば馬の頭を見れば馬頭といふ名をつける。又宗教上の英雄の名をつけることもある。皆母の望みで定めるのである。彼等は名ばかりで姓が無い。男の子を悦んで女の子を嫌ふのは回教一般の風習である。男兒が七八歳に成るとコーランを教へて、割禮(勢皮を破る式)を行つて親族朋友を招んで御馳走をする。

子供は各種族とも餘り大切にしない。夏は素裸體すっぱだかで放つて置き、冬は毛を裏にした着物を着せるが、子供はそれでも寒くて堪らないから、羊の坪内に入つて暖つてゐる。人が來ると子供の坊主頭が羊の群中からニユツと露はれて吃驚りさせる。

○宗教 此地方には大きな御祭が三ある。其中で年末のお祭が一番重い。即ち回教のラムタン(斷食祭)で二週間續く。此期間は日中食事をしないで、齋戒して御經を讀んで神を禮拜する。此祭日の間に平常信仰して居る陵や廟に詣でて、自分の頸や頭の皮を切り破つて血を流して神を祭る。此外毎週金曜日は基督教の日曜と同じ祭日である。又毎日五度宛神を禮拜する。即ち日の出る前に一度、午

前に一度、午後一度、日没前に一度、日没後に一度である。午前の禮拜はメツカの方を向いて、御經を讀んで御辭儀をする。一番重いのは日没の時の禮拜である。

祭日には男女相集つて、歌を歌つたり、踊を踊つたりする。平常にも隙のある時は歌つたり踊つたりする。其有様は、恰度我國の盆踊と同じである。樂器は蛇皮線と太鼓とで、歌ひながら之に和するのである。祭日に男女が美服を着て遊ぶのは我國と同じである。

○儀禮 婚禮や、割禮や、祝賀や、弔祭の時は、近處近邊から集つて來て、御馳走になる。宴會の席上では、長老が上席に坐る。家畜の頭の骨を盛つて長老に供するが、之は敬意を表する印である。長老は其肉片を取つて、左右に居る子弟にやる。子弟は長老の前に坐つて、口を開いて之を受ける。之は謝恩の禮である。それから多數の客人は、張幕の外内に車座になつて、飲んだり喰つたりする。食後には競馬や、競走や、角力などをやつて遊ぶ。勝つた者には賞品を與へる。青年少女の最も悦ぶ遊びは競馬である。之は乙女が馬を飛ばすと、青年が之を追懸けて、追ひつくと捉へて接吻する。けれども乙女は馬に乗るのが上手だから容易に追つかせない。それで若し追ひつくと、乙女は鞭を揮つて追懸けて來る青年を拂ひのける。さうすると見物人は、拍手喝采する。其中にとうとう捉へられて接吻されると、四方八方から拍手喝采が湧くやうに起る。

葬式は各種族大同小異である。纏頭回では人が死ぬと親族近隣が皆集つて來て、白い布の帽子を被

つて、大聲で慟哭する。屍體は水で湯灌して綺麗な着物を着せて、棺に入れないで、白い布で纏む。それからお経を讀んで、墓場に埋葬するのである。墓場は地面の高い處へ土を盛つたり、石を疊んだりするのである。中には碑を建て、その周りに土塀を築くものもある。概して墓場は金を惜まないで立派にする。埋葬してしまふとアホンを招んで御經を讀んで貰ひ、死者の遺物を皆に分けてやる。死んでから四十日目に弔祭を行ふ。金持は此時に競馬をやる。

喇嘛教を奉じてゐる蒙古人の葬式は纏頭回のは大分異がう。屍體を革の囊に入れて、喇嘛僧を招んで御經を讀んで貰ひ、家族は死者の周りに坐つてオイ／＼泣く。こんな風で四五日悲んでから葬るのであるが、其葬式は天葬、地葬、水葬といふ三つの仕方がある。天葬は屍體を空中に吊して鳥に啄ませ、地葬は地面に放り出して犬に喰はせ、水葬は川の中に放りこんで魚に喰はせる。死者の所有品は半分は寺に納め、半分は賣つて御經を上げる費用にする。喪に服した男女は百日の間、髪も梳かず、湯にも入らず、綺麗な着物も着ないで、念佛を唱へてゐる。

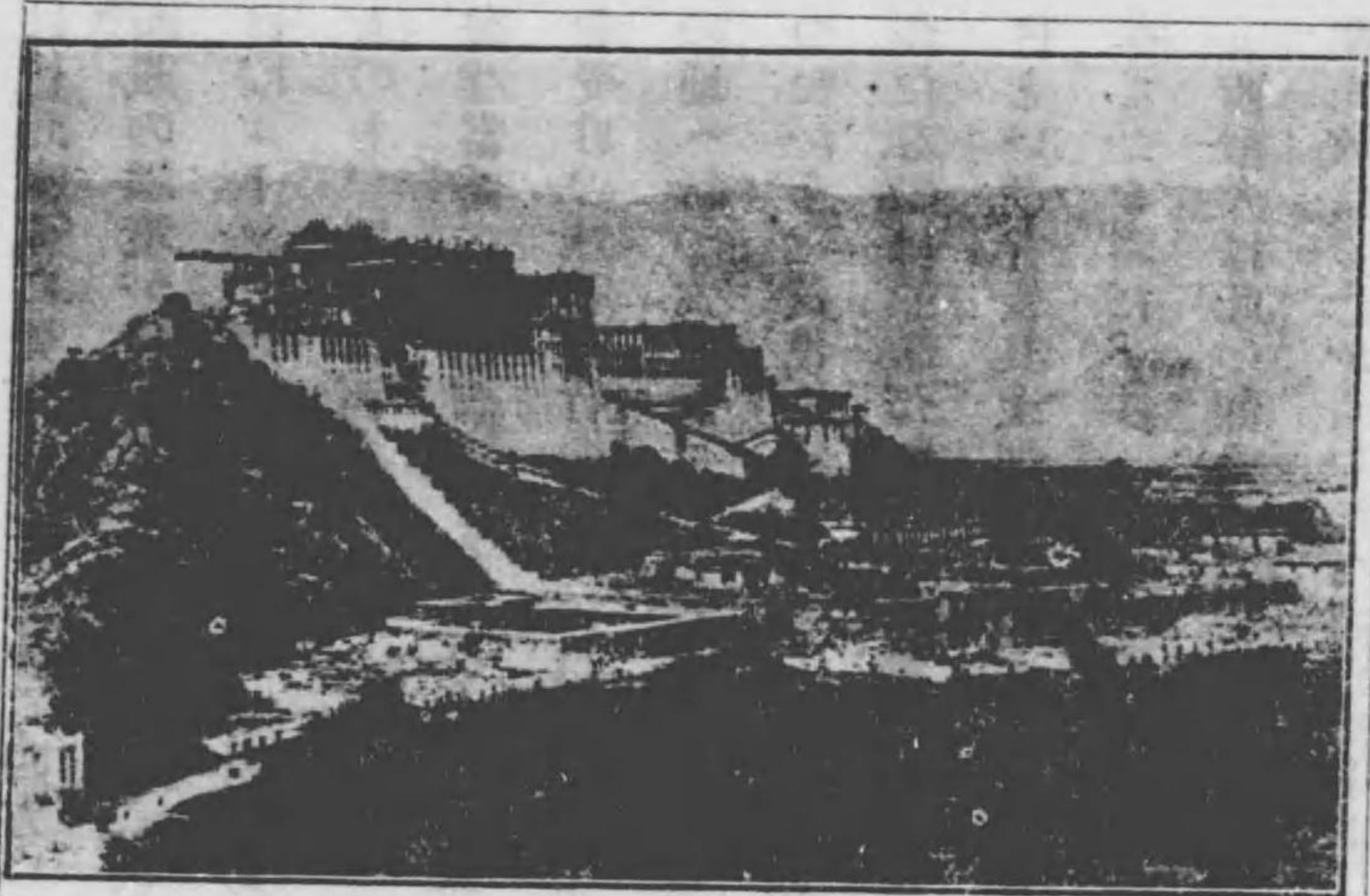
(ホ) 西 藏

政治上の地位

西藏は亞細亞の屋根である。西藏はパミール高原と共に人類發生の搖籃である。世界の總ての人種

は皆此高原に發生し、其れから四方に移住したものである。一旦此高原を出でて他に移住したものは西藏の國境が險峻で、入るに容易でないから決して歸つて來ない。故郷の西藏に歸るよりは、先きへ行けばブーツと豊饒で氣候のよい所があるから、皆先きへ／＼と行つてしまふ。で第二に西藏へ生れたものも、第三に西藏へ生れたものも、次ぎから次ぎへと移住するから、西藏に残つたものは太古人類發生當時の風俗習慣を全部失はずに保存してゐる譯だ。移住したものは、其移住地の氣候風土の影響を受け、熱帯へ行つたものは黒くなるし、寒帯へ行つたものは雪の影響で白くなるし、温帯でも黄土の地へ行つたものは黄色になつた。支那人や、日本人や、總ての東洋人は其通過した地方が黄土であつたから、黄色人種になつた。歐羅巴へ行つたものは雪の國だから白色人種になつた。亞弗利加へ行つたものは熱帯だから日に焦けて黒色人種になつた。其他馬來人種の煤色といひ、亞米利加人種の銅色といひ、皆其土地、氣候、風土の影響である。で西藏人だけは今でも發生當時の風格と肉色とを備へてゐる譯だ。

西藏人は此の如く上古の風格を備へ、上古の習慣を保持してゐるから、學術上の意味からいつても、祖先敬慕の念からいつても、大切にしなければならぬ。然るに之を野蠻人視して輕蔑するのは以ての外である。西藏の地勢が外界と遮断されてゐる爲め、他から入つて來るものもなく、内にゐるものは亦之に慣れて他と交通するを好まない。其で世界の隱匿國——秘密國——になつてしまつて、智識が



薩 達 喇 達 喇 麻 的 宮 殿

進まなかつたのである。西藏人のことは此位にして置て、西藏の政治上の地位を論ずると、今迄は外人も入らないし、又外人を入れなかつた。入るにも大變な困難であるため、政治上殆ど無價値に考へられてゐた。唯先年露國が達賴喇嘛を懐柔しやうとした爲め、英國が印度の國防に不安を感じ、一悶着して、遂に一九〇七年の英露契約で西藏に關する勢力圏を協定し、露國の野心を放棄せしめたことがあるばかりである。然し現戦争が終ると、世界の形勢が一變して、今迄怖はかつた露國が摧けてしまつて、其代りチユートニツク大帝國といふ恐ろしいものが出てきて、露國を傀儡に使つて、亞細亞に侵入して来るやうになるだらう。彼は一面に於て小亞細亞を根據として、海路は波斯灣から、陸路は波斯、亞富汗から印度に進撃する。又一面には西伯利亞及中央亞細亞から印度及極東に進撃して来るだらう。かうなると今迄毫も世人の念頭に置かれなかつた秘密國が、至大至重の地位を占むるやうになるだらう。

若しチユートニツク大帝國にして、達賴喇嘛を懐柔し、此高原に足溜を得たとすると、彼は一方波斯、亞富汗及バミール方面から怒濤の如く印度に押寄すると同時に、西藏からシツキム及ブータンを通つて、雪崩の如く印度に下撃するだらう。印度の人民は亦平生人類の想像することの出来ない程苛酷な虐待を英國から受けてゐるから、争ひ起つて箝食盡漿して獨露軍を迎へるだらう。かうなると英人は如何に堅忍不拔だといつても、逃げない譯には行くまい。英人の印度に於ける權勢は一朝にして消滅するだらう。

西藏の印度に對する戰略上の地位は此の如く重大である。若し又英國が西藏を其權下に置いたなら獨露の大軍が縦ひ潮の如く波斯、亞富汗の方面から、印度に押寄すると、西藏高原に控へて居る英軍が直に新疆に出動して、葱嶺の嶮から逆落しにフェルガナ及バダクシャンに進入したら、獨露は其側背を威嚇されるので、深く進んで亞富汗の國境に進入することが出来なくなる。其上英國の海軍が優勢で、蘇士が其手中にある以上、南方及東方は安全だから、全力を西方に用ふることが出来る。かうなると英印の交通線は、チユートニツク勢力の交通線よりも遙かに優勢だから、西部の國境線を突破されることは數の上にならぬ譯だ。

次に西藏に於ける我國の地位を論ずると、既に論じた如く、我國は相給共存の必要上、支那と同盟以上、密接に結合しなくてはならないから、支那の國境は支那と協同して、防禦しなくてはならぬ。

即ち西藏の國境も、當然守備しなくてはならぬ。我國が西藏に行つて、西藏の防禦を援助するといふことになると、英國も安心して西藏から手を引くだらう。否引かなければならぬ。又印度人も直接我文明の光を受けて覺醒し、大に世界の大潮流に乗つて、自治自存の道を立つることが出来るから、英國も教導補育の手を引くだらう。さうすれば印度も英人の虐政を云々する必要もなく、英人も世人の批評に上ることもなく、双方共に晴々するだらう。

其他我國が西藏の防備を手傳ふ以上、中央亞細亞方面から侵入し來る獨逸の勢力は側面を脅かされるから、新疆を突破することは出来ない。それで我は確實に亞細亞大陸に於ける我利益圈を保護することが出来る。但し現在英國は西藏を自己の保護國であると思つてゐるから、支那の兵を入れるさへ黙過しない。况んや我兵をやである。だから我國や支那が西藏に嘴を挟むことは絶対に承知しまい。然し戦後の局面は今迄のやうに、英國をして到る處に其我慾を張り通させることはあるまい。故に今の所我國民は唯西藏に對する我關係の重要なことを了解して置けばよいのである。萬一の時英國が故障を云ふやうなことがあつたら、其時吾人は臨機の處置を取つたらよからう。吾人は來るべき講和會議に、敵國獨逸よりは英國の方が我要求を妨害するだらうと思つてゐるから、西藏に對する我國の發言權に故障をいふ位は當然と思つてゐる。然し其は英國の隨意で、我は我の正當と信する所をやり通せばよいのである。南方に對する戰略上の地位は支那の部で説明したから茲には説かない。

歴史

西藏は太古人類發生の搖籃地である。世界の各人種は此地とパミール高原とから出て四方に移住したのである。苗族は此地から甘肅及四川を経て黄河、揚子江の流域に移住した。交趾支那族は此地から四川雲南を経て、後印度に移住した。次に漢族は故郷を去つて甘肅から陝西に入り、其から黄河の流域にゐた苗族を追拂つて其他を占領した。漢族に次で此故郷を出たのが氐と羌とで、羌は青海に居



中世時代の西藏騎馬武者
胃甲の鐵は銀の牛犁を紐で綴つて來てゐる

り、氐は月氏となつて甘肅と新疆との境に蕃殖した。之が丁度周の時代で、四五百年間は此状態であつたが、戦國から秦の時代に亘つて匈奴が強盛となつて、月氏を西方に追拂つた。月氏は西に走つて亞富汗で地歩を占め、漢の時には大月氏となつて中央亞細亞の強大國となつた。三國を経て、兩晋の時に至り、吐谷潭が西藏

高原を下つて、羌を逐つて青海の地に占居した。次に白蘭が高原を下つて青海に住んだ。五胡十六國の時、羌は後秦國を建て、氏は後涼國を建てた。

是時まで人類の搖籃地たる西藏は杳として聞く所がなかつたが、南北朝になつて始て吐蕃といふ名で歴史に現はれた。吐蕃は唐初に國勢大に揚り、青海に下つて白蘭や吐谷渾を征服し、頻に唐と攻争した。此時吐蕃に特勤德隆贊といふ英雄が出て、四方を征服して版圖を拓き、唐と和睦して其子に唐の文成公主を娶つて、唐の文物を輸入した。喜馬拉耶山中の泥波羅や、不丹や、シツキムには印度アールヤ族が住んでゐたのだが、いつの頃からか、故郷の哲伯特族が入つて、印度アールヤ族を追出して之を占領したが、此時に至つて吐蕃の羈縻する所となつた。之から印度と支那との交通は中央亞細亞を廻る手数を省いて、西藏を通過した。此頃から佛教が隆盛になつた。

後蒙古が勃興した時、吐蕃は忽必烈の征服する所となつた。時に八思巴といふ名僧が出て、喇嘛教を大成した。之が紅教喇嘛である。然るに喇嘛の風儀が紊れたので宗喀巴が出て宗教改革を唱へ、喇嘛教を一新した。之が黃教喇嘛である。此頃から吐蕃は哲伯特と稱した。

宗喀巴が死んでから、其後繼者は代々達賴喇嘛といつて、黃教喇嘛を總管して、次第に勢力を得た。殊に達賴部長の俺答汗の歸依を得た爲に、黃教は内外蒙古から天山北路に擴まつた。清の興起した時、哲伯特は清に征服された。此頃から哲伯特は西藏の名を得た。



敬禮西藏人丁寧の先づ帽を脱いで右の手に捧げ左手の指先で耳の前を押し出すので

て二回拉薩を占領し、殆んど西藏を保護國同様にして露國の野望を挫いた。次いで日英同盟が成つて、印度も愈々安全になつたので、一九〇七年英露協約が成つて露國の南進に對する心配はなくなつた。そこで英國は全然西藏から手を引いた。然し決して心底から放棄してしまつたのでは無かつた。

だから四川總督の趙爾豐が西藏に對して高壓を加へて、之を支那の一州たらしめやうとして、達賴喇嘛を放逐した時、英國は達賴をカルカッタに招いて厚く庇護した。西藏人は英國の援助を心待みに、力を極めて清兵に抵抗して、屢之を破つたので、清廷は如何ともすることが出來ずに、達賴の罪

十九世紀の初期から露國は中央亞細亞の經路に着手し、基華、布哈拉、浩罕の三汗國を征服したが、一八八八年露將グロムチエヴスキーがバミール高原を占領したので、大に英國人の注意を喚起し、英露の葛藤を惹起した折柄、更に露國が使を達賴喇嘛に通じたので、英國は默視する譯には行かないで、二回西藏を遠征し



居 芝 教 宗 の 藏 西
るすな居芝てつ被を面の鬼るあに話神の教佛

を許して講和しやうとした時に、支那に革命が勃發し、西藏人は之に乗じて獨立を宣言した。

達賴喇嘛は英國人の援助で、兵を募り、銃器彈藥を整へ、中華民國第一年の六月、儀容堂々と西藏へ歸還し、英國と英藏條約を締結した。北京政府は四川都督に征西軍の派遣を命ずると同時に、英國公使に英國の局外中立嚴守を切望して、英藏條約を改訂して、西藏に於ける商務の利益は中英兩國の共同であるが、英國始め他國の兵は西藏に駐在することが出来ないことにしたいと提議した。然るに達賴喇嘛の歸還と共に、兵數激増し、勇氣百倍した西藏軍は連戰連勝で支那兵を壓迫したので、支那では四川、雲南の軍に命じて西藏征討に向はせた。英國は之を見て商業保護の名の下に、兵三千を江孜^{キャンツェ}から進めて、拉薩^{ラサ}に入らしめて、西藏後援の態度を取った。

西藏軍は拉薩の支那兵陣地を總攻撃したが、撃退されたので、之が動機となつて講和條件が成立し、

支那兵は武器彈藥を引渡して歸國した。此時民國の救援軍が來着して西藏軍と交戦したが、支那兵は敗走して西藏に入ることが出来なかつた。

斯くて英國は西藏の獨立に干渉するに決し、商民保護の名で兵五千を派して、オタワサから前藏の布達拉府^{ブダラ}に至らせ、次いで北京駐在の英國公使をして、若し中華民國が續いて征藏軍を進めるなれば、英國は中華民國を承認しないばかりでなく、實力を以て西藏の獨立を援助すると談判させた。

民國政府は英國の抗議に辟易して征藏軍の進撃を止め、西藏と平和の協定を結んで兵を引きあげた。英國は次いで西藏問題に關して、一九〇六年の英清條約に據り抗議を提出したが、民國政府は荏苒日を送つて談判を無期限に延期して置いて、此間に西藏を懐柔しやとした。

英國政府は直に袁世凱の術策を看破し、威力を示して民國政府の明答を求むるに決し、西藏駐劄の英兵に命じ、一九一二年の一月、西藏から阿墩に進入して麗江府に向はしめた。同時に露も英と密約して蒙古西藏の分割方針を定めたとの噂が立つた。そこで民國政府は大に狼狽して、英國の要求を容れたので英國は撤兵した。

かくて英露提携の結果、蒙藏協約が成立した。此協約の要目は、蒙古と西藏とは互に獨立を承認し、互に佛教の擴布に盡力し、相互の間に通商交通を開かうとするにあつた。

次で一九一三年十月、支那及印度政府の代表者はシムラに會議を開いて、三國の關係を協定した。

此協定は一九一四年四月調印したもので七箇條から成つてゐる。此協約により、支那は西藏の宗主権を確保し、決して西藏を支那の領域に加へないこと、西藏の代議士を支那の議會に召ばないこと、軍隊を後藏に入れないこと、陸軍將校を駐在させないこと、及西藏に移民を送らないことを約し、江孜に駐在してゐる英國代理人は衛兵を率ゐて隨時拉薩に行き得る權利を承認した。

通商條約に就ては、一八九三年と一九〇八年の通商規定、並に一九〇六年の協約第三條を廢し、支那の間に折衝して漸く協定を告げた時、支那政府は急に談判を中止し、更に一九一四年七月の英藏協約に調印することを拒んだ。そこで英國は支那政府に通牒を送つて支那が此協約に調印しない間は、協約によつて支那に確保した一切の利益と、一切の特權とを與へないと聲明した。支那が英藏協約に調印しない理由はチャムドを後藏に入れ、又嚮に四川省に編入した裏塘と巴塘とを前藏に入れるのが不平であつたからだ。で一九一四年七月の英藏協約は未だに發表されない。

風 俗

○服装 西藏人は筋肉の發達の逞しい種族で、顔は目が小く頬骨が出で、鼻が隆くて、口が大きく、一般に鬚髯は剃つてしまふ。着物は粗毛の『セルジ』又は羊毛皮で造へて、衣の長さは膝まであつて、帯で腰の處を結んでゐる。袴は木綿の股引で、足には長靴を穿いてゐる。帽子は羊毛皮で圓く周邊を



貴婦人 圖は薩拉及前藏地方の風俗
俗に頸に掛けた寶石の入る連珠の銀はに飾りつてる小の吊る

肩から背に垂れて、刺繍した絹の上の狭い下の廣い領布を肩の周りに被つてゐる。それには金銀寶石の裝飾がしてある。耳には金銀珠玉の耳飾をして、寶石で飾つた布を纏つてゐる。又藍色の繪具で兩頬を塗つて裝飾とする。

○住居 家屋は粗石か乃至磚瓦等で造へた二階建が多く、概ね扁平で、外から階段で上れるやうになつてゐる。屋根の頂上には毎時檻樓の網が翻つて居る。之が有名な祈禱幢である。家の土間には家畜を繋いで、人はその上の室に住んでゐる。窓が少くて屋根に煙突兼用の明りとり穴があるだけ

縁どり、赤と青との綿布を上につけた物を冠つてゐる。

女は男に比べると身長が低くて肥えてゐる。衣服は黒赤色の『セルジ』製の一枚服で、赤色の同質の織物で縁をとり、襟は折襟で、羊毛皮で造へて、男同様の帯を締めてゐる。女の祭日の時の盛装は、なか／＼綺麗である。髪は百條許りの辮髪にして



婚禮 花嫁花婿の冠を子冠の白の用の式儀
類卷した喇嘛僧の前で盃を事する

だから、室内の暗いこと甚しい。

支那の四川、甘肅の邊境及青海地方に住んでゐる西藏人の過半は遊牧の民で、天幕の中に住んでゐる。

○婚姻 一婦多夫の習慣で、而もその夫は皆兄弟である。男女は正式に婚姻の契約をする前に、その適否を定める爲め、或る時期の間共同生活をする。そこで意氣が投合すると、愈々約束をして黄道吉日を選んで、親戚知己を招んで式を挙げる。一同は絹の哈達で花嫁花婿を裝飾した上、宴會を開いて祝ふ。然し結婚後の結合は甚だ弱くて、妻は更に金持を選んで夫を棄て、夫は更に美人を求めて妻を捨てる者が多い。

○誕生 産湯は十五日目に始めて行ふ。女の兒の時は生後二日、男の兒ならば三日目に朋友や知己や近隣の人々が来て祝詞を述べ、哈達(西藏の酒)と哈達とを贈る。哈達の一は赤兒の頭に纏るみ、他は兩親が

貰ふ。それから宴會に移つて大に騒ぎ賑ふのである。

○宗教 西藏の宗教は佛教の中の喇嘛教といふ特有のものである。蒙古の部に於て少しく述べて置いたが、更に一步を進めて詳説しやう。

喇嘛とは優勝無上の義で西藏語である。で僧院又は高位の僧侶にのみ用ひるのが適當であるが、何時の頃からか僧侶全般の稱號となつてしまつた。

喇嘛の起源は甚だ古くて約一千年の昔に遡る。西曆六百三十四年の頃、唐及泥波爾國から皇女を娶つた時、佛教が一緒に西藏に傳つた。國王は殿堂を建て、皇女の持参した佛像を祀り、留學生を印度に送つて佛典を研究させた。後西藏文字が出来たから佛典を反譯して西藏特有の佛教を創めた。之が喇嘛教の發端である。

然しこの教は西藏在來の幽鬼崇拜教から激烈な反對を受けて、百年といふものは進歩頗る遅々たるものであつたが、屬賓の境に住んでゐた印度學者巴特瑞納巴幹師が西藏國王に聘せられて入國してから、師の智識と熱心とで幽鬼派を根底から覆した。彼は西藏に在ること僅に二年の間に僧侶の秩序を整理し、僧院を建設して、能く確固たる喇嘛教の基礎を築いた。

爾後喇嘛教は益々隆盛になつて、四方の學者が西藏に遊學するに至つたが、朗達磨が兄王を弑して王となつてから、喇嘛教を悪んで之が破滅を企て、三年の間に全國の殿堂寺院を破壊し、佛典を燒却

して、所謂西藏破佛時代を現はしたが、後朗達磨が佛教信者の爲に暗殺されたので、漸く恢復して百年後に再び昔の隆盛を見るに至つた。

けれども喇嘛教の繁榮に従つて、社會及僧侶の道德が衰へ、國民の元氣が失せ、國力は疲憊するやうになつた。此時宗教改革を斷行して西藏佛教の危いのを救つた者がある。それは印度の高僧ドジョ・アシシア師で、入藏の時は既に六十歳の高齡であつた。

アシシア師の改革した喇嘛教は八思巴(尊者の意味。本名はマテ・ドロツゼ)といふ絶倫の善知識によつて大成された。

彼は聰明睿智、七歳で經を誦し法を演じ、十五歳で遍く三藏に通じ、佛教の眞理を極めた。歴史の部にも書いた如く彼は元の忽必烈の尊信を得たので、喇嘛教の弘布に非常の便宜を得て隆盛となつた。之が紅教である。後僧侶の風儀が次第に亂れ、アシシア師や八思巴の苦心の跡が破壊されてしまつたので宗喀巴(フオンカバ)といふものが出て宗教改革を遂げた。宗喀巴は甘肅省西寧府の人で、十四の時西藏へ行つて薩斯迦廟(サスキヤ)で紅教を學んで得道したが、當時紅教の腐敗其極に達したのを見て、慨然起つて一派を開き、紅教の紅帽紅衣に對し黃帽黃衣を着た。其で之を黃教といつた。

宗喀巴(フオンカバ)に二大弟子があつて、一を達賴喇嘛(ダライ)といひ、他を班禪喇嘛(パンチエン)と稱した。宗喀巴の教義は教主は世々轉生して一切衆生を濟度するといふにあつて、教主は轉生して絶ゆる時がない。教主が寂滅する時は必ず其轉生者を指示するといふことを教へた。であるから達賴や班禪が寂滅すると、衆徒は彼の指示し



達 賴 喇 嘛 の 像 肖

達賴は又佛世觀音菩薩の化身で、班禪は又佛世觀音菩薩の化身で、班禪は又佛世觀音菩薩の化身である。

た地方へ行つて轉生兒を索して來て之を次の達賴、班禪にする。だから随分大馬鹿が達賴になることがある。

達賴は至大至高の位で無限の權力を有してゐる。西藏人は達賴は佛教と西藏國とを保護する爲め、世に出現した佛陀の權化であると尊崇してゐる。班禪は西藏の副王である。然し人民は班禪は後藏法王兼國王であ

ると思つて、至大の尊敬を拂つてゐる。達賴は蒙古語大海の義で、班禪は大尊者の意味である。達賴、班禪に次ぐ喇嘛は、タラナツ喇嘛(チエフツオンタンバ)と、チャンゲー喇嘛(アチヤホトクト)である。タラナツ喇嘛はタラナツ菩薩の轉生であるとして渴仰され、庫倫に駐在し蒙古全部に勢力を有つてゐる。チャンゲー喇嘛は北京、多倫諾爾(トルンノール)に往來して宗務を見てゐる。

此次に四つの大喇嘛がある。一は蒙古の大喇嘛で喀爾喀の庫倫廟(カールカ)にゐる。二はニンマバの大喇嘛で、西藏の薩斯迦(サスキヤ)の廟にゐる。之は紅教派である。三は不丹(ブタン)のダルマ、ラジャで紅教のダグバ派に屬

してゐる。四はヤムドク湖の著名なる僧院長である。

以上が今日までの喇嘛教の沿革であるが、次に少しく喇嘛に就て述べやう。僧侶は國中到る處に充満して恰も雨後の筍の様に散在してゐる。城壁然とした僧院の宏壯雄美は蒙古に勝つてゐる。

喇嘛教徒の平素唱へるのは唵嘛呢叭彌吽オンマニパミトウの六字の唱名である。之は願ふ所は蓮華上の寶座といふ義である。恰度我國の南無阿彌陀佛と同じく、老若男女之を唱へない者はなく、岩や、樹や、壁や、石碑や、其他一切の器物に記してないものはない。甚だしきは肉を割いて骨に刻むものがある。之を一たび唱へれば一切の經典を誦したのと同じ利益があつて、一切の苦厄を免れ、成佛を得ることが出来ると信じてゐる。

黄教派僧侶の服装は樺色の衣服で、赭色の上衣の上に帯を結んで、其上に刺繡した外袍を着てゐる。帯には革製の塚、筆筒、巾着並に有り難い佛具を吊してゐる。長靴は犛牛ヤクの毛皮を底とした、硬い赤皮で造へたもので、長さは殆んど膝に達する位である。

帽子は形状種類が色々あるが、重なるものは圓い頭巾形の黒帽と、歐洲の僧冠に似た紅帽と、紅帽に似て更に先の尖つた黄帽との三つである。黒帽は幽鬼派が被り、紅帽は紅教が被り、黄帽は黄教が被る。宗派別は皆に帽子のみではない、家屋に書いた條文から、念珠の末まで、各々特有の色の物を用ひて相對抗してゐる。其他喇嘛に關した事は、蒙古の部を参照して貰ひたい。

○葬式 人が死ぬと、喇嘛が来て、靈魂を抜き取るまでは死骸を動かすことが出来ない。動かすと靈魂が逃げて出て、妖鬼に捕へられると信じて、白布で死人の顔を蔽うて待つてゐる。喇嘛は來ると靜に死人の枕頭に坐つて、窓戸を閉めさせて、西方淨土即ち極樂の方角を示す歌を唱へて、最後に自分の食指と拇指とで、死人の帽子から垂れてゐる三四本の毛髮を抜きとつて靈魂をこの毛穴から逸しさせるのである。

葬式の日、喇嘛の卜者が天文を見て之を定めるので、それまでは死人に坐禪させて、繩で堅く縛つて室の一隅に安置し、毎日親戚知己を招んで御馳走をし、また喇嘛に御經を讀んで貰ふ。會葬者は始終「唵嘛呢叭彌吽オンマニパミトウ」を唱へる。愈々當日になると、宴會の後に行列が出る。喇嘛が道案内をして、太鼓を鳴らし、骨の喇叭を吹いて「唵嘛呢叭彌吽」を唱へながら、徐々に進行して丘陵の頂に行く。そこで死骸は埋葬するか、又は火葬するか、或は斬り裂いて鷺の餌食にする。又ヤムドク湖地方では水葬が行はれる。

三 西 伯 利 亞

位 置

西伯利亞は亞細亞の北に位し、北は北氷洋に臨み、東はベーリング海、オホーツク海(オホーツク海、或はオホーツク海とも稱す)及日本海に濱し、西は烏拉爾山脈を以て歐羅巴に境し、南は滿洲、蒙古及土耳其斯坦に接してゐる。

地勢及氣候

西伯利亞は地勢と氣候とで之を(一)凍土帯と(二)森林帯と(三)曠野帯と(四)山嶽帯との四帯に區分する。

○凍土帯 は北緯六十五度以北の北氷洋に面した海岸地帯で、地勢は極く低く、其に時々暴風が起つて北氷洋の海波を吹き揚げ、其が海岸で氷結するから、冬は水陸の分界が分明でない。湖水は深さ一丈位でも水底まで氷結してしまふ。大小の河流は先づ河口が凍り初め、次に上流から流れて来る泥混りの水が氷の上に溢れて氷結する。かくて淤泥の水が段々堆積して大きな氷山が出来る。此氷山は普通一丈二三尺位あるが、春になると此氷山は上流から流れて来る氷塊と一緒にたつて、氷岸の間を流れ下る。此氷塊の中には前世界の動物の遺骨を交へてゐるものがある。北氷洋の海岸は幾億年の間凍つてゐたので、地下六七百尺の邊までは土地が全く凍つてゐる。其で夏になると凍上の外面が融けて澤となつて、一望千里際涯がない。之に野苜、紅覆盆子、紅莓、苔等が生育し、沙丘なども諸所出現して、茲に幾百萬の水禽が飛んで来て、諧々たる妙音を弄して、夏の長い日を樂んでゐる。若し旅客が

此處に来て、沙丘に上つて眼を放つと、河も、湖、沼も、澤も、總て鴨、鷺鳥、鵝、鴨、雁等が一ばいで水が見えない。其間へ馴鹿が来て、野苜を食ひながら悠々と遊んでゐる状は、寔に極樂世界である。唯時に白熊や熊が襲來して水禽や馴鹿を爪牙にかけるので、此極樂世界も一時無間地獄に化してしまふ事があるが、之さへなくば凍土帯の夏は實に世界無比の極樂世界と謂つてもよい、こんな愉快な極樂世界も其期間が甚だ短くて、八月になると凜烈の寒氣が侵入して来て、鵝雁も馴鹿も去つてしまふ。九、十、十一月と段々冬になるに随つて、雪は霏々として原野を埋め、四方皚々として一物の目を遮るものがない。寒に入つてから四十日経つと、温度は氷點下四十五度に下つて、土地も巖石も、寒氣の爲に裂ける程の嚴寒となるのである。

○森林帯 は北緯六十度から五十度の間に延長してゐる森林地で、樹木の種類は所によつて異つてゐる。空氣は濕潤で、氣候の比較的溫暖な處では銀松、新羅松、樺、赤楊等の喬木が繁茂して、尺寸の地も餘さないうで、樹が倒れて腐朽ると、更に其上に新しい木が生へる。空氣の乾燥してゐる土地並に山の斜面には樅、松、落葉松等が生へる。其數は少いが、樹幹は長大である。夏は炎熱が甚だしく、水蒸氣が空氣中に充滿するので、波斯灣と同じやうに釜茹地獄になつてしまふ。特に森林中には數多の湖沼があつて、瘴氣が水蒸氣と共に蒸發して林中に遍滿し、風は密林に妨げられて之を吹拂ふことが出来ないから、單に人間ばかりではない、獸類でも森林中に入れば必ず瘴氣に犯される。其上森林中

には幾億萬の蚊虻が発生して人畜を害するから、到底近づくことが出来ない。猛獸さへ之に堪へられないで、凍土帯に逃げ出すさうだ。土人は網で顔を包んで睡眠し、又は生木か生葉を燃して、室内や家畜小屋を煙烟して蚊虻を防ぐ。夏はこんなに暑くて厭な土地だが、冬も矢張り面白くない、嚴寒には寒暖計が氷點下四十度乃至四十五度に下ることは稀しくない。こんな嚴寒中でも森林帯は風がないので凌ぎよい。實に此帯は全くの無風で、降雪の際など支那や我國のやうに、『雪は鷲毛に似て飛んで散亂し』などの詩趣なく、一片の降雪も規則正しく直下して地に下る。四方寂寥として天地が静かだから、人語も犬聲も遠くに聞え、時々寒氣の爲に樹木が折れ、地盤の破裂する音が此寂寥を破つて凄じい感を人に與へる。野鹿は此時四方から集まつて来て、千百群をなして、肩や脊を摩り合はせて暖を取つてゐる。犬は積雪の中に深く穴を穿つて其中に潜んで、人が通ると突如吠えつく。鳥は時々此寂寥な寒空を翱翔するが、冷却した空氣の作用で、飛翔した跡に一條の白氣を引いて、遠くから望むと恰度白煙の搖曳するやうである。土人はこんなに寒氣が凜烈で四方一面の銀世界でも、空氣が靜穩だから喜んで外出し、所謂『人は鶴裳を着て立つて徘徊す』の詩趣を起す。中には遠くへ旅行するものもある。けれども一たび寒風が吹き起ると外出など決して出来ない、寒暖計は氷點下僅か十五度でも、血液は血管で凍凝する懼れがある。如何に大きな襦袢どてらを着てゐても此風に當つては生命を保つことは出来ない。唯屋内に入つて焚火で暖を取るより外免るゝ道がない。土人は吹雪の猛烈なのをブルカと

いつてゐるが、ブルカの來る時は雷に雪を飛散させる許りでなく、地上の積雪を捲き揚げるから、天地が晦冥となつて、目を開けることも歩行することも出来ない。土人は櫛の下に潜つてブルカの終るのを俟つてゐるが、ブルカが長く止まない時は凍死を免れない。

○曠野帯 は北緯五十五度以南で、諸大山脈の間に介在する曠野の總稱である。此内バラバ、ミヌーシン、プラト等が一番大きい。バラバ曠野は泥土質で、春は水分を吸収し、夏は腐敗して瘴氣を發す。此瘴氣は甚だ濃厚で、曠野に充滿し、雷に人類に害があるばかりではない、禽獸も之が爲に斃れる。瘴氣が草の葉に附着すると、露になつて紅色の斑紋を帯び、鹹味を含んでゐる。獸類が之を嘗めると疫疾を發し、其症狀は極めて劇烈である。バラバ曠野は地味が沃饒で、氣候が温和だから、斯んな疫疾さへなければ、人口も繁殖し、耕地も開拓さるべき土地である。ミヌーシン曠野も亦地味が肥沃で、氣候が温和だから、人口は著しく繁殖し、穀物も盛んに收穫され、西伯利亞各地へ供給してゐる。此の曠野の中心地はミヌーシンスク府で、西伯利亞鐵道の一驛アチンスクから支線を通じてゐる。プラト曠野は山嶽に圍繞され、水流に富んでゐて、地味も亦沃饒である。此曠野に住んでゐるブリヤート人は溝渠を穿つて田圃に灌漑し、盛んに穀物を產出してゐる。此曠野から出る小麥は、西伯利亞第一の良種である。

○山嶽帶 は西伯利亞の南部と東部とに延長する山嶽地方の總稱で、支那と日本とに最も近いから、

我國との利害關係は特に深い。此地帯には亞爾泰、薩彥、タウル、スタノオイ、ヤプロノオイ、黒龍江及カムチャツカの七大山脈が連亘し、森林にも鑛石にも富んでゐる。特に金鑛は一番多い。

○氣候 南に亞爾泰、薩彥、ヤプロノオイの峨々たる峻嶺が横はつてゐて、南方熱帯から吹き送る暖風を二重に遮断し、スタノオイ、黒龍江の連山は東南から吹き送る太平洋の暖氣を遮断し、西方大西洋から吹いて来る暖氣は烏拉爾山脈で遮断され、其上地勢が北氷洋に向つて傾斜して、北極から吹き送る寒風を遮断すべき障壁がない。其から氷は北氷洋から盛に流れて来るし、内地の山頂や谷底や、湖沼には千古の氷層があるし、又山野には千古斧を入れない大森林があつて、深く日光を遮断してゐるから、西伯利亞は恰も一大冷蔵庫のやうなもので、寒氣が極めて強い。

面積、人口

面積は四百八十三萬方哩、人口は不明であるが、一九一六年の政治年鑑には七百萬人としてある。

人種

西伯利亞の人種は、大別するとスラブ、芬、蒙古、通古斯、土耳其格、猶太の六種であるが、更に細別すると二十八種となる。その主要なもの、住地と人口とを示せば次のやうである。

○スラヴ族 西伯利亞全土に亘つて約四百萬ある。

○芬族 ウォグールは多くはトボリスク省の北部に住んで、牧畜及漁業に従來してゐる。約四千。オースチア人は北氷洋の沿岸並にオビとイルヂスとの兩河の間に住んで、専ら獸獵漁魚を業とし、又松の實の採集に従つてゐる。約三萬五千。サモエド人は北氷洋の沿岸と、トボリスク及エニセイスク省内とに住んで、獸獵漁魚に従ひ、又マンモスの遺骨を採集してゐる。約七千。

○蒙古族 ブリヤート人は後貝加爾省及イルクトス省の一部に住んで、牧畜を業とし、又農業に従つてゐる。約三十萬。蠻子人は黒龍江省に住んで農業に従つてゐる。約三萬五千。鞭靷人は主にトボリスク及トムスクの兩省に住んで、遊牧を事としてゐる。約四萬五千。ヤクト人は概ねヤクトスク州に住んで、獸獵及牧畜を業としてゐる。

○通古斯族 通古斯人はエニセイ省から東は大平洋岸、南は支那の國境に至る間に住んで、馴鹿を養ひ、獸獵漁魚に従つてゐる。約五萬五千。ギリヤク人は黒龍江の下流及オホート海の沿岸に住んで、専ら漁業に従事し、又獸獵をしたりして、犬に櫓を挽かしてゐる。約一萬七千。

○土耳其格族 テレウト人は亞爾泰山北の地に遊牧して、牧畜獵業をしてゐる。約二萬二千。キルギス人はキルギス曠原に住んで、牧畜を業とし傍ら農に従つてゐる。約百十萬。

行政區劃

西伯利亞の現今の行政區劃は獨立省、曠原總督管區、イルクーツク總督管區、黑龍江總督管區の四つである。獨立區はトボリスク、トムスクの二省で、内務省に直隸し、曠原總督管區はアクモリンスク、セミバラチンスクの二省で、總督府はオムスク市に在る。之れが西西伯利亞である。イルクーツク總督管區は、エニセイ、イルクーツクの二省とヤクートスク州とで、總督府はイルクーツク市にある。黑龍江總督管區は後貝加爾、黑龍、沿岸の三州と薩哈連島とで、總督府はハバロフスク市に在る。之が東西西伯利亞である。

都市

主要なる都市は浦潮斯德(人口十萬)、イルクーツク(約十萬)、トムスク(六萬一千)、オムスク(六萬)、ブラゴエシチェンスク(六萬)、チタ(五萬七千)、ハバロフスク(五萬)、チュメン(四萬二千)、クラスノヤルスク(三萬三千)、トボリスク(二萬二千)、ヤクートスク(一萬二千)等である。

産業

○農業 西伯利亞は土地に比べて人口が少ない上に、旱魃、惡蟲等の被害があるので、亞爾泰及ミヌーシンスクの兩地方を除く外は、完全な收穫を得ることが困難である、農産物中最も重要なのは小

麥、次が燕麥で、裸麥や大麥も穫れる。又馬鈴薯の産額は多量で、西伯利亞中何處にでも出来る。

○鑛業 西伯利亞は色々な鑛物に富んでゐて、到る處に産出する。金が最も重要で、其次は鐵である。石炭、銀、銅、鉛其他の各種鑛物も産する。鹽も到る處に産出する。多くは鹹湖から採る。

○牧畜 西伯利亞の産業中で一番重要なのは牧畜である。歐露では住民百人に對して馬は二十頭位の比であるが、西伯利亞では馬七十頭、牛八十頭、羊豚百五十頭といふ比である。一番多いのが緬羊で、それから牛、馬、豚、其次が山羊、鹿、駱駝、犬といふ順序である。緬羊は九百萬頭で、牛、馬も五百萬頭以上である。

○林業 西伯利亞の大森林は廣袤數千里、誠に無盡藏であるが、まだ産業と名づける程の秩序で伐採されてゐない。主なる木材は、樺、杉、松、白楊樹である。此外松の

實を産出する。これは重に食用香料として支那朝鮮方面へ盛に輸出される。



イクルーツク市

○漁業 海岸帯の住民の唯一の生業で、主なる魚類は鱒、ムクスン、スイロク、鮭、鯡等の海魚、及ステルレチ、ナリーム、シチユウカ、タイメン等の河魚である。一番多く産するのは、オビ、エニセイ兩河で、年に百六十萬布度の上つてゐる。

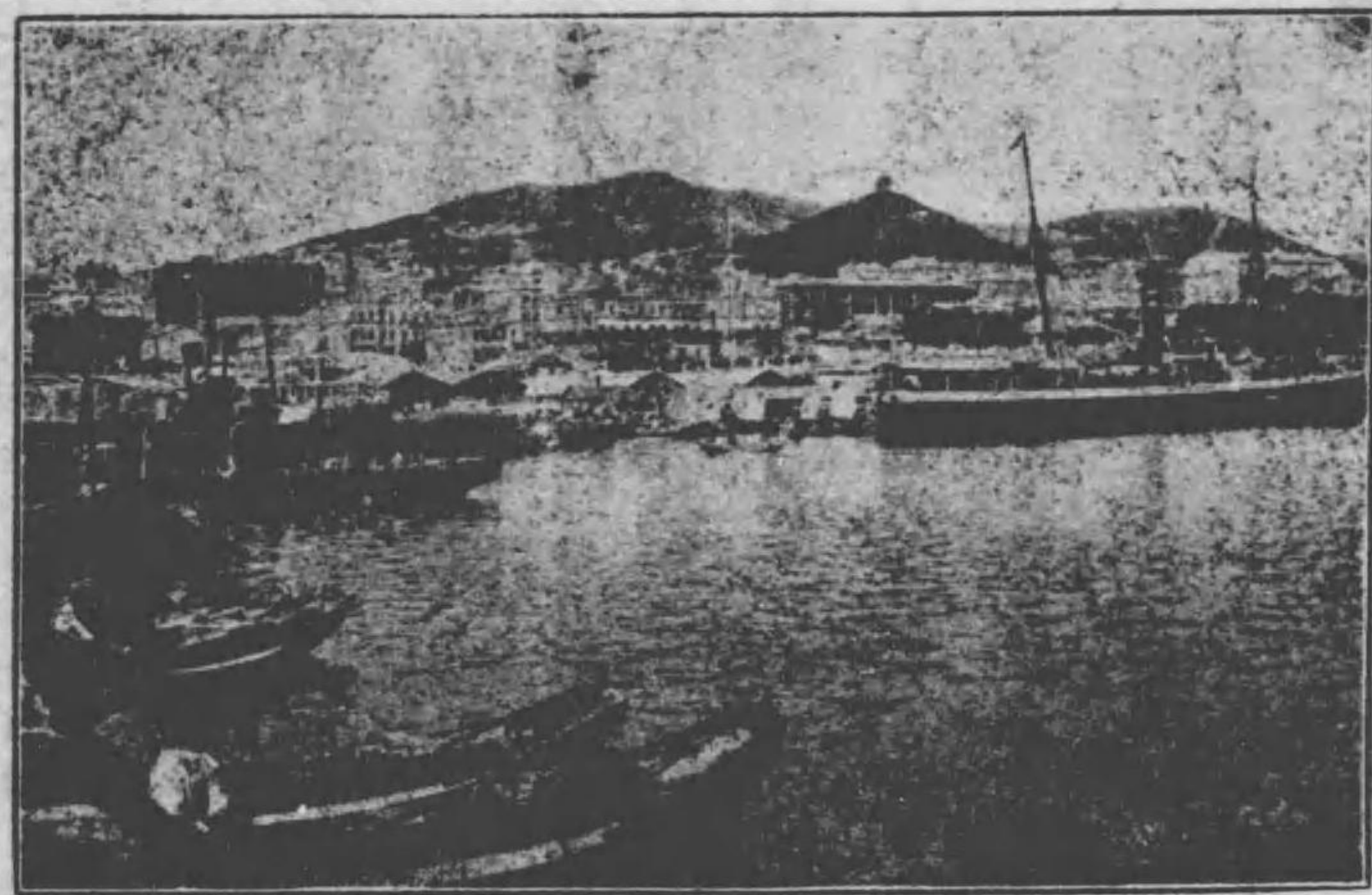
○獵業 西伯利亞は又毛皮の産地である。主なるものは栗鼠、狐、黄貂、ゴルノスタイ(鼬の一種)、黄鼬、臘肭、狼、兔、熊等で、栗鼠が一番多くて一年に五百萬枚を産する。狐以下はずつと下つて五萬枚に過ぎぬ。

日本との通商關係

- 在留邦人 約七萬と稱す。但し領事館に届た者は總計一萬一千二百人で、其中朝鮮人が三千三百三十四人居る。
- 會社商店 主なる會社商店及其支店及出張所は浦潮斯德に三井物産會社、三菱合資會社、日露商會、協信洋行があり、ハバロフスク及びアラゴエシチエンスクに協信洋行、久原鐵業事務所等があり、ニコラエウスクに島田商會がある。
- 日本との貿易 總額一億一千九百四十六萬七千六百九十四圓(大正五年)で、中日本への輸出が、百七十七萬圓、日本からの輸入が、一億一千七百六十九萬圓である。

歴史

太古西伯利亞は堅昆、高車、丁零、烏揭等の諸種族が割據してゐた。周末の頃匈奴が蒙古の地に跋扈するやうになつて、西伯利亞南部の地は其領土に歸した。堅昆の地はオビ、イルヂス兩河の流域で、高



浦潮斯德港内

イ河の流域に仙萼、元闕等の州を設けて政を布いた。所謂唐の羈糜府州とは是れである。

遼、金の時代に、西伯利亞で最も勢力のあつた種族は轄戛斯、乃蠻、克烈及蒙古等であつた。轄戛斯

車の地は今のイルクーツクの地で、烏揭の地はセレンガ河の水域であつた。後漢の時鮮卑といふ種族が東方から移つて来て、シルカ河とアルグニ河との間に據つてエニセイの流域を領し、漸次擴がつて晋の時にはバイカル湖からザイサン湖の間に蟠居した。北魏の時に蠕蠕といふ種族がエニセイ河の水源に起つた。同時に柔然も具加爾湖附近から起つた。次で突厥といふ種族が亞爾泰山に據つた。突厥族の勢は匈奴と同じやうに盛んで、屢々支那の内地を侵し、西伯利亞も突厥の有に歸した。唐は其盛時突厥等の種族を征伐する爲に、屢々大兵を出して遠征し、悉く西伯利亞南部の諸地を征服してしまつた。而して後貝加爾に幽陵都督府を、レナ、エニセイ兩河の間に龜林都督府を、ヲビ、エニセイ兩河の間に燕然都督府を置き、又セレンガ河及エニセ

はオビ、セレンガ兩河の間に據つてゐたキルギス部のこと、乃蠻は初めエニセイの水域にゐたが、次第に領地を擴げて、コソゴルの近傍からウリエングイまで領域を擴め、東は克烈部に西は黑契丹に接した。克烈部も初めはエニセイ河の水域を領してゐたが。だん／＼盛んになつて亞爾泰山に至り、後に南へ進んでトウラ河に移り、蒙古部と相接した。

蒙古は成吉思汗が興つて、乃蠻、克烈の二部を亡し、次いで西伯利亞、支那、滿洲、中央亞細亞、欽察、露西亞等の各地を征め取つた。(蒙古の部参照)

其後西伯利亞の地に封せられたものは蔑里、海都、別兒哥、脱々、土哇等で、海都及土哇は、遂に元に反いて五十餘年の間亞爾泰山南北の地に跋扈した。明の時代になつて、蒙古や韃靼の爲に西伯利亞との交通が阻まれたので、其事蹟が史上に詳でないが、察するに元の時各地に封せられた諸王の勢の衰へたのに乘じ、土人が起つて一方に割據し、各々部衆を統べたやうである。又此時代には、露西亞人がぼつ／＼烏拉爾山を越えて、西伯利亞内地へ來往するやうになつた。

一五七一年及七二年西伯利亞城(トボルスク附近)の庫程汗は使を露國莫斯科に遣つて藩臣になりたいと願つた。けれども心服した譯ではなく、貢物を納めなかつたり、露境に侵入して掠奪したりした。一五七四年庫程汗は兵を率ゐてストログノフの植民地に闖入して、カマ、チウソワヤ兩岸の部落を襲うて掠奪を擅にした。ストログノフは兵力が微弱で、到底庫程汗に敵することが出來ずに、日夜苦



エマルクの西伯利亞城攻撃

慮してゐた所が、此時ツオルガ河畔の哈萨克人にエマルクといふ者があつて、資性勇敢で膽略があつたので、衆人に推されて統領となり、隊商を襲つたり、貢物を奪つたりしてゐた。露國王大に怒つて兵を派遣して、エマルクを始め哈萨克の統領を捕縛して、莫斯科に引致しやうとした。エマルクは坐して露兵の捕縛を待つよりか進んで韃靼人を討つて自己の生命を全うし、且つは聊かなりとも國家に盡さうと決心して、ストログノフの處に到つて保護を願つた。ストログノフは大に悦んで、直に兵器糧食を與へて西伯利亞府の攻撃を援助させた。

そこでエマルクは一五七八年以來、奮闘力戦してトイムチ、カラヂノ、アチクの諸城を陥れ、一五八一年には西伯利亞城を占領し、翌年にはトボルスク全省を攻略し、薩馬羅汗の居城を屠つた。そこでエマルクは西伯利亞を露國王に献上して、前年の罪の赦免を願つた。王は大に悦び直に其罪を許して、エマルクを西伯利亞公に封じた。爾來二百年間露國は次第に西伯

利亞を侵略し、遂に全土を征服してしまつた。其間清國との衝突があつて、始は清の方が勝利を得て、ネルチンスクの條約で黒龍江以南の地を清國の有に歸したが、後、受璋條約で露國が大利を得て、沿海州全部と黒龍江以北を擧げて露の有に歸した。

政治上の地位

西伯利亞は我隣國である。我本州は一帯帯水を隔て、西伯利亞と相對し、呼ばば將に應へんとしてゐる。我領土朝鮮は、僅に豆滿江を以て彼と接壤してゐる。我滿洲は露國の勢力圏であつた黒龍江及北吉林を仲人として彼と手を握らんとしてゐる。我國と西伯利亞とはこんなに密邇してゐる。又我國人の西伯利亞に居住してゐるものは約七萬(朝鮮人を合して)を算し、西伯利亞總人口の約一分二厘に當り、我貨物の西伯利亞に入るものは年額一億一千七百萬圓で、總貿易額十六億圓の約七分三厘を示してゐる。此の如く我國は西伯利亞と密接の關係を有してゐる。且つ歐羅巴と東洋との陸上交通は、今の所西伯利亞を通過しない譯には行かぬ。故に西伯利亞の政治上の變動は、常に我國に大影響を及ぼすばかりではない、東洋全般に至大の影響を及ぼすものである。だから我國は西伯利亞の形勢に就て深く注意を拂はなくてはならぬ。

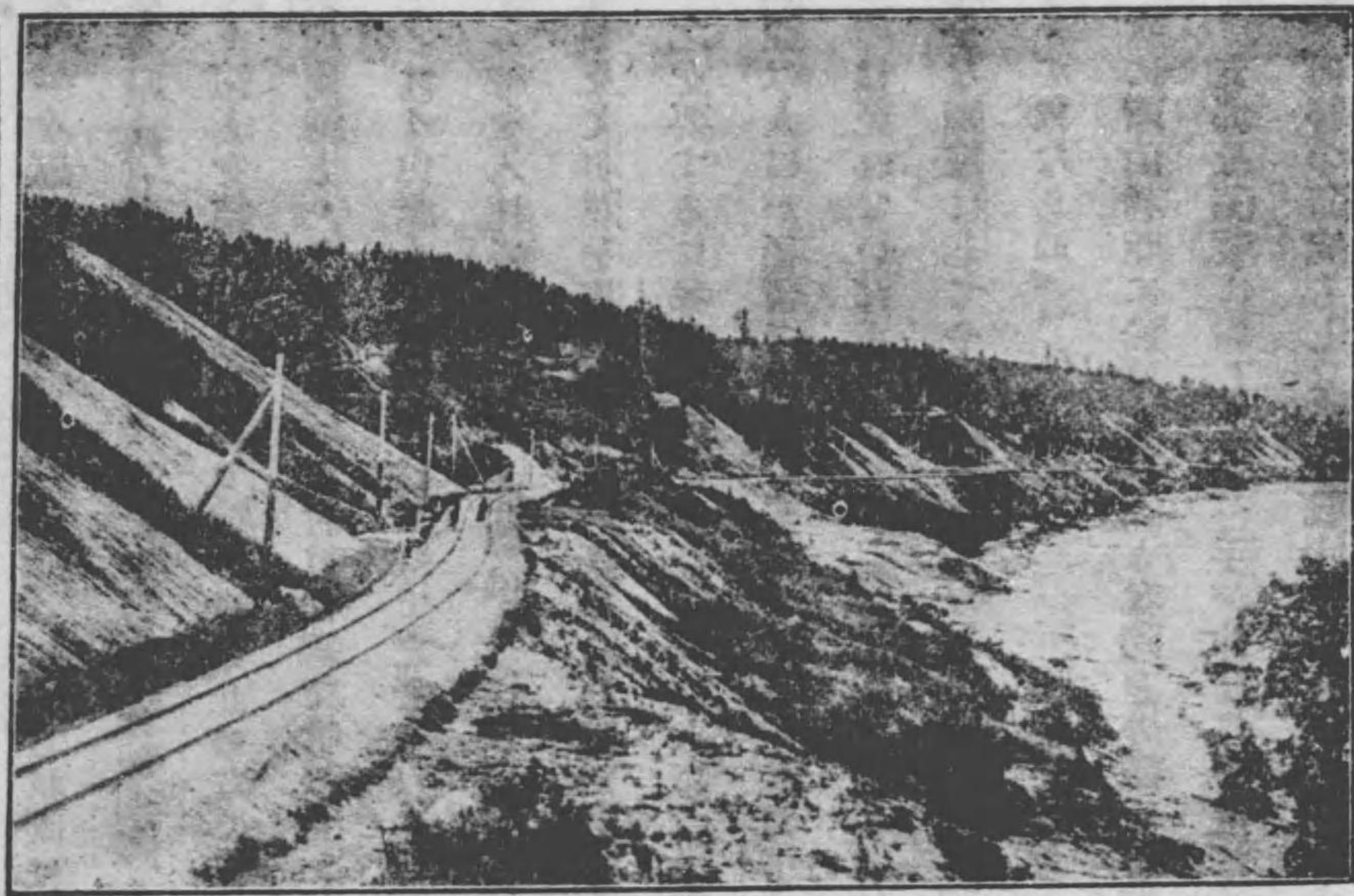
露國革命の大波瀾は、西伯利亞にも波動を及ぼした。西伯利亞の各都市は、紛擾に紛擾を極めた。此亂



露國廢帝ニコラ二世

麻は西伯利亞以外の哈爾濱にまでも波及して、平生他國の兵員の保護で、漸く秩序を保つた支那の兵隊を頼んで秩序を保たなければならぬやうな破目になつた。トムスクで西伯利亞獨立の會議を開いたが、中々纏りがつかない。何しろ本國が混沌たるものであるから、西伯利亞の運命は今少し本國の狀況が定まつてからでなくては見當がつかない。

い。但し本國がいくつにも分裂して各獨立國となつたら、西伯利亞も獨立するだらう。然し西伯利亞の人口六百萬中大半はスラヴ族で、他は蒙古族、通古斯族、土耳其格族等の半開又は野蠻族で、言語風俗等互に異なつてゐるから、政治上の結合はスラヴ族を除く外問題にならない、さうしてスラヴ族は、多くは流刑人又は其子孫だから、政治的團結をするは甚だ覺束ない。然し彼等が政治的に團結し得るとすれば一番人口の多いトボルスクとトムスクとが中心となるだらう。西伯利亞の人口は統計が不完全の爲め、實際の數は頓と分らないが、六百萬と押へてある。其内トボルスクが二百萬、トムスクが二

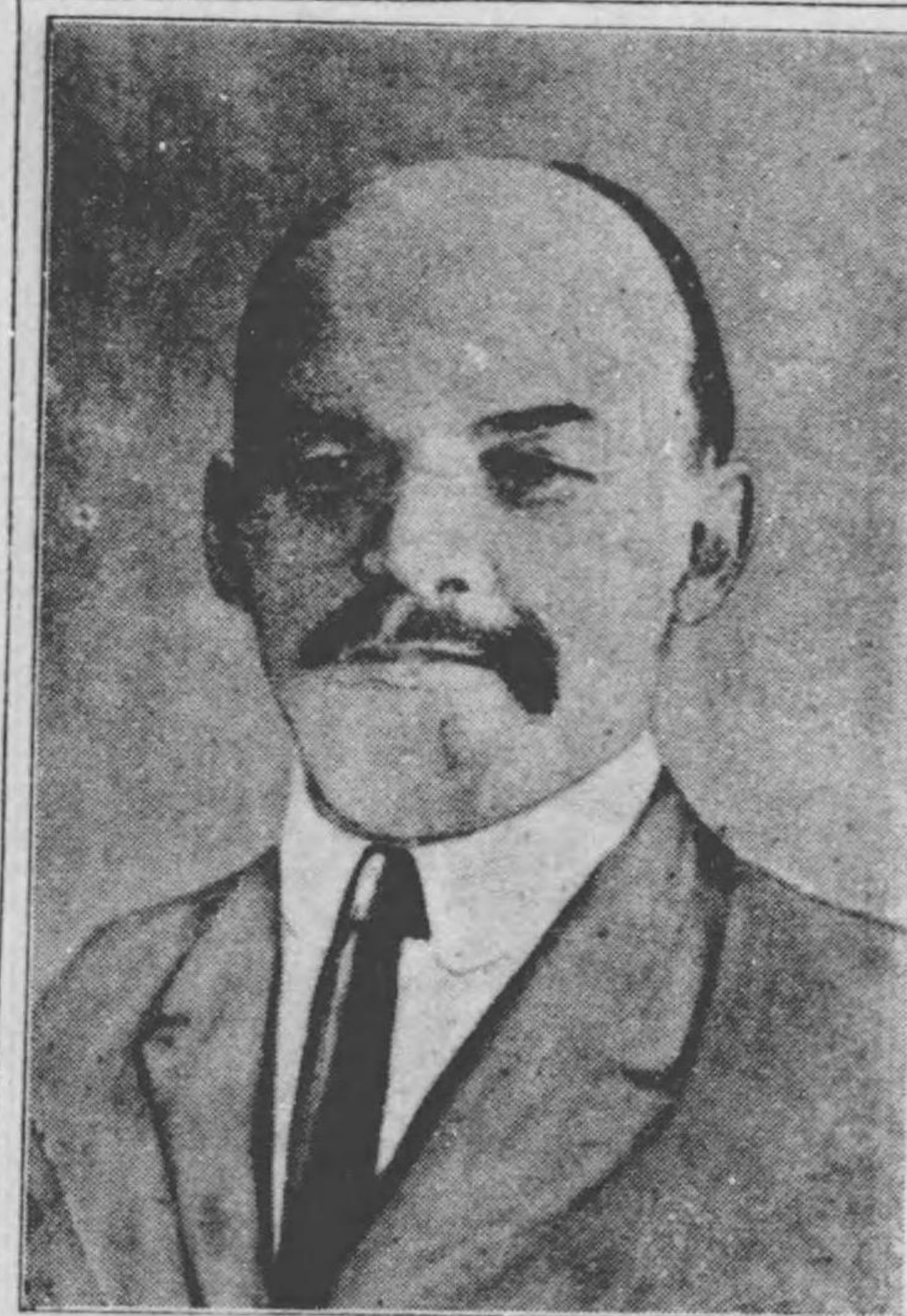


路 鐵 の 畔 湖 爾 加 貝

點 地 の 半 里 七 り よ 驛 ヤ ー ツ ミ

地歩も根柢的に顛覆されるだらう。我唇齒の同盟の支那も甚だ危険となるだらう。朝鮮も危急を告げるだらう。我國の存立も不安になるだらう。

露國の國情は西伯利亞の運命に關する。さうして西伯利亞の運命は、直に我國の利益に影響を及ぼす。若し獨逸の勢力が露國を傳つて西伯利亞を席卷したら、我國は第二の日露戦争を繰返さなくてはならぬ。我國は如何なる犠牲を拂つても、滿蒙の我勢力圏を保持しなくてはならぬ。我國は管に此勢力圏を保持するばかりではない、支那國境全部を防禦しなければならぬのだから、チユートニツクの大勢力が東部西伯利亞に氾濫して來て、支那及滿蒙の國境を脅



氏 ン ー レ 長 員 委 會 兵 勞 國 露

風の前草の如く屈服するであらう。さうすると露國が今迄通りの形を保つてゐても、或は又各個に獨立しても、何れにしてもチユートニツク勢力の爲に左右せらるゝことは免れない。さうなると獨逸はスラヴ族を先導として、怒濤の如く日本海の沿岸に打寄するだらう。我西伯利亞に於ける利益は木葉微塵に碎かれるだらう。我滿洲に於ける

百五十萬で、總人口の大部分を占めてゐるから、どうしても此兩省が權勢を取るやうになる。然し其結合は甚だ薄弱であるに相違ない。

露本國今日の狀態を観ると、統一は難かからう。然し彼等が獨逸の力を假りて統一しやうとしたら、多分統一することが出来るだらう。其時は西伯利亞も今迄の通り露領となつてゐるだらう。但し其の脈管には總て獨逸の血が流れることになる。其から獨立するとしても、各獨立國の力が微弱だから、滔天の勢で流れて來るチユートニツクの大勢力に對しては、到底抵抗することは出来ない。暴

かすのを黙過する譯には行かぬ。だから我國はチュートニツクの大海嘯を烏拉爾山で喰止めなくてはならぬ。然し其は至難であるから最前進防禦線として置いて、我は我が第一防禦線として亞爾泰山とエニセイ河とを結び付けた線で彼を喰ひ止めなくてはならぬ。其れも出来ないなら、第二の防禦線として貝加爾湖とレナ河とを結び付けた線で喰ひ止めなくてはならぬ。其も不可能であつたら興安嶺とヤブロノオイ山脈とを結び付けた線で之を喰ひ止めなくてはならぬ。如何なることあるも、此線以内には一歩も彼を入れてはならぬ。此線は實に西伯利亞に於ける我最後の防禦線である。我は貝加爾以西の我利益圏及文明圏を防禦しなければならぬが、已むを得ざる場合には此防禦線で喰止めなくてはならぬ。之を要するに我輩は西伯利亞が獨立して、立派な文明國となるのを衷心から切望するけれども、西伯利亞は人口が稀薄で未開野蠻人の種族が甚だ多く、到底獨立の實力がないから、獨逸の勢力に併呑されるのは免れないだらう。だから我は出來得べくんば將に獨立すべき運命を有する西伯利亞人を扶けて、健全な國家にしてやらなければならぬ。其が不可能なら、我は兵力を以て我文明圏乃至利益圏を守らなくてはならぬ。

次に西伯利亞に於ける米國と我國との關係を觀るに、我國は露國に遠慮し、英米に氣兼し、戦々兢兢、支那及滿蒙に對してさへ手が伸びない位だから、西伯利亞に對しては指の先程の計畫も立てなければ、何等の研究もしない。我國人で西伯利亞の山林、鑛山、漁業、牧畜及其他の産業に就て多少なりと

も研究してゐるものは、寔に曉天の星よりも少ない。然るに米國は露國全盛の時から支那及滿蒙に經濟的發展をした餘勢を驅つて、續々西伯利亞に侵入し、カムチャツカや、ヤクトースクに沙金の採掘權を得て盛に大利を擧げてゐる。特に現戰爭中ルートは特派大使として露都に行つて、諸種の利權を得たさうだ。例へばカムチャツカ鐵道や、其他露國の計畫した鐵道を露國に代つて敷設する權や、既設鐵道の監督權や、沿岸及河川の航行權や、漁業權や、山林伐採權などを得たといふ噂である。

さうして米國は此の如き莫大の利權を得たから、此利權獲得の條約を批准させるが爲に、列強の大使が皆露都を引揚げたに拘らず、其大使は依然として露都に止まつて、過激派の政府でも、溫和派の政府でも、何の政府でも構はない、之に批准をさせやうとしてゐるさうだ。彼は之が爲に世界の輿論が囂々として日本の西伯利亞出兵を呼號してゐる際に、獨り極力日本出兵に反對してゐる。彼は日本が西伯利亞に出兵して、鐵道沿線を警備したら、自國の獲得した利權が全然水泡に歸するだらうといふことを恐れてゐる、故に彼は若し日本が出兵するならば、西伯利亞の動亂鎮靜後何等の利得を取ることなく、無條件で柔順に撤兵するといふ條件を必ず附けなくてはならぬと呼號してゐる。我國は米國の番人ではないから、何等の利益もなく、單に椽の下の力持で、米國の利權を防護する必要はない。我國は我隣邦露西亞の崩壊を防ぎ、西伯利亞に於ける我國及列強の利益を保護し、以て東洋の平和を維持するが爲にのみ出兵する必要があるのである。故に若し此の如き時運に際會したら、米國が幾億萬言

の抗議や咆哮を重ねても我は斷乎として出兵する。要するに我は我が王道を行ふに必要な時に於てのみ出兵するのである。

風俗

服装

○スラブ族 此種族に就ては、特記することが無い。然し歐羅巴人と異つてゐるのは、小露西亞人の貧乏人が、『ポステリ』と稱する粗末な靴を穿いてゐる位である。

○芬族 芬族は皆腕と脚に刺文をして、身體には毛皮を纏ひ、毛の帽子を被つてゐる。ウオグル人の獵夫の中には、獸の耳で帽子を飾つて居る者がある。但しサモエド人の中には、毛皮の代りに羅紗を用ふるのもある。

○蒙古族 蠻子に就ては云ふことが無い。然し獸か魚の皮で造へた蠻子の靴は、狭長い珍しい形をしてゐて、冬になると鳥喇草の乾いたのを入れて暖くする。ブリヤート人の髪は男女とも辮髪で、女は更に數條の辮髪を胸に垂れて、耳環は用ひないで、金石で飾つた冠を糸で頭髮に結んでゐる。夏は絹か木綿の掛衣を着て、冬は毛衣を着る。男の帽子は圓錐形をしてゐる。カラムイク人の女は大概鐵漿で齒を染める。コリヤク人の男は薙髪だが、女は辮髪で、夏は鹿皮の衣服を着、冬は毛皮を着けて



犬 橇

毛皮の頭巾を被る。祭日の時の女の着物は、獺か黃鼠の皮で縁飾を縫つて、玻璃の小珠を附ける。チウクチャ人の髪はブリヤート人に似てゐるが、男女共に耳環をさげ、顔と身體とに刺文をしてゐる。着物は馴鹿の皮でこしらへ、織毛皮で裝飾がしてゐる。縫韃人は蒙古人と同様である。ヤクト人の男の着物は毛皮製で、長さは膝まであるが、馬に乗るのに便利な爲め、後ろが割れてゐて、冬は毛皮を重ねて着る。表が羅紗で、縁が毛皮の帽子を被つて、栗鼠皮の襟巻をして、毛皮の手袋を締め、足は兎の皮で包んで、其上を鹿の皮か馬の皮で包んでゐる。女の着物と男の着物とは同じであるが、女の方が少し長くて、又耳環や首環をかけてゐる。

○通古斯族 通古斯人は髪を長くして之を髻ねてゐる。貴人は顔と腮とに刺文をする。ヲロチヨン人の髪は長くて肩に垂れるか、又は支那人のやうに辮髪にしてゐる。革製の袴の上に木綿製の長い上衣を着て、其上に毛皮か又は木綿製の短衣を着てゐる。

る。靴は長靴であるが、中には馴鹿の皮の脚絆を巻いてゐるものもある。馬の皮か又は他の獣皮の帯を締めて、其れに烟管、燧石、耳爬、小刀等をくつ付けてゐる。マネグル人も之と同様の服装である。ゴリド人は辮髪の工合も、着物も、満洲人と大差ないが、但玩弄物の嗜好が甚くて、男子でも銅製の耳環をつけて、それに綺麗な寶石を鑲めてゐる。其他のものはゴリト人に似た所が多い。

○土耳其族 テレウト人の男子は辮髪で、少女は之を後に垂れ、成人した女は二つに分けて眞珠で飾つてゐる。男の衣服は襖子で、帯に煙草道具や小刀等を挿す所はゴルト人に似てゐる。女は毛布の袴を穿いて、紅の帯を結んで、長い着物を着てゐる。キルギス人の男は髪を剃つていつも半圓形の頭巾を被つてゐる。夏は其上に粗らい先の尖つた帽子を被り、冬は毛を裏とした羊皮の帽子を被る。着物は窄り袖の長いもので、羊毛、駱駝毛、綿布で造り、袴は革の帯か織物で締めてゐる。

○猶太族 此族で特記すべきは、一の天然物と他の天然物とを決して混交しないことで、着物なんかも麻と獣皮とを一處にして造へない。必ず同一種の物ばかりを用ひる。

住居

○スラヴ族及芬族 スラヴと芬とは露西亞人と大同小異であるから、茲には略して述べない。

○蒙古族 蠻子の家屋は、屋根を藁で葺き、其傾斜が急である。壁の厚さは二三寸で、二三の窟を開けて戸口を造らへ、室内は土間で天井がなく、粘土で高さ三尺餘りの床を設けて、其上に蘆で編ん

だ蓆を敷く。

○通古斯族 ヲロチヨン人の家は圓錐形の天幕である。上部は馴鹿の皮で張り、周圍は樺の皮で張つて、内に毛皮を敷いてある。

○土耳其族 キルギス人の家も天幕である。幕内の地上には、厚い毛氈を敷く。金持は尙其上に斑紋のある毛織物を敷いて飾つてゐる。一つの隅に木製の旅行箱を据ゑて、其上に寢具を置いて、中央には圓い孔を掘つて煮焚きの場所としてゐる。

飲食

○スラヴ族 露西亞と同じだから略す。

○芬族 ウオグル人は主に野獸の肉を食物として、調理に食鹽を用ひない。オースチア人の食物は肉類及植物で、一番好きなのは狐狸の肉で先づ腹から食べ始める。又煙草や火酒が嗜きで、泥酔者が多い。サモエド人は鳥獸や魚の生肉を食して、穀類を食べる者は至つて少ない。ソイヲト人の食物は、肉類、羊、牛乳、乾酪、酥酪等だが、羊乳と酥酪とが一番好きだ。烏梁海人も同様である。

○蒙古族 蠻子及韃靼人は略す。ブリヤト人並にカルムイク人は共に獸肉穀類を食物とし、カルムイク人は特に酒が好きだ。コリヤク人は鹿肉及魚類を食物とし、又種々の草根殊に百合の根を好む。カムチャツカ人は主として獸肉、魚肉を食べる。チュクチア人は馴鹿の肉と乳汁とを常食としてゐ

る。ヤクト人の食物は肉類で、馬肉が一番好きだ。肉が缺乏すると、松樹の皮から一種の食物を製へて食べる。飲料では酥酪が最上である。其外酒も烟草も好きである。

○通古斯族 トングス 通古斯人は野獸の肉を唯一の食物としてゐる。其他の族は獸肉の外に魚肉を食べる。又一般に烟草が好きだ。

○土耳其族 トルコ テレウト人の食物は獸肉と魚肉である。キルギス人は獸肉と殺物とを食べる。肉類では羊肉が一番好きだ。飲料は馬乳と駱駝乳で、又磚茶を砕いて馬乳を雜せて、黍と肉とを少々入れて煮たものを飲む。

婚姻

○芬族 フィン ウオグル人は露西亞政府の命令で希臘教を奉じ、従つて婚姻の儀式も之に従つてゐるが、それは外面の事で、實際は相變らず未開なものである。一番甚どいのは獵夫社會で、彼等は資産に應じて一婦なり數婦なりを娶るが、少し不和になると、皆離婚して又元の一人者となつて暮らすのである。オースチア人の結婚は宗教の儀式に依らない。男が或る女を嫁にしたいと思つたら、女の兩親の處へ行つて金を出して買つて來るのである。嫁は家にゐて、よく夫に服従してよく働く。

○蒙古族 モンゴル コリヤク人の女は、嫁入りをすると顔に文身をする。又男は一夫で數妻を娶つてもよいことになつてゐるが、實際に多妻の者はないやうである。チウクチア人も亦一夫多妻で、馴鹿の皮を



チウクチア人の夫婦

澤山持つてゐる者は、之で女を買ふのである。妻は夫が死ぬと夫の兄弟の妻となる。

○通古斯族 トングス 通古斯人の中には、希臘教に歸化した者が少くないが、今尙一夫多妻が許されてゐるので、婚禮の時にも教會の御世話にはならない。ヲロチオン人もマネクル人も一夫一妻である。女は年頃になつて始めて嫁入をする。さうして男が嫁を買ふのは生涯の伴侶を得るといふよりか、寧ろ忠實な下婢を求める積りなので、従つて嫁は主婦の待遇を受けないで、全く下女扱ひにされる。それで男が嫁を買ふ時は、女を買ひ取る意味で女の生家へ相當の贈物をする。

○土耳其族 トルコ 此族の大部分は回教徒であるから、従つて回教の儀式に依つて結婚する。

○誕生 ナツメ 誕生に就ては多く語るものはないが、蒙古族のヤクト人は聊か特色を示してゐる。彼等は子供が生れると、氷雪や寒水で洗ふ。ヤクト人の寒氣に強いのは無理のない譯だ。

宗 教

西伯利亞の宗教には希臘教、猶太教、喇嘛教、回教、薩滿教等がある。

此内薩滿が一番多くて、其次が喇嘛教で、其次が希臘教である。希臘教の分離した一派に、莫魯干といふのがあつて、黒龍江地方に行はれてゐる。此派は洗禮を行はない。又豚肉や烟草や酒類を嚴禁することは回教のやうである。

此教徒はよく業務に勵み、節儉で、金持が多く、益々増加する傾向がある。

○スラヴ族 總て希臘教である。

○芬族 ウォグル人は露國政府の命令で、表面希臘教を奉じてゐるが内實は區々である。異形な四足獸を祭るものもあれば、頭に大きな帽子を戴く偶像を拜するものもある。一番普通なのは「ケルプウイエイユスル」といふ大偶像を祭るので、神殿は谷間や林の中や沼澤の傍にある。婦人は神殿の近傍を通る時は、樹梢を見てはならない。それは梢に神靈が宿つてゐるから、之を見ると死ぬといはれてゐるからだ。祭禮の夜男子は偶像の周りに集つて火を焚き、焰が消えて暗くなると、其内の一人が刀を揮つて、豫め樹に繋いであつた馬を斬つて一同で其血を啜る。又一般に太陽を拜む。オースチア人は薩滿教である。數百の木柱に色んな形像を刻んで神としてある。其外に大神といふのがあつて、

此神様は日光を脊負つて、聲は風雷のやうだといつてゐる。サモエド人や、ソイヲト人は薩滿教を奉じ、烏梁海人は喇嘛教を信じてゐる。

○蒙古人 ブリヤート人の宗教は佛教で、僧侶は喇嘛と稱してゐるが、近頃は大部分希臘教の信者が出來た。カルムイク人は喇嘛教を奉じて、人體の兩腕を伸した偶像を尊信してゐる。コリヤク人の宗教は薩滿教であるが、狼を惡神の從僕として尊信してゐる。カムチャツカ人には殆んど宗教といふものが無い。チウクチア人、ヤクト人は薩滿教であるが、希臘教に歸化した者も少なくない。

○通古斯族 通古斯人、ヲロチヨン人、マネクル人は薩滿教であるが、希臘教信者も少ない。ゴリド人も薩滿教である。然し中には佛教を信する者もある。ギリヤク人、キレン人は熊の頭骨を神として祭り、マンゲン人は薩滿と喇嘛とを奉じ、ダウル人、ソロン人は主に佛教である。

○土耳其格族 テレウト人は薩滿教で、偶像を尊んでゐる。キルギス人は回教であるが、薩滿教の儀式を混用してゐる。

葬 式

○芬族 ウォグル人の葬式には一定の式はない。死んだ處に穴を掘つて死骸を埋め、生前携帶した兵器や烟草等を墓中に藏める。

○蒙古族 カルムイク人は死者を埋葬しないで、少し居所を離れた處の沙上に死骸を投棄して、犬

狗に食はせる。コリヤク人は死骸を火葬し、白布の喪服を着る。

○通古斯族 トングス 通古斯人は、人が死ぬると直ぐに深い穴を掘つて、遺物と併せて埋葬する。チロチヨンの人の葬禮は棺を樹の上につるして置く。ギリヤク人やキレ人は屍體を火葬にしたり、又は棺に入れて樹の枝に繋いだり、或は水中に葬る。

○土耳其族 主に回教の儀式で葬る。

四 露領中央亞細亞

位置、面積、人口

露領中央亞細亞といふのは大略北緯三十七度から五十五度、東經六十度から八十度の間に在る廣大な土地の總稱で、北は西伯利亞、東は新疆、南は亞富汗斯坦及波斯に境し、西は裏海に臨む。面積一、四七三、八三二方哩、人口一二、九九九、五〇〇を算してゐる。

而して一方哩に對する人口は八、一の割合で、男百人に對し女は八十七人の割である。此内に基華と布哈拉の二屬國を含んでゐる。

基華 北はアラル海に臨み、東は阿姆海を限り、南西は後裏海州に接してゐる。面積二四、〇〇〇方哩、人口六四六、〇〇〇都會では基華(五萬)と新玉龍(三萬)とが主なるもので、其他ハザール、アスブ及クンケラードなどがある。産物は綿と絹とである。

布哈拉 北はフェルガナ州に境し、南は亞富汗に接し、南西は基華及後裏海州に接す。面積八三、〇〇〇方哩、人口一、二五〇、〇〇〇。重なる都會は布哈拉(八萬)とカルン(三萬)とで、外にチャルジュイ、カラクール、ケルミネ等がある。産物は穀物、果物、絹、煙草、綿、苧、山羊、羊、馬、駱駝、金、鹽、明礬、硫黃等である。

政治上の區分

露領中央亞細亞は高原州と、土耳其斯坦と、後裏海州とに分けてある。高原州はシルダリヤ河と吹河とバルカシユ湖とを連ねた線以北の西伯利亞に至るまでの土地で、アクモリンスク、セミバラチンスク、ツルガイ、ウラルスクの四省に分けてある。面積が七一〇、九〇五方哩で、人口三、九五六、〇〇〇である。土耳其斯坦州は吹河以南阿母河に至る土地で、フェルガナ、サマルカンド、シルダリア、セミレチエンスクの四省に分けてある。此省の面積は四二〇、八〇七方哩で、人口が六、六一三、〇〇〇である。後裏海州は裏海とアラル海の間から南方波斯の國境に至る土地で、面積二三五、一二〇方哩、人口五三三、九〇〇である。面積と人口の關係は、一方哩に就き高原州が五、六、土耳其斯坦が八、八、後裏海州が二、八、の割合である。

都會

都會の重なるものは塔什干(人口二十七萬)、浩罕(十二萬)、撒馬兒罕(九萬五千)、アンヂヤン(八萬二千)、ナマガン(八萬)、マルゲラン(四萬九千)、オツシ(四萬八千)、ウラルスク(四萬六千)、ベトロバウロウスク(四萬二千)、ホツジエント(四萬)、セミバラチンスク(三萬四千)等である。メルグは人口は少ないが要衝の地である。

人種

此廣大な地域に住んでゐる人種は多種多様で、アールヤ種が一百十萬、セム種が八千、ウラル、アルタイ種が七百萬、其他ジョールジア種と高加索種と、日本支那朝鮮種とが僅ながら住んでゐる。アールヤ種中の重なるものは、スラヴ族の七十萬と、伊蘭族の三十六萬とで、羅旬族や、リットワ族や、獨逸族や、アルメニヤ族も少しづつ住んでゐる。セム種ハ無論猶太人で、ウラル、アルタイ種の主なものは土耳其格、韃靼族の七百萬で、蒙古族や、芬族や、サモエド族も多少住んでゐる。

宗教

土耳其族は殆ど全部回教徒で、伊蘭族も亦回教徒である。佛教や基督教もゐるが、回教とは比べものにならない。回教のことは土耳其及亞拉比亞で詳説する。

産物

露領中央亞細亞の耕地は小麦、裸麥、燕麥、大麥、雜穀、馬鈴薯、棉花、煙草及乾草を出し、其牧野は馬、牛、水牛、羊、山羊及豚を産す。森林はウラル、亞爾泰、葱嶺の山脈帯に繁茂して、數多の良材を出す。礦山からは金、銀、銅、鐵、鉛、亞鉛、石炭、石油、岩鹽等を出す。

日本との關係

露領中央亞細亞は政治上からいつても、軍事上からいつても、我國との關係は甚だ重大な意義を有してゐるに拘らず、今日まで我國は之と何等國際關係も結ぶことが出来なく、又通商も行はれなかつたのは残念である。

歴史

編者が亞細亞時論第一卷第五號「中央亞細亞廻り」で論じた如く、中央亞細亞は地球の頭である。最も早く文明に赴き、最も早く多くの有力な國家が興つた。有史以前は分らぬが、歴史に載つてゐる強國も随分古くから澤山ある。支那の歴史で一番古いのは犬戎といふ種族が周を苦めたことで、此族は今露領中央亞細亞から新疆に蟠居して居た強大な種族であつたらしい。次に出たのが匈奴で、之は

蒙古が根據地であるが、後には新疆から西伯利亞や土耳其斯坦を悉く征服して、歐羅巴まで威力を振つた。匈奴の強大となつた頃、今の露領土耳其斯坦には烏孫、大宛、康居、大夏、大月氏などの強國があつた。康居は今のウルガイとアクモリンスク邊で、烏孫は伊犁、烏梁海、セミバラチンスク邊で、大宛はセミレチンスク、シルダリヤ邊で、大夏はフェルガナ、バタクシヤン、阿母河沿岸の地だらう。大月氏は今の亞富汗斯坦、ペルーチスタンからカシミール、バミール、基華、布哈拉の二汗國を包有したのだらう。其から少し前に、歴山大王の帝國は、シルダリヤ河の左岸に達してゐた。漢の博望侯張騫が大月氏に使した頃は所謂西域三十六國で、此露領土耳其斯坦も文物制度燦然たるものであつたやうだ。漢も此等の強國と親交を結び、平和を保持する爲め、皇族の女を以て婚を通じた。

吾家我を天の一方に嫁し、

遠く異國の烏孫王に託す。

穹廬を室となし旃を牀となす。

肉を食となし酪を漿となす。

居常土思して心内に傷む。

願くは黄鵠となりて故郷に歸らん。

此歌は漢の武帝の時に、烏孫國王に嫁した漢の皇族の女が、異域にあるを悲みて詠じたものであ



帖木兒

る。此より後露領中亞に雄視したものは突厥である。突厥が東西の二部に分れた以後、西突厥の都はミンガラクで、今のアレキサンドロウスキ山脈の北麓である。ミンガラクといふのは土耳其格曼語で、千の泉の義である。唐の玄奘三藏が印度に赴いた時、此地に至つて突厥王肆葉護汗に謁見した。彼は其著西域記に此國を千泉國と記してゐる。

一一〇〇年頃、轉憂斯といふ強國が今の高原州に現はれた。之は現今のキルギス族である。次に南方から亞拉比亞の回教徒が侵入して來て、今のフェルガナ、サマルカンド、阿母河一帶の地を收めた。

之を大食國といつた。次に西突厥の餘衆で阿母河の流域に住んでゐた者が勢を得てセルジュイク家を起した。其から亞富汗から印度へかけて、ゴール家や、ガスニ家が起つた。

一一二五年金が遼を滅した時、遼の皇族耶律大石は餘衆を率ゐて中央亞細亞に遁れ、セルジュイク家の軍を破つて、今の高原州、土耳其斯坦及基華、布哈拉の地に西遼國を建てた。間もなく裏海と亞拉爾海の花刺子

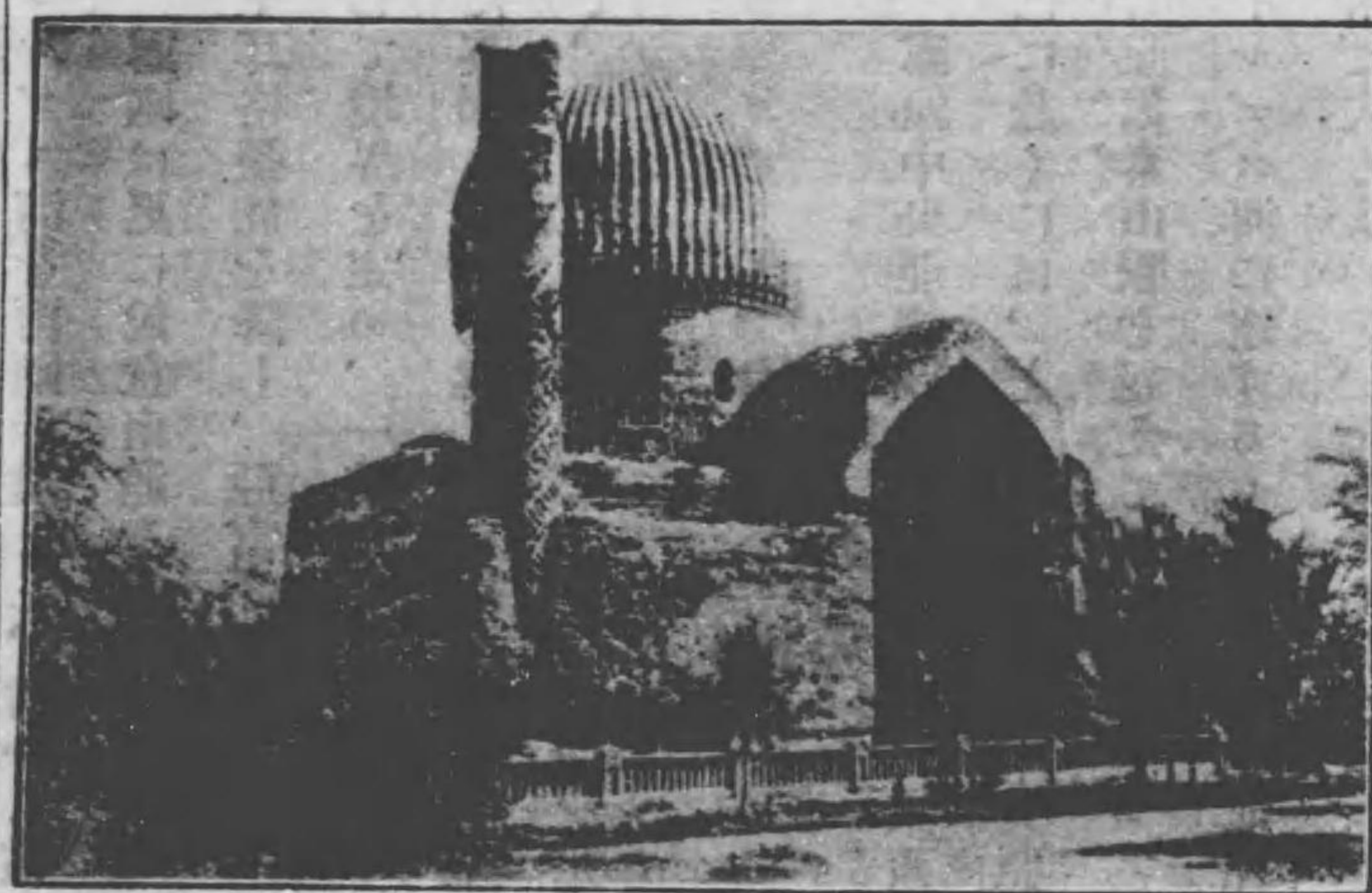


帖木兒宮殿の内衛兵

に封じ、三子窩淵台を蒙古、烏梁海及エニセー河流域の地に封じ、阿母河以南は第四子拖雷の三子旭烈兀を封じた。金鞞齋朶(欽察汗國)、察合臺汗國、窩淵臺汗國及伊兒汗國は是である。

元が東方で滅亡した間に、察合臺汗國も衰微して、東西の二部に分れ、東察合臺汗國は喀什噶爾に都し、西察合臺汗國は撒馬兒罕に都して、相攻争したが、此時成吉思汗の疎族の帖木兒が碣石から起つて、西察合臺汗國を併呑し、都を撒馬兒罕に定め、尋で東察合臺汗國を降した。後帖木兒は伊兒汗國の内訌に乗じ之を滅し、金鞞齋朶(欽察汗國)を討つて之を降し、鋒を轉じて印度を侵略し、更に小亞

模高原に住んでゐた突厥族が崛起して花刺子模王國を建て、今の露領中央亞細亞全部と、波斯、亞富汗及ベルーチスタンとを掩有した。蒙古に成吉思汗が起つて、白旄の大纛を敖漱河畔に建て全世界に王たらんことを誓ふや、花刺子模は先づ第一に蒙古の兵を被て滅亡した。成吉思汗は其長子求赤を今のツルガイから遙か西に亘る地に封じ、次子察合臺を阿母河以北、シル河以南の地



帖木兒墓のドンカルマサ

亞には基華、布哈拉、浩罕の三汗國が鼎立した。

此時露國は既に西伯利亞を占領したので、著々南下の謀を廻らし、三汗國の互に攻争してゐるのに乘

細亞に侵入し、歐亞に横視せる一世の豪傑土耳其格帝バジアジツドとアンコナに戦つて之を破り、バジアジツドを生擒し、殆ど亞細亞の大半を平定した。そこで愈明を滅ぼして世界を統一しやうとして、東征の軍を起したが、ヤートラルで熱病に罹つて殞落した。當時明は太宗の世で、帖木兒の來侵を聞き、西邊の防備を修めたが、帖木兒が死んだので幸に其侵略を免れた。帖木兒が死んでから其大帝國は四分五裂して、中央亞細亞は紛擾の巷となつたので、欽察汗の疎族のウズベク人が南下して、基華、布哈拉の二汗國を建てた。帖木兒の孫バベルは頻りに恢復を圖つたが、失敗したので印度へ行つて臥莫兒帝國を建てた。時に東察合臺汗の後裔が浩罕に據つて汗國を建てたので、中央亞細

じ、先づ(一八八六)布哈拉汗を降し、次に(一八八七)基華を征服し、更に(一八八七)浩罕汗國を滅した。會ま支那に回教の亂があつたので、露國は之に乗じて伊犁を占領したが、後清國と折衝して伊犁條約を結び、コルゴス河を兩國の境とし、清から償金九百萬ルーブルを支辨して局を結んだ。

露國は更に銳意南進を圖り、名將スコベレフ及コフマン等はテンギル・テツペやメルグを占領して土耳其曼族を降し、亞富汗に入つてヘラートに迫つた。そこで英露二國は葛藤を生じ、互に委員を出して境界を定め、一時局を結んだが、露國は後バミール高原を侵略して印度に迫らうとしたので、復た英國と紛争を起したが、此處も復境界を議定して局を結んだ。一九〇七年露國は英國と協約を結んで、中央亞細亞と亞富汗との關係を定め、爾來中央亞細亞は平穩に現時に至つた。

政治上の地位

露領中央亞細亞は歐亞の中心、東西交通の要衝である。東方亞細亞から西方及南方亞細亞乃至歐羅巴に赴くには、どうしても露領中央亞細亞を通らない譯にはいかぬ。東方からの道は蒙古の科布多から亞爾泰山脈を越えてセミバラチンスクに至るものと、烏倫古海の南岸巴夏爾爾から月倫山を越えて、イルチヌ河に達するものと、天山北路の烏魯木齊から塔爾巴哈台に出で、ウルジヤルスカを経て、高原州に入るものと、精河からレブシンスクを経てセミレチエンスク省に入るものと、伊犁城から伊犁河

に沿うてイリトスクに達するものと、伊犁城から南折してカブカツク越を越え、イシクトル湖畔に沿ひ、トクマクに達するものと、天山南路の阿克蘇から廓克沙里峠を越え、ナリシ河に沿うて塔什干に通ずるものと、喀什噶爾からテレク越を越えてアンヂアンに達するものと、葉爾羌からバミール高原を経てバダクシヤンに出で、乃至バロキル越を越えて印度のカシミールに出づるものと、及葉爾羌からカラコルム越を越えて、同じく印度のカシミールに達するものとの十道がある。東方から歐羅巴又は西南亞細亞に赴くには、どうしても此十道を通過しなくてはならぬ。目下西伯利鐵道が極東から歐羅巴へ行く最近距離の道路となつてゐるが、之は亞細亞橫貫鐵道が無いからだ。若し洛潼鐵道を延長して西安から甘肅を貫き、天山南北路を經、葱嶺を越えてアンヂアンに通ずる鐵道及蒙古から烏里雅斯台又は迪化(烏魯木齊)を經、亞爾泰山を越えて、セミバラチンスク又はシルダリア沿岸に出づる鐵道が出来たなら、極東の旅客及貨物は悉く此亞細亞橫斷鐵道に由るだらう。だから此露領土耳其斯坦に據るものは能く歐亞の交通を支配することが出来る。況んや此地に住する一千三百萬の住民は勇敢で、堅忍で、統帥者其人を得る時は、絶大の勢力を振ふことが出来る。昔者セルジュークは此地に起つて西方亞細亞の大部分を併呑して、歐羅巴諸國を震撼せしめた。花刺子模のモハメットは此地に起つて、西南亞細亞の大半を占領した。成吉思汗は此地を基點として、歐羅巴の半數と亞細亞の大半とを收めて、無比の大帝國を建設した。帖木兒は此地より起つて世界統一の大企圖を立てた。バベルも

亦此地から起つて莫臥兒大帝國^{モガール}を建てた。露國も亦此地に據つて西方及南方亞細亞を威壓した。此の如く土耳其斯坦は實に世界の頭部であつて、此に據るものは能く世界を制することが出来る。露國は嘗て此地を基點として印度侵略を企てた。彼は此地から波斯を壓迫した。彼は此地から支那を奪はうとした。今や露國は四離滅裂、殆ど收拾することが出来ない。此時に當つて一千三百萬のウラル、アルタイ族が奮起して強盛な國家を建るは、彼等が祖先に對する義務である。又彼等が亞細亞に對する義務である。彼等の獨立運動を援助するは總ての亞細亞人の義務である。特に亞細亞の先進國たる日本の義務である。

現大戰爭終結の後は、歐洲列國は何れも戦後の瘡痕を回復せんが爲に、近東及極東に向つて突進して來るだらう。土耳其格や波斯や支那は先づ第一に逐鹿場と化すであらう。此時に當つて亞細亞を保全し、彼等の搏鬪攘奪を制するのは日本が支那と提携し、印度を扶掖し、速に亞細亞橫貫鐵道を竣工して、方に獨立すべき土耳其斯坦を保護し、此要衝に立つて以て天下を睥睨するより外に道はないのである。我國民は速に支那の内争を調停鎮靜し、速に青島から蘭州、喀什噶爾^{カシガール}を経てアンヂアンに於て露國中亞鐵道と連結する大橫斷鐵道と、吉長鐵道を延長し、間島を経て清津に至り、更に吉長鐵道を西に延長して外蒙古を貫き、烏雅蘇斯台^{ウリヤススタイ}を経て土耳其斯坦に於て、露國の中亞鐵道に連接する大橫斷鐵道とを敷設しなくてはならない。日清日露の戰爭前は我國の國防の第一線は總論で述べた通り、朝

鮮に置いた。日露戰爭以後の我國は國防の第一線を滿蒙に置いた。現戰爭後は我國の第一線は支那國境で、其外線は中央亞細亞でなくてはならぬ。

風俗

○サルト人の衣服 サルト人はマホメット出生前の大昔の衣服を着て居る。衣服は袖は筒袖で、支那服のやうに行丈が長く、裾は膝の下位まで、ヒラ／＼して居る。襟は右衽で、腰の所で帯を締め

てゐる。縞の衣服を着てゐるものなどを見ると、丸で日本人のやうだ。唯袴が長いのと、頭にターバンを巻いてゐるのが違ふだけだ。

○剃髪 サルト人は髻が生へかゝつてくると、直ぐ頭を剃らなくてはならぬのである。其から鼻の下の髻は残らず剃つてしまふが、鬚は決して剃らない、赤子は一年経つと頭を剃る。女兒は七歳にな



族豪のドンカルマサ



トルサの花嫁

ると髪の毛を延ばすことを許さるのである。男児は恰度我國の昔の子供が「奴さん」を残したやうに田舎へ行くと今でも「奴さん」を残してある。又兩方の耳の上の所へ一總の毛を残して置くものもある。之は兩親が小供の行末幸あれかしと神に祈誓した印である。或るものは女の髪の毛を持つて來て此「奴さん」にくつけるものもある。

○土耳其斯坦の婦人 は決して人に顔を見せない。サルト人の婦人は外出の時は必ず黒馬の毛で編んだ被衣ヴェシムを被つて、我國の搔取かいどりのやうな長い袖の、引摺るやうに長い打掛を頭から被る。貧富の差は唯此搔取の品物の上等と並等とで見分けるばかりだ。室内では、婦人は被衣を外づして、顔をむき出してゐる。

○麵麩の尊敬 サルト人は我國の昔の人が御飯を尊敬して、之を粗末にすると眼がつぶれるといつたやうに麵麩を大層尊敬する。麵麩に脊中を向けると罰が當ると思つてゐる。客人が來た時客人の前



トルサの踊子

に麵麩を堆高く積むのは富の印である。ラマダン(回教の斷食祭、齋戒日)が済むと、各家では一片の麵麩を神棚へ上げて置いて翌年の斷食祭まで取つて置く。

○婚姻の仕度 娘が年頃になると、婚姻の夜具を自分でこしらへる。材料は粗いケンパスのやうな布と深紅色の絹とで、刺繡かじりがしてあればある程貴いのである。刺繡はサルト婦人が金曜日にやる唯一の針仕事である。

○踊子 中央亞細亞で一番面白いのは「バツチャ」といつて男兒の踊子である。此踊子は美少年で、女のやうな優やさ形でなくては成らぬのである。此踊子は十人か十二人一組となつて、親方に引連れられて都會から都會を渡り行く。親方は踊子を非常に慘酷に取扱ふ。彼は踊子が腹が減つて倒れかゝつても、毫も斟酌なしに踊らせる。ラマダン祭(斷食齋戒祭)の間は夜通し踊らせられる。踊子は髪を長く生やし前額ひたいの所を少し剃つてゐる。踊子の衣服は種々の色の華美はてやかなものである。頭には先が尖つてきつしり頭に合つ

て、周りに刺繡を施した立派な絹の帽子を冠つてゐる。足には鞣革の長靴ナシガハを穿いてゐる。踊子が踊る時に、親方は頭にターバンを巻付けて、手に蠟燭を持って踊子の顔を照らしてゐる。踊子は手を擡げて高く上げて、ぐる／＼／＼／＼獨樂のやうに音楽につれて廻轉す。其から音楽が烈しくなるに随つて益々速に廻轉する。音楽が止むと、彼等は一齊に一行に坐つてお辭儀をする。恰度我國の藝者や半玉が舞を終ると、扇をすぼめて坐つてお辭儀するのと同じである。

○帽子 サルト人の子供は剃髪して頭に毛がないから、屹度帽子を被る。大人でも先づ帽子を被つて其上に白いターバンを巻き着ける。サマルカンドで帽子の市が立つが、之は大したものである。華美な色の刺繡をした帽子が澤山山のやうに陳列してゐる。サルト人は食物よりも何よりも着物が一番費澤である。金さへあればどし／＼着物を買つて、一人で絹の上衣を十二枚位重ねて着る。炎熱燒くが如き夏日でも、寒い時と同じ様に五枚も六枚も重ねてゐる。

○潔癖 回教徒は總て潔癖で、一日に少くとも五六度口を嗽いだり手を洗つたりする。所がサルト人は他の回教徒よりは一層此の癖がある。暑い日には二十度位口を嗽いで手を洗ふ。その外一週間に一度づゝ洗湯に行つて湯に入る。布哈拉ブハラの王様は中央亞細亞の回教徒の法王となつて居る。彼は公式に外へ出る時は素敵に立派な儀容を張る。

○儀禮 サルト人の禮儀は普通握手である。長者は目下の者に手をさし伸べて何時でも握手させ



業 輕 の 人 ト ル サ
てい穿に駄下を棒い長ふ云とヤシマタ
るせ見てしを當藝な々色らがなきるあ

は神の思召しといふ時には平氣で死ぬ。

○葬式 彼等の葬式は簡單である。人が死ぬと布片で頸を括る。親類一同やつて来て、死骸を運び出す連中と一處になつて大聲を擧げて泣く。屍體は白いターバンでぐる／＼巻にして、おつ開きの棺臺に入れて、男の親類が擔つて寺へ持つて行く。従いて行く男は皆杖をついて、青い手拭をぶら下げて行く。之は喪章と同じ事である。棺も柩もない。墓穴は三尺位の深さで、側面に又一の横穴がある。死骸を此穴に投り込むと死骸は轉じて其横穴に入つて、恰度浮彫りにした地藏様のやうになる。それ

る。それが済むと兩手で鬚の處を軽く叩く。子供は八つから十一迄の間に割禮(耶蘇の洗禮と同じくマホメット教徒になる儀式で、陰莖の包皮を割く式である)を行つて其式が済んでから子供は始めて刺繡した帽子を止して、ターバンを巻き付けるのである。恰度日本の元服と同じことだ。サルト人は宗教狂である。彼等

から日本や支那のやうに、死骸の上に土をかける事をしない。死骸の頭は北向きにして置く。死後三日間は親類縁者が寄り集つて大變に嘆く。で食物などは誰も造るものがない。皆他處から運んで来る。男は喪服を着ないが、女は着る。遠い親類の時は青い着物を着て、近い親類の時は黒い喪服を着るのである。

○キルギス族

まの此位でサルト人の話は止めに置いて、キルギス人の話を少し許り述べて見やう。キルギス人は土耳其機斯坦と西部西伯利亞との境に在る高原に住んでゐる張幕人種である。彼等は非常に勤勉な種族である。彼等は始終サルト人の町へやつて来て、市を立て、賣買する、彼等は元來ウズベク族であるが、自分ではキルギスカイザックと云つて居る。彼等の忍耐や勤勉は顯著なもので、殊に女は最も困苦缺乏に堪へて仕事に精を出す。キルギス族の婦人は頭に大きな



女の族スギルキ
宗にうやの族種の近附は人婦の族此
いなあてれさ種束りまあ上會社上教

白い被衣を被つて、顔をむき出しにして、馬に横乗りに乗つて、町へやつて来る。キルギス人の住家は壘んで持つて歩かれる天幕で、周圍に土で壁を作つて野獸の侵入を防ぐ。だん／＼夏になつて来ると、平野から山地の方に家畜を連れて移住して行く。天幕を立てたり解いたり運んだりするのは女の役目である。だからキルギス人は女房を澤山持つて居るのである。一人の女房では天幕の始末が出来ないから、どうしても二人以上の女房が無くてはならぬのである。キルギス人は町に住んでゐるサルト人よりは餘程道徳心が強い。然し回教には餘り熱中しない。彼等の財産は、駱駝と馬と羊位のものである。彼等は馬乳で作つたクミイと云ふ菓子を澤山使ふ。平常の食物は主に馬肉である。彼等は馬乗の名人である。手綱は短



し探嫁の華基

るけかひ迫を女乙ふ思で上馬は年青ふ思とうら取を嫁はで華基
るす迎歡らな男なき好け却らうで續ばれよ近が男なひ嫌は女

くて幅が廣い。彼等は豊に馬に跨つてどんな處でも乗飛ばす。どんな峻しい山地でも、まるで平地を行くやうである。馬には蹄鐵もつけなければ拍車も使はない。



布哈拉的貴女

○土耳其族 今度は後裏海州に住んでゐる土耳其人
のことを手短かに話さう。土耳其人の住んでゐる町で、
一番有名なのはアスカバードとメルグとである。土耳其
人の住家は矢張り天幕であるが、キルギス人と違つて柳の
木で骨組を造つて革を張つたり、毛氈を張つたりしてゐ
る。天幕の中には色々器物があるが、彼等の一番貴重とし
てゐるのは鞍囊と祈禱用の毛氈とである。着物はキルギス
人とは違つて、丈が高く、餘り見つともよくない。帽子は黒
い羊の毛附きの皮のもちやくしたので造つてある。恰度
英吉利の龍騎兵の被るやうな帽子である。女はキルギス人
と同じやうに顔をむき出しにして居る。それから瑪瑙や、
其他の寶石で胸飾をしてゐる。他處へ出る時には全身銀づ
くめで、まるで白銀が歩いてゐるやうである。指輪も何も

皆銀である。

○角力 土耳其人は角力が大好きである。角力のある時は見物人が四方からやつて来て、恰度日

本の土俵をとり巻くやうに、緊しくと輪を作る。見物人は手に汗を握つて、自分の最角力の勝つ
ことを祈つてゐる。最角力が勝つと拍手喝采して、寄つてたかつて勝角力を胴上げにする。八方か
ら絹のハンカチーフが木の葉のやうに飛んで来る。

五 高加索

位置、面積、人口

亞細亞の西端に位置して北は露國に境し、東は裏海に西は黒海に臨み、南は波斯及亞細亞土耳其に
接してゐる。面積は十八萬一千二百方哩、人口一千二百九十二萬を算する。

人種、宗教

人種にはジョージア人、アルメニヤ人、スラヴ人、シルカシヤ人、カルムイク人、クルド人、ジ
ブシー人、ハチック察克人、波斯人、土耳其人等があつて、スラヴ人が一番多く、宗教はスラヴ人、アルメ
ニヤ人が基督教で、其他は皆回教である。

政治上の區劃

高加索山脈の北部を内高加索、南部を外高加索といひ、全國を七政廳（スタヴロポール、バクター、ブラツクシー、エリサベツトポール、エリヴァン、クタイズ、チフリリス）、五州（クーバン、テレーク、パトナム、ダゲスタン、カルス）、二巡回區（スクーム、ザカタリー）に分けて、廳と州とは露國の總督がゐて、事務を取つてゐる。

都市

首府をチフリリスといつて、人口三十萬七千ある。其他人口五萬以上の都市はバクター、サリヤニ、エカテリノダール、ヴラジカヴカズ、ノボロシイスク、スタヴロポール、エリサベツトポール、クタイズ等である。

産物

農産は主として地味肥沃な外高加索に多く、小麦、大麥、裸麥、燕麥、馬鈴薯、玉蜀黍、綿、乾草、葡萄等を産出し、又茶の栽培が盛んである。畜産は可なりで、馬、羊、豚等を産し、山地からは良材を出す。石油は物産の大王で、産額は實に世界第二番である。

日本との關係

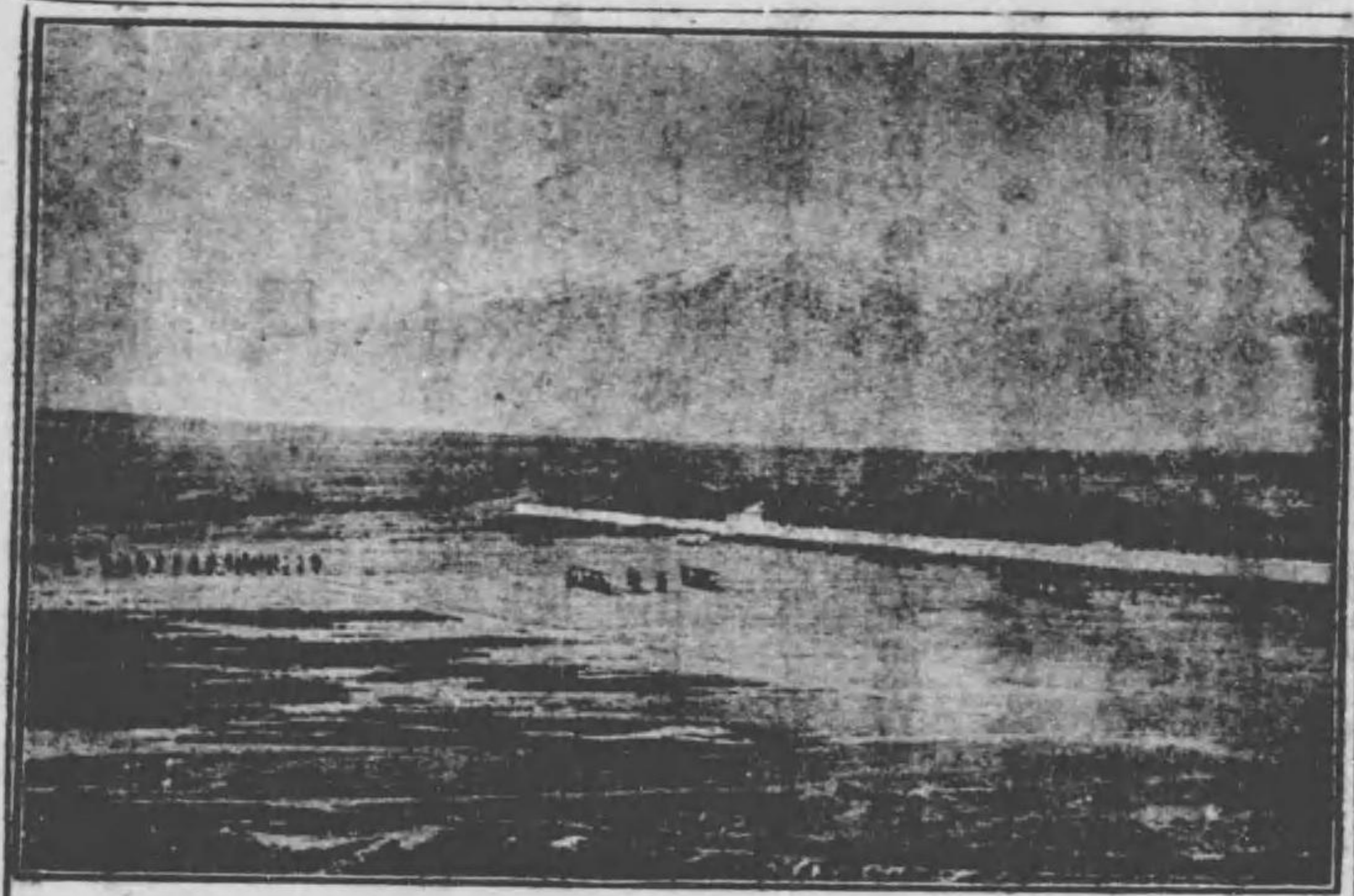
高加索と我國とは距離の遠隔してゐるのと、露國の管下にあつて、露國が中央亞細亞と同じく高加索を閉鎖して、他國人を入れないかつたのと爲に、今日迄は殆んど没交渉であつた。

歴史

高加索の名は希臘語の「リオン河口の豊饒な國」といふ意味ださうだ。黒海沿岸の地は希臘人の貿易場であつたり、又其植民地となつたり、歴山大王の版圖に入つたり、羅馬の將ボンツスの領土となつたりしたが、高加索連山は露國に征服されたまで、幾千年の間、決して征服された事はなかつた。海岸地帯と雖も、歴山大王の後裔と稱する一會長の下に、羅馬から獨立して長く獨立を維持した。

蒙古の將哲伯及速不臺が成吉思汗の命で花刺子模王マホメットを追撃しながら、西方諸國の情況偵察の爲め、裏海の南岸から侵入して來た時、高加索は蒙古三萬の鐵騎に蹂躪され、國都チフリリスも、鐵門關の稱あるデルベントも皆陥落したが、蒙古兵の通過すると共に獨立を回復した。

其後帖木兒が金翰爾朶（欽察汗國）を征伐した時、二回高加索を行軍したが、此時も單に道を強行通過しただけで、高加索の獨立は依然として保持された。高加索が古來各強國の間に介在してゐながら、常に獨立を維持してゐたのは熾々たる連山に依て國をなしてゐるから、外敵が近づけないのと、住民が慄悍であつたからである。



アアラツト山

高加索の山脈にあり、近隣の諸國の境に接する。其の地は、古くより、
高加索の山脈にあり、近隣の諸國の境に接する。其の地は、古くより、
高加索の山脈にあり、近隣の諸國の境に接する。其の地は、古くより、

一八二九年露國はアドリアノーブルの條約で、土耳其から高加索を讓與してもらつたが、土耳其は皇帝が唯回教の教主であるといふので、名義上高加索に宗主權を有つてゐたといふに過ぎない。其で露國も條約で高加索を領土にしたものゝ、高加索連山にはシルカシャ人といふ慍悍無比の種族がゐて、露國の管下に就くことを承知しないで、曠世の英雄シャミール（僧正）・カヂ・マホメットを推して、猛烈に露軍に抵抗したが、戦争の上期に於てシャミールは誤て露軍に生擒られた。然もシルカシャ人は猶ほ頑強に抵抗して屈しない。露國は高加索の重要なを知つて、全力を擧げて四十年を費やして漸く之を征した。そこで露國はこんな勇猛なシルカシャ人を要害堅固の大山寨に置くのは危険であるといふので、一百万のシルカシャ人を内高加索のクレーバン、テレークに移住させた。所が彼等は死んでも其んな所へは行かないといつて、皆土耳其格領に逃げてしま

つた。内高加索へ移住したのは僅に一萬人しかなかつたさうだ。かくて高加索連山は露國の版圖に入つたが、シルカシャ人の故郷を思ふ念は一日も止まない。露土戦争の時オーマル・バシヤーが二萬の兵で高加索へ上陸したら、カルス、エリゼルム邊に散在してゐたシルカシャ人は歡呼して之を迎へたが、土耳其格が戦敗したので彼等は遂に故山に歸る目的を達することが出来なかつた。連山以外の高加索の地は露國が十九世紀の初から一八七八年に至るまでに、波斯や土耳其格を撃つて取つたのである。

政治上の地位

高加索連山は裏海の濱から聳えて黒海の根に終つてゐて、延長七百哩、幅七八十哩から百二十哩に亘つてゐる。嘗ては此連山に勇敢無比な一百万のシルカシャ人が住んでゐて、勇將カヂ・マホメットの指揮下に四十年間露國の南下を支へた。露國は戦略上高加索の重要なことを知つたので、全力を擧げて此連山を攻撃した。

露西亞一億の民にして此攻撃に一臂の力を盡さないものは一人もなかつたといふことだ。一方老幼男女を擧げて一百万の勇者が面積十八萬一千二百方哩といふ大山岩に立籠つて、四十年間一億萬の大

敵を驅け惱ました此大攻城は、實に古今未曾有の大壯觀である。若しシルカシャ人にホメロスの如き大詩人や、司馬遷の如き大歴史家がゐたら、此攻城はトロイの戦争よりも、戰國七雄の争よりも、乃至漢楚の戦よりも、遙に面白い詩となつて萬世に傳はつたらう。惜い哉シルカシャ人に詩人なく、露國亦之を載籍に傳へなかつたから、全く世に知られないで埋没してしまつた。

かくて高加索は從來世人に閑却されてゐたが、此地は實に歐亞に跨つて東亞交通の咽喉に當つてゐる。若し此連山に強力な民族が據つてゐたら、歐羅巴から亞細亞に通ずる公道を管制することが出来る。即ち露西亞平原を通つて西伯利亞又は中央亞細亞に出づる大道は全然其管制に歸してしまふ。中央歐羅巴から中央及南方亞細亞に通ずる公道も亦此連山の爲に管制されるのである。英國は露國が此地から印度を攻撃することを懼れて、極力之が南下の策を講じた。彼は之が爲に波斯と三たび同盟した。而して三たび波斯を裏切つた。彼は之が爲に佛國と同盟して哥里米戰爭を起した。彼は之が爲に露土戦争に干渉した。彼は之が爲に亞富汗を其管下に置いた。彼は之が爲に日本と三たび同盟した。然れども彼の歴代の政治家はバーマルストーンでも、ビーコンスフィールドでも、一人として高加索に着目したものはない。若し英國の政治家が此連山に着目したら、而して哥里米戦争の時、セバストポールを攻撃する力を高加索に向けたら、恐らく露國は中央亞細亞を占領する事が出来なかつたらう。而して印度侵略の野望を放棄したらう。若し英佛土の連合軍が高加索に據つて、而して英佛の軍艦が裏

海に浮んだら、中央亞細亞の諸汗國は勿論聯合國の管下に歸し、露國は實に其側面を脅かされるのを恐れて中亞に進軍しない許りでなく、ヴォルガや烏拉爾河すら越えることは出来なかつたらう。即ち印度は安全で、英國は枕を高くして他の方面を經營することが出来たらう。

中歐から土耳其格を通過して中亞又は印度に出やうと計畫したものは、昔はさて置き、近世では佛國の那翁一世と獨逸のウイヘルム二世だらう。此兩人は流石に不世出の英雄だけあつて計畫が大きい。然し那翁もウイヘルムも、高加索に就ては氣が付かなかつたやうだ。那翁はジャルダン將軍を波斯にやつて波斯と同盟し、道を波斯に取つて印度を侵略しやうとしたり、露のホール一世や歴山一世と同盟して、ドン河からアストラカンに出で、其れから船でアステラバードに出で、更らにヘラートに進んで印度に侵入しやうとしたが、高加索は看過してしまつた。若し那翁があの時先づ高加索に手をつけたなら、印度侵略の基礎が固まつて、波斯も北方から露佛に攻撃されるのを恐れて、英國の黄金に欺かれなかつたらう。さうしたら那翁はあせる必要なく、徐々印度の侵略が出来て、セーント・ヘレナの憂き目を見ずに済んだらう。而して亞細亞の狀態は今日と異つたらう。

若し夫れウイヘルムに至つては、那翁と狀況が異つてゐる。那翁は露國と同盟したが、ウイヘルムは露國を敵としてゐる。其代り土耳其格を味方にしてゐるから、智慮ある考を有つてゐたら、土耳其格を扶けて全力を擧げて高加索を撃つべきであつた。高加索連山が取られたら、露國は中々獨逸の國境

に全力を擧げることには出来ないで、大部分の兵を東南方に旋回するから、獨逸の東部戰場は大に緩和して、十分の攻撃力を西部戰場に向けることが出来たらう。さうなると伊太利や羅馬尼は聯合軍に附かないで、戦争は案外早く獨逸の勝利に歸したかも知れぬ。然るにウイヘルムは高加索を閉却して、徒にバグダードの枝葉地點に目を注ぎ、然もバグダードと雖も餘り力を入れなかつた爲め、伊太利や羅馬尼を逸して敵にしまつた。

高加索の戰略上重要なことは實に此の如くである。嘗て埃國のゴルホフスキー伯が高加索に就いて論じたことがある。彼は哥里米戰爭當時、同盟軍が高加索に兵を上陸したら、露國の爲に其故郷を奪はれた一百万のシルカシャ人が歡呼して之を迎へ、高加索は忽にして聯合軍の手に歸したらうといつた。寔に適切の言である。今や露國は瓦解して戰前の面影を止めない。而して露國が従前通りの大國を維持すると、乃至數個の小獨立國に分裂するとに關せず、獨逸の勢力は滔々として露國の各脈管に侵入するだらう。而してウイヘルムが高加索の重要を覺つて之に其勢力を扶植し、一朝事ある時は、一軍は此連山から一直線に波斯及中央亞細亞に下り、一軍は小亞細亞の公道から堂々と進軍したら、其こそ大變である。英國は最早一日も枕を高うして安眠することが出来ないだらう。波斯は一擧して獨逸の手に落つるだらう。亞富汗も亦獨逸の手に歸するだらう。かくて獨逸の大軍が印度河に現はれたら、英人の統治に不平を抱いてゐる印度三億の民は歡呼して獨軍を迎へて英人を驅逐してしま

うだらう。かくて英人は遂に亞細亞から手を引かねばならぬ事になるだらう。

英人が印度から手を引いたからとて、其代り印度は恐るべき獨逸を迎へなければならぬから。吾人亞細亞人は無暗に之を喜ぶ譯には行かぬ。三億の印度人も亦一時の怨恨を晴らす爲に、新に永久の惡魔を迎へるやうになるから、餘程考へなくてはならぬ。則ち高加索を獨逸の勢力下に置く事は極力之を防がなくてはならぬ。英人の壓制は厭ふべしと雖も、獨逸の毒手は更に亦恐ろしいから、吾人は英を扶けて獨逸の東進(Drang nach Osten)を防がなくてはならぬ。而して又露國を扶けて高加索を保持させ、之を他人の手に渡さないやうにしなくてはならぬ。而して高加索は各國に向つて門戸を開放し、機會均等の主義を確立しなくてはならぬ。吾人は今や我が最大限度の國防線を支那國境に置かなければならなくなつたから、又我が文明圈を歐亞の國境に進めなければならなくなつたから、高加索の門戸を開放し、機會均等の主義を確立して、以て獨逸の野望を挫かなくてはならぬ。

風俗

高加索の住民は、今ではスラヴ族が一番多くなつて來たが、純高加索的の風俗は矢張り舊時の大勢力であつたシルカシャ人に於て窺はれるのである。

彼等の階級には貴族と平民と奴隸との三つがある。貴族は會長の一門で、奴隸は戦争で捕はれて來



アメルニヤ看護婦

彼等は又長幼の序を守つて、年長者には絶対に服従する。同時に勇敢で愛郷心が強く、萬事古のヌバルタ人を思はしめるものがある。唯彼等の疵とすべきは、平氣で子供を賣る習慣で、高加索の娘は屢

た他種族の俘虜が、酋長や貴族の奴隷となつたものである。無智文盲の彼等の社會には、一定の法律規則はないが、昔からの習慣や、傳説や、又は回教の教訓によつて能く秩序が保たれてゐる。一般の風俗は土耳其格や、其他の回教徒と異りはないが、婚姻の仕方だけには著しい特色がある。

結婚したいと思ふ青年は先づ兩親の許しを受けるのである。次に約束しただけの身の代金を金や、馬や、牛や、羊で女の親に支拂ふ。それが済むと青年は五六名の友達と一處に武裝して、花嫁の家に乗りこんで、盜賊が掠奪でもするやうに花嫁をかつ擡つて来る。かくして同棲した花嫁花婿は、他の回教徒と異つて嚴に一夫一婦を守つて、友白髪まで添ひ遂げるのである。

々一夫多妻主義の土耳其格や、其他の回教國民から妻にと購はれて、萬里の異郷に涙に袖を濡らしてゐる。

現在の住民はスラヴが一番多いが、之は歐洲人であるから茲には記さない。露國瓦解の結果、遠く異郷に在つて、夢寐にも其故土を忘れなかつたシルカシヤ人が、之からドシく還つて来るだらう。



トルク人の婦人

六 亞細亞土耳其格

位置、面積、人口

亞細亞の西南部に位する小亞細亞、アルメニヤ、クルヂスタン、メソポタミヤ、シリヤの總稱であつて、北は高加索山脈で露國に境し、東は波斯に接し、南は亞刺比亞に連り、黒海に臨み、マメルラ

海を距て、歐羅巴土耳其に隣し、西は地中海に濱してゐる。面積は五十二萬九千方哩で、人口は一千八百萬を算する。

人種 宗教

人種は土耳其人、希臘人、シリア人、クルド人、シルカシヤ人、アルメニヤ人、猶太人、亞刺比亞人等で、土耳其人が一番多い。宗教は回教が最も多くて人口の過半を占め、其他は基督教と猶太教とで、希臘人が希臘教を、シリア人が羅馬舊教を、アルメニヤ人がアルメニヤ舊教を、猶太人が猶太教を奉じてゐる。

政治上の區劃

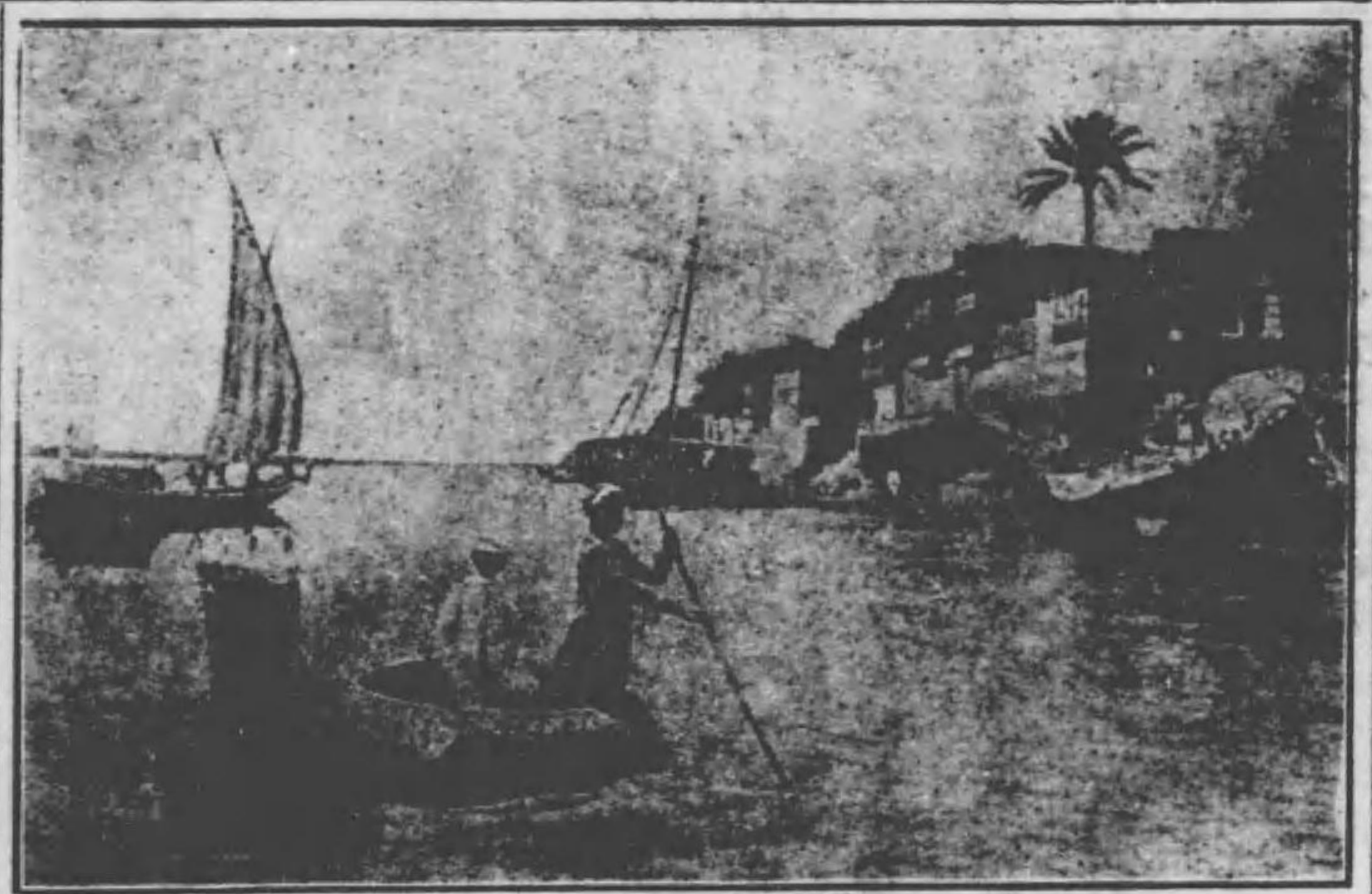
全土を州に分け、州には土耳其格皇帝の總督がゐる。即ち小亞細亞に三州、アルメニヤ及クルヂスタンに五州、メソポタミヤに三州、シリアに六州であるが、中で小亞細亞のイスマド及ビガの二州と、シリアのゾール及エルサレムの二州との四州が自治州になつてゐる。

都市

人口五萬以上の都市はスミルナ(三十七萬五千)、ダマスクス(二十五萬)、アレツボ(二十五萬)、バグダード(二十二萬五千)、エルサレム(八萬五千)、バストラ(八萬)、モースル(八萬)、シヴァス(六萬五千)等である。

産物

農産は棉、麻、烟草、大麥、野菜、珈琲等で、果物の産出も亦中々多い。即ち葡萄、莓、蜜柑、桑實、無花果、巴旦杏等が多く採れる。木材は松、樅、樅、落葉松等が産する。鑛産は金、銀、銅、錫、眞鍮、亞鉛、鉛、鐵、マンガ、アンチモニー、硼砂、海泡石、金剛砂、石炭、クローム、アスファルト、ベトロリウム、鹽等で、此中銅が一番多い。



バグダード市とチグリス河

日本との關係

土耳其は其先祖が日本と同種族であつたと云ふ説から、明治二十三年有名なアレツボの兵將オスマン、バシヤの總督少將エム

メソポタミアを特選使節として我國に廻り修交を求め、我國でも大に之を歓迎したが、また具體的に通商條約締結の請列を開始し及ばなかつた。其使節が歸途紀州灘で、其乗艦エルトグロール號がノルマントン號と衝突して沈没し、使節は艦長フリー・ペーを始め約二百名の乗員と共に溺死してしまつたから、我國は其生存者六十九名を金剛、比叡の兩艦に乗せ、親切に君府へ送つてやつたので、それ以來、同國民は日本に對して頗り好感情を有つやうになり、日露戦争後は一層其度を進めた。其後再び通商條約締結の交渉が開かれたが、治外法權の條で抄らずに居た中に、今度の歐洲戦争となつて、交渉が斷絶したのたは遺憾である。

歴史

メソポタミアの地は埃及、印度及支那と同じく、人類の歴史中で最も古く開明に赴いた所である。今を去ること三千四五百年以前カルデアといふ國があつて、天文、數學、建築、曆法等が發達し、文字もあつて中々隆盛であつたが、紀元前一二五〇年の頃アッシリアに滅された。

アッシリアは、カルデアを滅してから、リヂア(今の小亞細亞)、メヂア(今の波斯の北部)、波斯(現在波斯の南部)、バクトリア(今の亞富汗)、猶太(今のシリアとパレスチナ)及埃及を征服して、大帝國を建てたが、紀元前六二三年北方の蠻族シキシア人の侵入を受けて國勢衰へ、其屬國バビロニアの爲に滅された。バビロニアはアッシリアに代つて此地方の強國となり、大に文化を進めたが、紀元前五三八年波斯の爲に滅された。

波斯はキロス大王の建國した所で、元來は伊蘭高原(中央波斯)の蠻族であつた。其子のキロスも不出世の英雄で、メヂア、リヂア及バビロンを征服して、今の亞細亞土耳其格全部と波斯、亞富汗、俾路直(アフガニスタン)及中央亞細亞の阿母河以南の地を版圖とした。後波斯は希臘と戰つて敗北し、希臘の一邦マケドニアの歴山大王に滅された。

歴山大王は遠征軍を起して、中央亞細亞、印度及埃及を征服し、都をバビロンに定めた。大王の版圖は希臘、巴爾幹半島、亞細亞土耳其格、埃及、波斯、亞富汗、中央亞細亞(シルダリヤ以南)及印度の一部に亘り、未曾有の大帝國であつた。紀元前三三三年大王が死んでから、其國はマケドニア、條支及埃及の三強國に分裂し、亞細亞土耳其格の地は條支王セリュエクス^{セルセウス}の統治に歸した。後條支國は衰運に向ひ、東部は安息國に、西部は羅馬に分割された。

羅馬と安息とはユーフラテスを境として、兩々對峙してゐたが、紀元二二六年波斯にアルドシルと云ふものが出て、安息を滅してササン朝を興し、屢々羅馬軍を破つてメソポタミア以東に雄視した。紀元五三一年から五七八年に亘り、ササン朝の波斯王コスレス二世は東羅馬帝國に侵入して、アンテオクを陥れたが、ユスチニアン帝に破られて退却した。帝は名將ベリサリウスを用ひて、波斯、亞弗利加、伊太利を征服した。然るに帝の歿後、國勢が振はなくなつたので、波斯の爲に亞細亞領を侵略されて僅に小亞細亞を残すのみであつたが、サラセン人が亞刺比亞に勃興するに及んで、波斯は先づ之に滅

され、次いで東羅馬の亞細亞領は悉くサラセン國の領土となつた。
茲でちよつとサラセンのことを話さう。亞刺比亞は五六世紀頃までは實に蒙昧野蠻で、國家もなく、



落部居穴の岸河スリグチ

國民もなく、唯遊牧民が水草を逐つてゐたに過ぎなかつたが、五七〇年マホメッドがメッカに生れ、回教を開くに及んで、亞刺比亞を統一して、サラセン帝國を建てた。その子孫は法王兼國王となつてカリフと稱した。支那史上にいふ大食國は之れである。

マホメッドの死後、世々のカリフは皆能くその遺志を紹いで、兵力で回教を擴布し、四方を征服して一大帝國を建設した。即ち第三代のカリフのオーマルはシリヤ、ユジプト及波斯を併呑した後、更に中央亞細亞から今の新疆に侵入し、ムーザ・カリフは亞弗利加の北部と、地中海の沿岸諸國とを平げた。後更に西班牙に侵入して之を征服した。

そこでサラセン帝國は東は印度河から西は西班牙に及

んで、都をバグダードに奠めて、回教の隆盛と共に大に繁榮したが、七五五年アバシッドとオミアツドとが、カリフの位を争つて戦つたので、サラセン帝國は遂に東西の二部に分裂して、各一方のカリフとなつた。即ちアバシッド家が東部サラセン帝國のカリフとなつて、バグダードに都して、東は印度河から西は亞弗利加の北部に至る間を領有し、オミアツド家が西部サラセン帝國のカリフとなつて、ゴルドヴに都して西班牙全國を治めた。西部サラセン帝國は後にカロロ大帝の爲に、エブロー河以北の地を奪はれて、漸次に衰へた折柄、亞弗利加から侵入して來たムール人の爲に滅された。

東部サラセン帝國も其後次第に衰微し、西突厥の餘族セルジューク家に滅された。セルジュークはメンボタミア、シリア、バレスチナ及小亞細亞の大半を略有して、東帝國に迫つたので、歐羅巴諸國は十字軍を起して之を防いだ。一一七四年埃及のサラセン人サラチンが出て、殆ど亞細亞土耳其の地を略有したので、歐洲諸國は第三回十字軍を起して、之を撃退しやうとしたが、成功しなかつた。一二五八年成吉思汗の孫旭烈兀は波斯から進軍して、バグダードを陥れ、小亞細亞を征服して、伊兒汗國を建てたが、後國勢衰へ帖木兒に滅された。此時オットマン土耳其が盛んになつた。オットマン土耳其はもと中央亞細亞の一部落であつて、蒙古人に壓迫されて、小亞細亞に移つて、タウルス山に匿れてゐたが、オットマンが出てから俄に強大となつて、東羅馬帝國の亞細亞領を蠶食し、更に海を渡り歐洲に侵入して、トラキアを征服し、アドリアノーブルを陥れて都を此處に奠め、次いでマケドニ

ア、希臘等を併せ、匈牙利の邊境を侵した。そこで東羅馬皇帝は帖木兒に援を乞うたので、帖木兒は小亞細亞に進んで、一四〇二年アンゴラの戦で、大に土帝バジヤゼットの軍を破つて之を虜にし、亞細亞土耳其格の大半を版圖に加へた。

帖木兒が死んでから、其國が分裂して互に争つたので、土耳其格は國勢を恢復して歐洲諸國の同盟軍の攻撃を撃退し、遂に東羅馬帝國を滅してコンスタンチノーブルを占領し、又亞刺比亞をも征服してしまつた。斯くて土耳其格の領土は東は波斯の境から、北は黒海の沿岸地方、ブルト河以南の巴爾幹諸國、南は亞刺比亞、西は亞弗利加の北岸一帯の地を領有して近東の大強國となつた。

爾來土耳其格は國勢亂れ、一五七一年露國と戦つて、その海軍がレバントで大敗し、以來漸次衰微して露國の勢力が盛んになつて、黒海北岸一帯及多瑙河以北の地を失つた。十九世紀に入つて國勢愈々衰へ、財政の紊亂甚しくなつたので、ボスニア、ヘルツェゴヴィナが先づ反亂し、次いで勃牙利が反き、一八七七年の露土戰爭を惹起した。此戰爭は土耳其格の大敗で、有名なサン・ステファノの條約で、土耳其格は歐羅巴土耳其格の大部分を失ふに至つたが、後柏林條約によつて多少領土を回復した。然も露西亞は高加索のカルスやバツウムの諸要地を取り、英國はキプロス島を取り、埃匈國はボスニア、ヘルツェゴヴィナを占領した。其他勃牙利、羅馬尼、黒山國、希臘等が獨立して、幾分づゝ領土を擴げた。而も之ればかりには止らないで、伊國はトリポリを取り、佛蘭西はチュニスを取つた。後埃及の

獨立事件が起つたので、英國は埃及の主人となつてしまつた。

爾來土耳其格は伊國と戦ひ、希臘と戦ひ、勃牙利と戦つたが、其度毎に幾分かづゝ損をしたので、今度は愈々獨塊に味方して、失つた土地を回復しやうとしてゐるが、根底から腐敗した土耳其格は、能く此の頽勢を挽回することが出来るかどうか、土耳其格の將來は實に興味が多いと同時に、危険至極のものである。

政治上の地位

亞細亞土耳其格の地は常に歐亞交通の要衝であるばかりでなく、東歐と西歐との交通にも亦重要となつてゐる。露國や、羅馬尼や、勃牙利で出来る産物は皆一旦黒海に出て、其れからボスフォラス及ダーダネルスを通つて地中海、大西洋乃至北海沿岸の諸國に行く。故に此等の貨物は一たびヘレスポンドで遮斷されると、全く西歐へ供給することが出来なくなる。西歐の産物も亦必ず此海峡を通過しなくては、東歐に輸送することが出来ない。

次に中央歐羅巴から中央亞細亞、印度及極東に赴く陸上の大道は皆土耳其格に集中してゐる。阿弗利加の南端を迂回する航路を發見しない前は、東方への交通は皆土耳其格を通過する陸上の大道に依つたものである。喜望峯航路發見以後と雖も、陸上の交通は幾分保たれてゐたが、蘇士運河の開鑿と共に